臼田町埋蔵文化財調査報告書第11集　1996

幸神古墳群

－佐久平南限群集墳の試掘・確認調査－

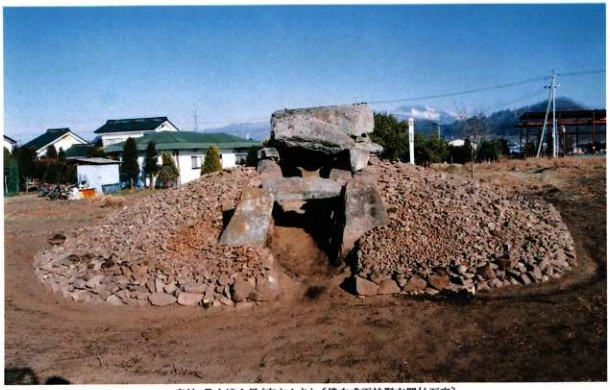
平成8年3月

長野県南佐久郡臼田町教育委員会

1. 新海神社西御陵古墳全景(南方より)〔横穴式無袖型石室〕
(墳裾列石は大部分復元)

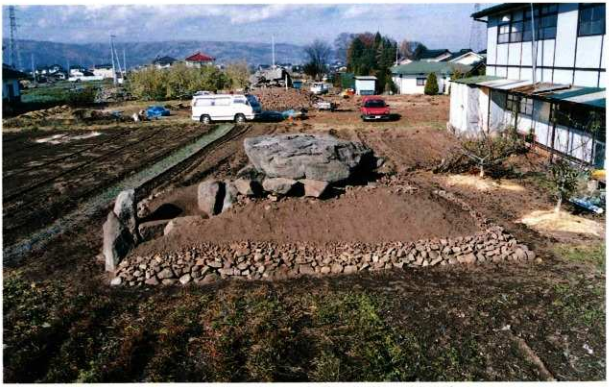
2.新海神社西御陵古墳石室全景(南方より)
〔横穴式無袖型石室〕

3. 新海神社新発見古墳石室全景(南方より)
〔横穴式無袖型石室〕



1. 幸神1号古墳全景(南方より)〔横穴式両袖型玄門付石室〕
(墳丘の裾は復元)

2. 幸神1号古墳全景(東方より)
(墳裾は新海神社の敷地内いっぱいに列石した。)



1. 幸神2号古墳全景（東方より）〔横穴式両袖型玄門付石室〕
（墳裾の列石は復元）

2. 外九間1号古墳全景（南方より）〔横穴式両袖型玄門付石室〕
（墳丘の礫は耕作で集められたヤックラ）

1. 中原1号古墳玄室左側壁の石積み

2. 中原2号古墳全景(南方より)〔横穴式両袖型玄門付石室〕
(墳裾の列石は復元)

序

臼田町教育委員会
教育長　新　津　真　澄

臼田町は、昭和61年から３ヶ年にわたって、国宝重要文化財等保存整備国庫補助事業により、町内全域の遺跡詳細分布調査を行った。この調査の結果、194件におよぶ先人の壮大ないとなみでもある貴重な資料や文化財を整備することが出来た。

千曲川水系の南限ともいわれる臼田町の古墳は、50基と多く所在するが、道路整備、土地改良、団地造成等に関連して、部分的には発掘作業を実施してきたが、このたび雨川北岸にある古墳群について、幸神古墳群試掘調査費を文化庁、長野県から補助を得て、平成６年、７年の２年間で、幸神古墳群、新海三社神社裏御陵古墳群等15基の清掃確認のための試掘を行った。この調査で新しい古墳が発見されたり、出土品等貴重な資料をまとめて報告書を刊行するはこびとなった。なお、確認調査を一応終えた段階で、古墳研究の権威者でもある東京家政学院大学教授岩崎卓也先生の現地調査の指導助言を受けたところ、各地籍別古墳の築造に夫々差異があることが推定された。それは、幸神１号～６号古墳グループ、外九間１号～３号古墳グループ、中原１号～２号古墳グループは、古墳の平面形が羽子板状となっている両袖式である。しかし、このグループの中、玄門の構造で門は柱状の大形石を立て、その上に横架する楣（まぐさ）石が置かれている幸神グループと、中形石を２～３段に積み重ねている外九間、中原グループに分かれており、両者は石室内も大形石だけのもの、小形石だけで積み重ねるものがいが見られる。なお、玄室と羨道が一直線に連続する無袖式が、新海三社神社裏古墳グループであった。このように、構築のものがいは設計者が夫々別人で、地籍別に氏族の異なる人々の集落であったことがうかがわれる。これら15基の古墳は、大部分が盗掘されており、玄室底面まで清掃整備したところ、底面直前で盗掘を中止したもの、盗掘時に残した副葬品等が出土したところもあった。

いずれにしても今回の試掘調査によって、西御陵古墳のように南面中腹の傾斜地で、自己の統治する領地が一望のもと見渡せる場所に位置し、武器である鉄鏃が多く出土してその全貌を現したり、数多くの出土品も興味深くこの分析が期待される。そして、町は長期振興計画にも公園化を含めて組み込み、今後の保存整備の方途を検討し、その実現を期している。

終りに、２ヶ年にわたる試掘調査にあたって、古墳周辺の土地所有者の皆さんのご協力はいうにおよばず、率先して土地提供を申し出された小林一秋氏ならびに大塚博氏とともに、終始格段のご配意をいただいた区長柳沢良一郎氏、新海三社神社宮司、同氏子総代の方々に衷心より感謝申し上げます。また、調査にあたられた団長三石延雄さんをはじめ団員の皆さん、とりわけ郡誌常任編纂委員でもある担当者島田恵子氏を派遣して下さった、南佐久町村会事務局長さんに深甚の敬意を捧げ、本書が広く活用されることを祈念する。

平成８年３月

例　　言

1．本書は、長野県南佐久郡臼田町大字田口字幸神4808番地ほかに所在する、幸神古墳群の試掘・確認・清掃調査の調査報告書である。

2．本調査は、国庫補助事業により臼田町教育委員会が実施した。

3．初年度は、平成6年9月1日から調査に入り12月10日で現場作業を終了した。その後3月まで整理作業を行い、次年度調査は、7月19日～10月17日まで現場作業を実施し、引続いて整理、報告書作成を3月まで行った。

4．本調査は、長野県考古学会員三石延雄を団長とし、南佐久町村会の全面的協力（担当者島田恵子派遣）のもとに、佐久考古学会員、地元田口地区他の方々の協力を得て実施した。

4．本調査報告書作成の作業分担は以下の通りである。

現場遺構実測図作成――佐々木春蔵・柳沢春子・油井秀雄・島田恵子

遺構実測図の整理・トレース――島田恵子

遺物洗浄・整理・復元――佐々木春蔵・新津きし・籐原雅子・島田恵子

遺物実測・トレース――島田恵子

拓　　本――新津きし

図版作成――島田恵子

6．本書の執筆は下記により分担した。尚、文責は文末に明記してある。

第1章　第1節　事務局、第2節　島田恵子

第2章　第1節　白倉盛男（故）、第2節　由井俊三、第3節　島田恵子

第3章　調査内容　島田恵子　　人骨所見　町田拓也　歯牙所見　石井宏昭

第4章　第1～3節　島田恵子　第4節　丸山正俊　第5節　井出正義

7．本書に掲載した遺構・出土遺物の写真は、島田が撮影したものを使用した。

8．本書の編集は島田が行い、三石延雄団長が校閲・監修した。

9．本遺跡の資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されて、臼田町文化センターに展示（平成8年秋から）されます。町民の皆さんに広く活用していただきたい。

10．本調査・本報告書作成に関しては地元原地区の柳沢良一郎区長さんをはじめ、新海神社総代長高橋重二郎さん、伴野慎一郎・井出舜神官さん、地主の皆さん、古墳周囲の皆さんに大変お世話になり厚く御礼申し上げます。また、報告書作成にあたり南佐久郡誌刊行会の一室を借用し、南佐久町村会事務局の布施元広局長に絶大な御援助を賜り、南佐久郡誌刊行会事務局長佐々木秀雄氏にお世話になりました。さらに、以下の方々から貴重な御助言・御協力をいただきました。ここに御芳名を記して厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

酒井順一・字賀神誠司・臼田都雄・佐藤　敏・宿岩善人・加藤都雄・大塚　博・大塚佐久男・小林一秋
小林政則・小林新治・佐々木辰雄・籐原　登・志摩五男・志摩末吉・田中喜久雄・大工原昭二郎・竹内正人
半田国男・土屋豊二・柳沢　保・柳沢寅夫・柳沢悦雄・山宮　旭・井出　衛・中条忠雄・鷹野三弥・油井千弘
油井あき子・志摩一夫・竹内光平・臼田神三・大塚丑雄・田中文雄・中条徳之助・山崎誠一・丸山幸一
一之瀬竹治郎・字井光人・中島正道・内藤英雄・宮沢久雄・野沢昇一・山崎輝男・小須田今朝人・井出洋子
新津きみえ・市川長太郎・佐塚滋男・高見沢稔・塩谷　鼎・三石秀寿

臼田町文化財調査委員・郷土の歴史を学ぶ会（老大卒業生）・学習会ふるさと・野沢南校田口支部
翔友会・文化協会田口支部・宮代常一　小海町志編さん委員・小海町志を読む会・羽黒下分館（歴史散歩）
古道研究会

凡　　例

1　本調査は、古墳群の試掘・確認調査を主に実施したが、古墳を覆っている一面の藪の除去など調査の前段階となる清掃にかなりの時間を要した。石室はできるだけ記録にとどめるよう、危険のない部分は詳細に実測する方針をこころがけた。また、撹乱・盗掘のはっきりしている石室ならびに天井石がなく破壊のすすんでいる古墳は今後の盗掘を避けるため棺床面まで掘り下げ清掃を行い、崩れた石などを整備しながら復元を試みた。

新海神社地以外の個人所有地の古墳は、全てヤツクラ化していたので積んであった礫を取り除いて調査にあたり、終了後はまた元の姿に戻してある。そのため全体写真は従来の古墳としての墳丘でなくヤックラとなっている。また、羨道は全て破壊され消滅しているとおもわれるが、羨道部分は畑の栽培植物の関係から調査できなかったので図示できなかった。

2　各古墳の記述は、1．立地　2．規模・構造──→墳丘──→内部構造（石室形式・玄室・壁体・羨道・その他）　3．出土遺物の順に行った。

3　古墳名は、昭和63年発行の「臼田町遺跡詳細分布調査報告書」の登録に従った。

4　標高は、各古墳毎に基点を設置して、水糸標高を「標高」として示した。

5　各表の数値は、不明は－、残存値( )とした。

6　挿図の縮尺は次のとおりである。

墳丘全景図→1／200　石室全体図→1／60　玄室実測図→1／40　土器→1／3　大形須恵器→1／4
鉄鏃→1／2　刀→1／3、1／4　刀子→1／2　装飾品→1／1

規模・大きさに差があり統一できない大形のものに限り縮尺が異なるが、スケールに各々記してある。

7　挿図中に貼付してあるスクリーントーン、土器断面黒色は、以下のことを表す。

遺構　地山断面──斜線

遺物　土器（内面黒色）──点　　須恵器断面──黒色

8　図版中の遺物は煩雑になるため挿図No.を一括してある。縮尺は以下の通りである。

鉄鏃1／2、大刀・小刀・刀子1／3～1／5、装飾品1／1、土器1／3、須恵器甕類1／4、
人骨1／3、歯牙1／1

なお、統一できない大形のものは縮尺が異なるが各々に記してある。

本　文　目　次

序 …… 臼田町教育長　新津真澄
例言・凡例
本文目次・挿図目次・付表目次・図版目次
第1章　発掘調査の経緯 …… 1
第1節　発掘調査に至る動機 …… 1
第2節　発掘調査の概要 …… 1
第3節　発掘調査日誌 …… 2
第2章　幸神古墳群の環境 …… 4
第1節　原遺跡の自然環境（地形地質を中心として） …… 4
第2節　古墳石室使用の溶結凝灰岩について …… 5
第3節　考古学的環境 …… 7
第3章　調査内容 …… 14
新海神社中御陵古墳 …… 14
新海神社東御陵古墳 …… 19
新海神社新発見古墳 …… 23
新海神社西御陵古墳 …… 30
五庵古墳 …… 37
幸神1号古墳 …… 43
幸神2号古墳 …… 53
幸神4号古墳 …… 58
幸神5号古墳 …… 65
幸神6号古墳 …… 67
外九間1号古墳 …… 70
外九間2号古墳 …… 75
外九間3号古墳 …… 76
中原1号古墳 …… 78
中原2号古墳 …… 84
幸神古墳群出土古銭 …… 100
幸神古墳群出土人骨 …… 103
第4章　考　察 …… 110
第1節　古墳の構造 …… 110
第2節　鉄　鏃 …… 116
第3節　古墳分布・構造からみた古代社会 …… 118
第4節　五庵古墳出土の瘤鎌 …… 122
第5節　臼田町田口地区に所在する古墳群を中心とした歴史的環境 …… 127

引用参考文献 ……130
あとがき ……調査団長 三石延雄 131

挿図目次

第1図 臼田町古墳群および周辺遺跡分布図 ……8
第2図 英田地畑古墳出土蕨手刀・直刀実測図 ……11
第3図 新海神社中御陵古墳全景実測図 ……14
第4図 新海神社中御陵古墳石室全体図 ……15
第5図 新海神社中御陵古墳玄室実測図 ……17
第6図 新海神社中御陵古墳出土鉄鏃・装飾品実測図 ……18
第7図 新海神社東御陵古墳全景実測図 ……20
第8図 新海神社東御陵古墳石室全体図 ……21
第9図 新海神社東御陵古墳玄室敷石状態図 ……22
第10図 新海神社東御陵古墳出土鉄鏃・耳環実測図 ……22
第11図 新海神社新発見古墳全景実測図 ……23
第12図 新海神社新発見古墳石室全体図 ……24
第13図 新海神社新発見古墳玄室実測図 ……25
第14図 新海神社新発見古墳出土大刀実測図 ……26
第15図 新海神社新発見古墳出土刀子・鉄鏃実測図 ……27
第16図 新海神社新発見古墳出土装飾品実測図 ……28
第17図 新海神社新発見古墳出土装飾品実測図 ……29
第18図 新海神社西御陵古墳全景実測図 ……31
第19図 新海神社西御陵古墳石室全体図 ……32
第20図 新海神社西御陵古墳玄室実測図 ……33
第21図 新海神社西御陵古墳出土小刀・刀子実測図 ……34
第22図 新海神社西御陵古墳出土鉄鏃実測図No.1 ……35
第23図 新海神社西御陵古墳出土鉄鏃実測図No.2 ……36
第24図 新海神社西御陵古墳出土耳環・石製品実測図 ……37
第25図 五庵古墳石室全体図 ……38
第26図 五庵古墳出土大刀実測図 ……39
第27図 五庵古墳出土鉄鏃実測図 ……41
第28図 五庵古墳出土装飾品実測図 ……42
第29図 五庵古墳出土薙鎌実測図 ……43
第30図 幸神1号古墳全景実測図 ……44
第31図 幸神1号古墳石室全体図 ……45

第32図　幸神１号古墳玄室実測図 ……47
第33図　幸神１号古墳出土大刀・小刀実測図 ……48
第34図　幸神１号古墳出土鉄鏃実測図 ……49
第35図　幸神１号古墳出土勾玉実測図 ……50
第36図　幸神１号古墳出土土器実測図 ……51
第37図　幸神１号古墳出土須恵器拓影図 ……52
第38図　幸神２号古墳全景実測図 ……53
第39図　幸神２号古墳石室全体図 ……54
第40図　幸神２号古墳玄室実測図 ……55
第41図　幸神２号古墳出土鉄鐸・耳環実測図 ……56
第42図　幸神２号古墳出土須恵器実測図No.１ ……57
第43図　幸神２号古墳出土須恵器実測図No.２ ……58
第44図　幸神４号古墳全景実測図 ……59
第45図　幸神４号古墳石室全体図 ……60
第46図　幸神４号古墳玄室実測図 ……61
第47図　幸神４号古墳出土小刀・刀装具・耳環実測図 ……62
第48図　幸神４号古墳出土鉄鏃実測図 ……63
第49図　幸神４号古墳出土土器実測図 ……64
第50図　幸神５号古墳全景実測図 ……65
第51図　幸神５号古墳玄室全体図 ……66
第52図　幸神５号古墳出土刀子・鉄鏃・土器 ……67
第53図　幸神６号古墳石室実測図 ……68
第54図　幸神６号古墳墳丘・付近出土遺物実測図 ……69
第55図　外九間１号古墳全景実測図 ……70
第56図　外九間１号古墳石室全体図 ……71
第57図　外九間１号古墳玄室実測図 ……72
第58図　外九間１号古墳出土土器実測図 ……73
第59図　外九間１号古墳出土甕の叩き目文拓影図 ……73
第60図　外九間２号古墳石室全体図 ……74
第61図　外九間２号古墳出土土器実測図 ……75
第62図　外九間３号古墳石室全体図 ……76
第63図　外九間３号古墳出土土器実測図 ……77
第64図　中原１号古墳全景実測図 ……78
第65図　中原１号古墳石室全体図 ……79
第66図　中原１号古墳玄室上面実測図 ……80
第67図　中原１号古墳玄室実測図 ……81
第68図　中原１号古墳出土鉄鏃実測図 ……82
第69図　中原１号古墳出土耳環実測図 ……82

第70図　中原１号古墳出土土器実測図 ……83
第71図　中原１号古墳丘出土の甕叩き目文拓影図 ……83
第72図　中原２号古墳全景実測図 ……85
第73図　中原２号古墳石室全体図 ……86
第74図　中原２号古墳出土小刀・刀子・刀装具実測図 ……87
第75図　中原２号古墳出土土器実測図 ……88
第76図　中原２号古墳丘出土須恵器拓影図 ……89
第77図　中原２号古墳出土須恵器叩き目文拓影図 ……89
第78図　幸神古墳群出土古銭拓影図 ……90
第79図　新海神社西御陵古墳・五庵古墳出土神骨・歯牙 ……103
第80図　幸神１号古墳出土人骨 ……104
第81図　幸神２号古墳出土人骨・歯牙 ……105
第82図　幸神４号古墳出土人骨・歯牙 ……106
第83図　中原１号古墳出土人骨 ……107
第84図　中原２号古墳出土人骨 ……108
第85図　中原１号・２号古墳出土歯牙 ……109
第86図　幸神古墳群の石室形式 ……112
第87図　幸神古墳群の奥壁 ……113
第88図　幸神古墳群の左右側壁の石積み状態 ……114
第89図　幸神古墳群出土の鉄鏃型式 ……117
第90図　原遺跡・井上遺跡出土土器 ……121
第91図　各種の薙鎌 ……124

付　表　目　次

第１表　幸神古墳群試掘・確認調査作業工程表 ……2
第２表　幸神古墳群出土鉄鏃一覧表 ……90
第３表　幸神古墳群出土大刀・小刀・刀子一覧表 ……93
第４表　幸神古墳群出土耳環一覧表 ……94
第５表　幸神古墳群出土玉類装飾品一覧表 ……95
第６表　幸神古墳群出土土器一覧表 ……97
幸神１号古墳 ……97
幸神２号古墳 ……97
幸神４号古墳 ……98
幸神５号古墳 ……98
外九間１号古墳 ……99

外九間２号古墳 ……99
外九間３号古墳 ……99
中原１号古墳 ……99
中原２号古墳 ……100
第７表　幸神古墳群出土古銭一覧表 ……102
第８表　幸神古墳群調査古墳一覧表 ……111

図　版　目　次

巻頭図版１　１．新海神社西御陵古墳全景　２．新海神社中御陵古墳石室全景　３．新海神社新発見古墳石室全景
巻頭図版２　１．２．幸神１号古墳全景
巻頭図版３　１．幸神２号古墳全景　２．外九間１号古墳全景
巻頭図版４　１．中原１号古墳玄室左側壁の石積み（持ち送り）　２．中原２号古墳全景
図版一　１．清掃終了後の墳丘　２．調査前の玄室　３．復元した古墳　４．復元古墳遠景　５．石室近景
６．石室近景　７．羨道左側壁の石積み　８．玄室
図版二　１．新海神社東御陵古墳石室全景　２．調査前の奥壁が露出した状態　３．墳丘・石室全景
４．玄室に入り込んだ木の根を伐る。　５．左側壁を越えて玄室に入り込んだ杉の木根
図版三　１．こけの生えている部分のみ露出していた　２．枯枝、草、木を抜き取った後の全景　３．石室プランを確認　４．掘り下げ確認状態　５．右側壁に密着した大刀　６．刀子・鉄鏃出土状態
７．刀子・鉄鏃出土状態　８．水晶製勾玉出土状態
図版四　１．玉類・耳環出土状態　２．玄室敷石状態　３・４．石室全景　復元された東御陵・新発見古墳
６．盛土復元した東御陵古墳　７．同新発見古墳
図版五　１．雑木伐採後の墳丘　２．石室全景　３．傾斜面に築かれた古墳全景　４．最上段からの全景
５．玄室棺床面の敷石　６．敷石直上の耳環出土状態　７．右側壁際の副葬品（鉄鏃）
図版六　１．羨道　２．玄室閉塞際の渋の木　３．奥壁を破して出入口としている　４．奥壁整備状態
５．倒された奥壁　６．左側壁　７．玄室出入口出土の大刀・耳環　８．左側壁際出土の鉄鏃・雁鏃
図版七　１．幸神１号古墳全景　２．露出している天井石・奥壁　３．幸神１号古墳の羨門～羨道
４．墳丘盛土・裏込の構造観察トレンチ　５．大刀出土状況　６．奥壁状況
図版八　１．遺物出土状態　２．玄室遺物出土状態　３．羨門付近遺物出土状態　４．羨道・玄室　５．右側壁の石積み　６．左側壁の石積み　７．人骨出土状態　８．松の木の下に幸神３号古墳が所在していた
図版九　１．幸神２号古墳全景　２．羨門～羨道～玄室全景　３．玄室から羨門を望む　４．幸神２号古墳全景
図版十　１．幸神４号古墳全景　２．玄室閉塞状態　３．玄室　４．右側壁の石積み・土器出土状態
５．左側壁の石積み・骨出土状態
図版十一　１．人骨出土状態　２．頭蓋骨出土状態　３．玄室　４．石室全景　５．羨道と前庭部仕切石の矢摘
６．石室全景　７．ヤックラの中から姿を現した石室　８．崩落していた天井石を元に戻す

図版十一　1．調査前のヤックラ　2．ヤックラの中から現れた天井石　3．石室を確認　4．姿を現した石室
5．正方形の玄室　6．羨道が破壊されている　7．8．玄室を表面に出してヤックラを以前の姿に戻す

図版十二　1．幸神6号古墳全景　2．奥壁と天井石　3．左側壁　4．ヤックラの中から現れた古墳石室
5．調査前のヤックラ

図版十三　1．右側壁の石積み（持ち送り）　2．低い玄門の上に大きな閉塞石が架かっている

図版十四　1．天井石の架かった羨道　2．墳丘の草取り　3．古墳全景　4．露出している天井石と空洞となっていた玄室　5．閉塞石と羨道の天井石

図版十五　1．外九間2号古墳全景　2．露出している奥壁　3．露出している右側壁と天井石
4．玄室内部と左側壁、ずり落ちた天井石　5．奥壁、左側壁とずり落ちた天井石

図版十六　1．調査終了後の全景　2．ヤックラの中から現れた石室　3．奥壁・天井石　4．右側壁
5．調査前のヤックラ

図版十七　1．中原1号古墳全景　2．玄室（幸神古墳群の中では最大の玄室である）

図版十九　1．第一次調査終了後の全景　2．崩落した天井石を元の位置に戻す　3．第二次調査終了後の石室全景　4．玄室全景　5．土器出土状態　6．露出している奥壁・天井石　7．雑木・雑草を取り除いた墳丘　8．露出している右側壁・天井石

図版二十　1．調査前の古墳　2．雑草に覆れた墳丘　3．羨門の前はヤツクラとなっていた　4．清掃後の玄室
5．ヤックラの中から現れた羨門　6．調査終了後の全景　7．古墳前方の岩　8．古墳全景

図版二十一　1．右側壁の石積み　2．奥壁　3．玄室へ崩れかけた左側壁　4．人骨・刀装具・土器出土状態
5．右側壁の石積み　6．左側壁の崩れ状態

図版二十三　1．新海神社中御陵古墳出土鉄鏃・管玉　2．東御陵古墳出土鉄鏃・耳環　3．新海神社新発見古墳出土大刀・小刀・刀子・鉄鏃　4．新海神社西御陵古墳出土鉄鏃

図版二十三　1．新海神社中御陵古墳出土鉄鏃

図版二十四　1．新海神社西御陵古墳出土小刀・刀子　2．新海神社西御陵古墳出土耳環

図版二十五　1．新海神社新発見古墳出土装飾品

図版二十六　1．五庵古墳出土大刀・刀装具・鉄鏃・薙鎌

図版二十七　1．幸神1号古墳出土大刀・小刀　2．幸神1号古墳出土勾玉・鉄鏃　3．幸神6号古墳出土臼玉
4．幸神5号古墳出土鉄鏃・刀子　5．中原1号古墳出土鉄鏃

図版二十八　1．幸神4号古墳出土小刀・刀装具　2．幸神4号古墳出土耳環　3．幸神4号古墳出土鉄鏃

図版二十九　1．五庵古墳出土耳環・玉類　2．中原1号古墳出土耳環・管玉

図版三十　1．幸神1号古墳出土土器

図版三十一　1．幸神2号古墳出土土器

図版三十二　1．幸神4号古墳出土土器

図版三十三　1．幸神6号古墳出土土器　2．外九間2号古墳出土土器　3．外九間3号古墳出土土器
4．中原1号古墳出土土器

図版三十四　1．中原2号古墳出土小刀・刀子・刀装具　2．中原2号古墳出土土器

図版三十五　1．成形・調整の特徴（底部）・暗文・墨書

図版三十六　1．調査スナップ

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

千曲川に注ぐ一級河川の雨川の右岸に形成された広大な扇状地の台地上には、臼田町で最大の面積をもつ原遺跡があり、その遺跡地内に幸神・外九間・中原の各地籍に数々の古墳が存在している。これを幸神古墳群と総称している。

臼田町には合計50基の古墳があり、ここを含めて右岸に、いくつかの群集墳に分散して46基ある。佐久平ではここより南には古墳群はなく佐久平南限古墳群として注目されている。

ところが、この古墳群もいつの間にか木や草におおわれ、古墳の中は石や土で埋まってしまっていた。

今回の調査は、この遠い祖先から受け継いだ貴重な文化財を守るとともに学習の場として生かすための史跡公園建設事業を進める前段の事業として幸神古墳群とその周辺の関連ある古墳を試掘確認調査する運びとなった。

（事務局）

第２節　発掘調査の概要

○　古　墳　名　　幸神古墳群

○　所　在　地　　長野県南佐久郡臼田町大字田口字幸神4808番地ほか

○　発掘期間　　平成６年９月１日～平成７年10月17日

○　調査主体者　　臼田町教育委員会

○　調査に関する事務局

新津　真澄　　臼田町教育委員会　教育長

新海　宣幸　　臼田町教育委員会　総務教育課長

中沢　　功　　臼田町教育委員会　生涯学習係長（平成６年度）

三浦　英敏　　臼田町教育委員会　生涯学習係長

大工原すみ江　臼田町教育委員会

○　発掘調査団組織

団　長　三石　延雄（長野県考古学会員）

副団長　丸山　正俊（文化センター館長）

担当者　島田　恵子（南佐久郡誌常任編纂委員・長野県考古学会員）

調査員　井出　正義（長野県考古学会員・小海町志編纂委員長）　佐々木春蔵（佐久考古学会員）

調査補助員　有井　忠雄（小海町志調査員）、柳沢　春子

調査協力者　油井　秀雄、籐原　末三、柳沢　恒喜、上原　錦三、相沢今朝義、小須田一雄

整理協力者　新津　きし、籐原　雅子

現地指導　　岩崎　卓也（東京家政学院大学教授）

地形・地質・石質指導　由井　俊三（前北海道大学教授　鉱床学）

人骨鑑定　　町田　拓也（佐久総合病院整形外科医長）

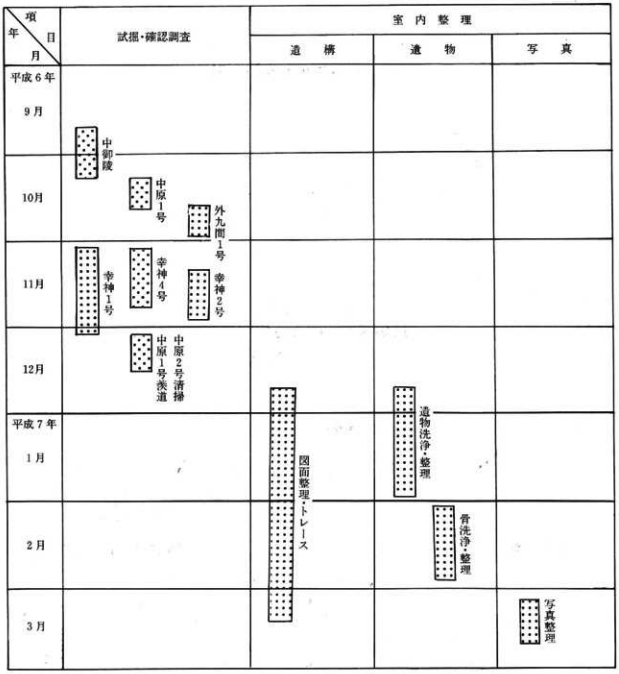
歯鑑定　　石井　宏昭（佐久総合病院口腔外科医長）

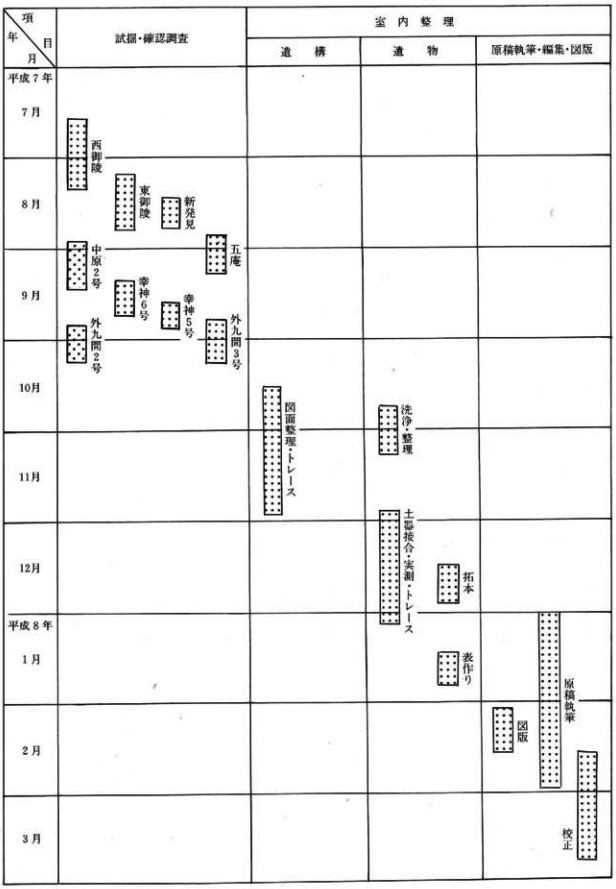
第３節　発掘調査日誌

本古墳群の試掘確認調査は、平成６年・７年度の２年間連続して実施した。初年度は９月20日から12月10日まで現場作業にあたり、引き続いて整理作業に入った。７年度は現場終了後に報告書作りがあり、日程的にかなり厳しい状況が予想されるので６年度の整理はその年度内にと心がけたが全て終了することはできなかった。

次年度は、７月19日から調査に入り、10月17日で現場作業を終了した。その後、図面、遺物整理、実測を12月までに終了させ、１月から原稿執筆に入った。報告書刊行までめまぐるしい日々であった。以下、作業工程を表に示した。

第１表　幸神古墳群試掘・確認調査作業工程表




項目
年
月
試掘・確認調査
室内整理
遺構
遺物
原稿執筆・編集・図版
平成7年
7月
8月
9月
10月
11月
12月
平成8年
1月
2月
3月
西御陵
東御陵
新発見
五庵
中原2号
幸神6号
幸神5号
外九間3号
外九間2号
図面整理・トレース
洗浄・整理
土器接合・実測・トレース
拓本
表作り
原稿執筆
図版
校正

第２章　幸神古墳群の環境

第１節　原遺跡・幸神古墳群の自然環境（地形地質を中心として）

原遺跡および幸神古墳群は、臼田町田口原にあり、小海線竜岡城停留所東南方200m地点に立地し、この附近の標高は710m、佐久平東南隅にあたる千曲川支流の、雨川最下流に発達した谷口扇状地上の丘陵平坦地で、古くから拓けた畑作地帯が続いている。

雨川は、妙義荒船佐久高原国定公園の南縁部にある田口峠（1,104m）の、八合目から発源して、狭い谷間を蛇行をくりかえしながら西流し、南北両側からの小渓流を合わせて、上中込部落南で千曲川に注ぐ支流である。南北両岸の尾根上には水落観音・田口城山等の絶壁もそびえ、谷底は、はげしい蛇行をくりかえし所々水をたたえた淵も作り、山の神地点では、大規模な治水ダムも造成され、風致も勝れて臼田町営保養施設“湖月荘”もある。

田口峠のある長野・群馬県境山地を、佐久山地と通称しているが、この北部は、妙義山・荒船山等旧期の火山活動によって構成された、奇岩絶壁のはげしい山地である。佐久山地の南部への連続は、茂来山・御座山・三国山・甲武信ケ岳・金峯山へと続く、関東山脈の西北端の延長で、中生層・古生層の古期岩層地帯で、日本列島の背梁山脈を、2,000m級の高山が続いている。南部北部ともに、県境分水嶺を中心として高峰が続き、西方佐久方面へは、長い尾根を張り出し、千曲川沿岸までせまっている。ことに南部では千曲川すじまで岩峯の張り出している部分もあり、佐久平は臼田町を南縁として、それより上流は千曲川沿いにも平地はほとんど見られない。

佐久平は、小諸市布引から臼田町入沢を長軸とした、千曲川の流路を対角線とし、佐久市中心部を短い対角線とした、長菱形の高原盆地であり、その南縁部に原遺跡が立地している。これがまた、弥生時代住居址分布・古墳分布の南限ともなっている。

雨川の最上流部の田口峠附近は、荒船火山の基盤である新生代第三紀中新世に属する内山層の、砂岩・頁岩・礫岩が互層をなして堆積しており、浅海性の貝化石産地も数ヶ所ある。田口峠トンネル・内山黒田附近が、それにあたっている。この内山層分布地域の上部へは、旧期火山である荒船火山が、長期にわたるはげしい火山活動による高熱火山灰の厚い堆積と、その再溶融による溶結凝灰岩（佐久石）を広範囲に、しかも厚く被って分布させている。佐久市安原・内山・平賀・臼田町三反田・入沢等の、佐久石採石場がＪＲ小海線の車窓から見える範囲が、この溶結凝灰岩（佐久石）の分布地帯となっている。古くから建築土木工事用・石造物原材として採掘され、佐久地方のみならず、他地方まで移出されて“佐久石”として知られている。昭和20年代までに、佐久地方で作られた石造建造物、石垣・石橋・石佛・石碑等は、全て“佐久石”であると言っても過言ではないほどである。

荒船火山は、火山活動の最末期に多量な塩基性溶岩を噴出して、溶結凝灰岩層の上部を被った。これは、高温で粘性に乏しかったために、流出と共に原地形面上を急速に流れて、冷却固結したために板状節理が発達し、噴出のたびに成層累積した。これを荒船玄武岩と呼んでいる。佐久地方では、俗称“うづまき石”と称し、平にはげ易い性質を利用して露地庭園などの、跳び石・敷石に活用している。これは分布が狭く限られており、水落観音・田口城山山頂部・雨川・内山川の両側尾根部など、荒船火山の火口に近い尾根上表面にのみ分布している。

従って雨川の河床礫の岩質をしらべると、砂岩・頁岩・礫岩・溶結凝灰岩・荒船玄武岩のみである。このことは、原遺跡深掘トレンチ断面でも確認され、河扇状地上面に築かれた遺跡であることが、実証された。

この遺跡地附近の地表面には、洪水時の河床砂礫の氾濫跡が、数ヶ所見られたことは、原遺跡構築時期には、

雨川の運搬力が強大であった事を物語り、これによっても谷口扇状地堆積が確認された。　（白倉　盛男）

（古墳群は原遺跡に所在している関係から、本稿は平成元年発行の「原遺跡」報告書から一部修正して転載した）

第２節　古墳石室使用の溶結凝灰岩について

原遺跡の古墳群に使用されている石材は、この地方で佐久石として知られている志賀溶結凝灰岩の可能性が大きいと推定されていた（平成元年度原遺跡報告書）。幸神１号古墳などの天井石の一部に、現在でも石材の切りだしに用いられている、くさび穴の直線的配列のような凹みの並びのあることから、これらの石材に見られる平らな面が人の手によって作られたものではないかとの疑いから、付近の志賀溶結凝灰岩の露出と比較検討した。

溶結凝灰岩についてはすでに上記原遺跡報告書（前頁に転載）に簡単に述べられているが、日本人の生活との関連を含めて改めて基礎的事項について解説する。阿蘇山のような大噴火を起こす火山の周りで、谷を埋めるように厚く分布し、その上面はほぼ平坦になっていて、全体としては硬いが、軟らかい部分を層状に挟む岩石がある。阿蘇山では西は有明海から東は豊後水道まで百数十kmにわたって分布し、とくに硬い所では峡谷を作り、火山岩のように見えることから佐久石の場合の佐久溶岩と同様に阿蘇溶岩と呼ばれていた。ところがその上部は軟らかく、容易に土壌化して肥沃な平坦地を作っていて、九州のような温暖の地では用水が得られれば、稲作に利用出来る。そのために峡谷を越える水路が必要となり、通潤橋のような水路橋が建設された。その際石材を利用する技術が強調されることが多いが、水路橋を必要とする自然条件（気候・地形・土壌）がその前提となっている。北海道支笏湖周辺にも同様な地形と地質があるが水田には利用されていない。

“阿蘇溶岩”は谷を埋めるように分布するが、一部には尾根を乗り越えたような分布をしている所がある。尾根を乗り越えるような土砂の流れは昭和59年の御嶽崩れの際にも観察されている。“阿蘇溶岩”と同様な岩石は世界各地でも研究され、雲仙で見られた溶岩ドームの崩壊による火砕流よりはるかに大規模の、火口からあふれ出た火砕流が流れ下って厚く堆積し、その一部の軽石が高温と堆積物の自重による圧力の下で、黒曜石のようになり、火山灰も団結したという推定から溶結凝灰岩と呼ばれている。この“阿蘇溶岩”の年代は７～９万年前で、千曲川でいえば八千穂村崎田佐久町花岡の乗る段丘（穂積面）とほぼ同年代である。“阿蘇溶岩”のような大規模な火砕流では厚さ数十mに達し、軽石のつぶれたいわば“黒いせんべい”は直径十cm以上厚さ１cm以上に達することもある。溶接凝灰岩全体としては灰色のことが多いので、その中に黒い小レンズのほぼ定方向に縞状配列のみられる岩石組織は特徴的である。一般論として厚い火砕流堆積物ではその厚さ方向の下から⅓から½までが

1　幸神１号古墳の石材の小レンズ（cm×mm程度）の配列

2　佐久町平林の宅地造成現場の佐久石に見られる組織

3　幸神１号古墳の天井石、右のものには平面が発達し、左側のものには凹みの並びがある

4　臼田町北端離山南西隅山裾の志賀溶結凝灰岩の節理

良く溶結し、硬い岩石になり易いと言われている。その部分では溶結凝灰岩の硬さや節理は火成岩に似ている。

火成岩の節理は、高温のマグマが冷えて火成岩になり、さらに冷却していくとき、岩石の性質（強度、熱伝導率など）と冷え方のバランスによって、種々の割れ目の生成するものである。平面を多角形に分割するとき、辺の長さと面積の比が最小（分割エネルギーが最小）のものは正六角形であるため、冷却面にほぼ六角の網目状の割目が出来、冷却の進行につれて、深部に進行したものが柱状節理である。冷却面にほぼ平行の節理が出来、それが冷却につれて深部に進むのが板状節理である。佐久町板石山の鉄平石採石場では柱状節理で出来た、直径数mの柱に板状節理の発達しているのが観察される。溶結凝灰岩の溶結部の高温の固体が冷却するときにも火成岩と似た節理が生じる。

溶結凝灰岩は日本各地に、各地質時代にわたって分布するが、長野県に関係する大岩体としては岐阜県下を中心に北西は福井・石川県、南東は木曽にまで、これも百数十kmにわたって分布するものがあり、１億年前から数千万年前頃に生成されたものである。これは濃飛流紋岩と呼ばれ、古くは火山岩と考えられていた。かつて佐久溶岩と呼ばれた佐久石も溶結凝灰岩の性質を示している。佐久石類似の石は地質学では、分布のほぼ中心の志賀の地名をとって、志賀溶結凝灰岩と呼ばれている。臼田町やその周辺の佐久石採石場で見ると、志賀溶結凝灰岩は１回の大火砕流ではなく、繰り返し起こった火砕流によって形成されたと思われ、各回の堆積の底部と頂部は溶結していないので軟らかく、遠くからでもそのほぼ水平の構造が認められる。したがって佐久石採石場からは硬軟各種の石材を産し、種々の用途に仕向けられるが、その反面大量に同一規格のものを供給出来ないおそれがある。佐久石は北は中軽井沢から南は佐久町下川原まで約20kmにわたって分布していると言われていたが、それ以外にも溶結凝灰岩の分布はかなり広く、それらと志賀溶結凝灰岩の関係も不明である。志賀溶結凝灰岩のK-Ar年代としては約三百万年前というデータがある〈日本の地質４中部地方Ⅰ（共立出版）に引用されている兼岡のデータ〉。

幸神１号古墳の石材の表面の一部には溶結凝灰岩と認められる長さcm厚さmm程度の不規則レンズの配列組織が認められる。佐久石地帯の中にあることからその溶結凝灰岩が佐久石であると考えるのが自然である。写真１と２に古墳の石材と佐久町平林の佐久石の組織を示した。また石材の平らの面（写真３）も古墳の北方約２kmの離山南側山裾の溶結凝灰岩の節理面（写真４）とよく似るので、人工の面ではなく天然の節理面と推定される。

（由井　俊三）

第3節　考古学的環境

(1)　古墳の分布

臼田町には、計50基の古墳が所在している。先ず大きくとらえると、千曲川左岸に3基、右岸に47基で圧倒的に右岸側に集中している。これらの古墳を地区別にたどれば、佐久市との境に接する千曲川左岸の臼田地区に3基あり、千曲川を渡った右岸では、やはり佐久市との境に接した離山に3基所在する。引き続いて、清川・大奈良地区に各1基あり、原地区には12基が群集している。原地区の続きにあたる田口下町の割塚・明法寺・五庵地籍に3基が点在し、昔、新海神社の境内だった英田地畑地籍に1基と、神社の南東側上宮代地区に2基所在する。新海神社には、神社拝殿の真後にあたる裏山に中御陵古墳があり、その右側の吉池とよばれる所に東御陵古墳が所在する。吉池は、かつて水が湧いていたところで古米から正月15日の早朝に、神官さんが御符を書く硯の水を汲むという神事が行われていたが、現在は水が湧かなくなったので吉池の近くの小川で汲んでいるという。新海神社西御陵古墳は、沢を一つへだてた英田地畑地籍に所在している。ここまでが臼田、田口地区の古墳群で計29基となるが、7年度の調査中東御陵古墳の左脇から新しい古墳が発見され計30基となった。

三分から田口用水に添って上った入沢の山際地籍に1基とその続きにあたる上大深に2基の古墳が所在している。ここから入沢の部落に入った谷川の左岸にある月夜平の丘陵に1基所在し、向かいの谷川右岸に計15基が群集している。先ず、入沢集落北西端部の磯部城跡東側の南面する山腹斜面の権現通地籍に3基所在し、入沢集落中央部北方の南面する斜面山腹の五霊西地籍に5基の古墳が群集している。隣接する湯殿入地籍に1基、天神平の山腹に3基、宮林・一万窪・西の窪に各1基の計7基が群集し、ここで入沢古墳群は終わる。

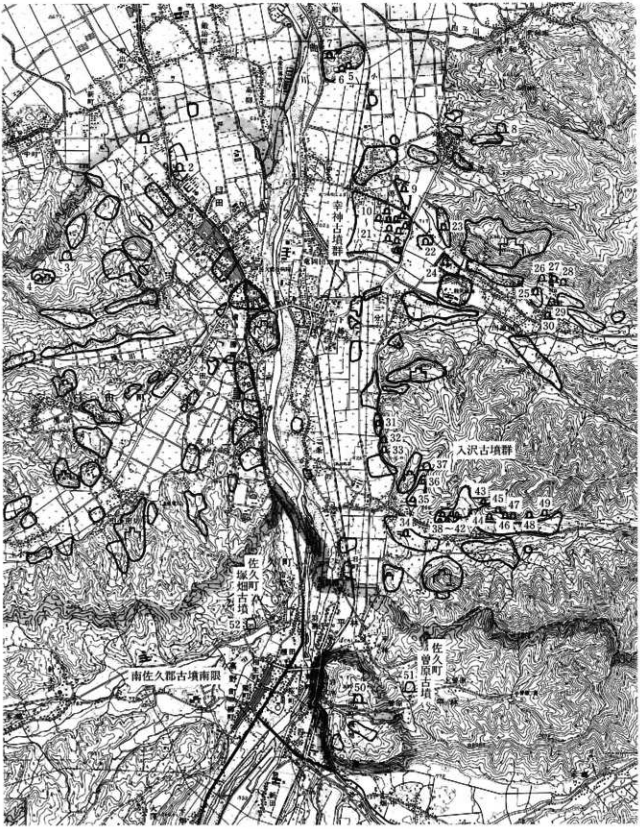
入沢古墳群から離れた臼田町の行政地区でもある岩水舟久保地籍に1基と隣接の佐久町曽原地区に1基点在している。この曽原古墳を最南限としてこれより南の町村には古墳は1基も存在しない。一方、千曲川左岸の南限古墳は佐久町高野町字城陰に1基所在している。千曲川左岸の古墳は臼田町3基、(他に経塚1基)佐久町1基の計4基と少ない。これはなにを意味しているのであろうか？

臼田町切原地区は、片貝川右岸に広大な水田が展開している。粘性の強い土層であるためおいしいお米が収穫できる。この穀倉地帯を統括した首長の墓が皆無であるということが最大の謎の一つである。片貝川流域は臼田町から佐久市にかけて弥生時代後期の遺跡が多い。この時代水稲耕作が急激に広まったことにより小規模の集落が顕著となる。これは、稲作の普及による生産過程から社会構造の変化によって派生した現象であると考えられる。水田の拡大は弥生時代にその基盤が整い古墳時代に入ってより発展し、米の収穫により安定した生業から人口も増大したであろう。にもかかわらずこの穀倉地帯に古墳は存在していない。これに関しては考察の章に譲りたい。

(2)　発掘・清掃調査の実施された古墳

これまでに発掘・清掃調査された古墳は、臼田町宮代英田地畑に所在する、英田地畑古墳が昭和40年に緊急発掘調査され、昭和60年11月、臼田法印塚に所在する蛇塚古墳が清掃調査された。さらに、昭和61年3月には入沢五霊西に所在する、五霊西12号古墳の緊急発掘調査が実施され、計3基の調査が行われている。

それでは調査の年代順に、調査結果を報告したい。



第1図　臼田町古墳群および周辺遺跡分布図

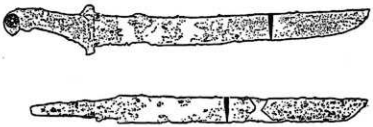
第2表　臼田町古墳群一覧表

No.	古墳名	所在地	地形	規模（現況）
1	境塚古墳	臼田・善阿弥	平地	円墳・横穴式石室、墳丘径10m、高2m
2	蛇塚古墳	臼田・法印塚	平地	円墳・横穴式石室、径10m、高2.5m、玄室(長4.8m、巾3.0、高0.95)羨道長1.9m
3	滝ノ沢古墳	臼田・滝ノ沢	尾根	円墳、墳丘径16m、高さ3m
4	滝ノ沢経塚	臼田・滝ノ沢	尾根	(中)土石混合塚(径12、高2)
5	離山1号古墳	上中込・離山	山腹	金環2
6	離山2号古墳	上中込・離山	山腹	円墳、横穴式石室、玄室2.2×1.9m、羨道長300×130cm、天井石270×120cm
7	離山3号古墳	上中込・離山	山麓	円墳、横穴式石室、墳丘径6m、高2m
8	清川入古墳	清川・清川入	山腹	円墳、横穴式石室、玄室巾100cm、天井石170×110cm
9	山崎古墳	大奈良・山崎	平地	円墳、横穴式石室、墳丘10m×5m、高0.5mの残存、勾玉
10	幸神1号古墳	原・幸神	平地	平成6年度調査
11	幸神2号古墳	原・幸神	平地	平成6年度調査
12	幸神3号古墳	原・幸神	平地	石室全て取り除かれてしまい消滅
13	幸神4号古墳	原・幸神	平地	平成6年度調査
14	幸神5号古墳	原・幸神	平地	平成7年度調査
15	幸神6号古墳	原・幸神	平地	平成7年度調査
16	外九間1号古墳	原・外九間	平地	平成6年度調査
17	外九間2号古墳	原・外九間	平地	平成7年度調査
18	外九間3号古墳	原・外九間	平地	平成7年度調査
19	中原1号古墳	原・中原	平地	平成6年度調査
20	中原2号古墳	原・中原	平地	平成7年度調査
21	中原3号古墳	原・中原	平地	昭和41年新興製作所設立の際とりこわし、建物敷地とされた。
22	割塚古墳	下町・割塚	平地	円墳・横穴式石室、玄室1.2×1.8m
23	蛇法寺古墳	下町・明法寺	平地	円墳・横穴式石室、墳丘径5.5m、玄室2.4×2.4m、天井石2.4×1.9m
24	五庵古墳	下町・五庵	平地	円墳、横穴式石室、高さ2m、玄室2.5×3.5m
25	英田地畑古墳	宮代・英田地畑	山麓	円墳、横穴式石室(長2m、巾1m)昭和40年調査、蕨手刀・直刀・三輪玉・須恵器高台付坏他出土

No.	古　墳　名	所　在　地	地形	規　　模　（現　況）
26	新海神社西御陵古墳	宮代・美田地畑	山　麓	円墳・横穴式石室、墳丘高２m、玄室2.1×1.3m
27	新海神社中御陵古墳	宮代・宮の沢	山　麓	円墳・横穴式石室、墳丘径８m、高2.5m、玄室2.4×1.6m、羨道２×1.3m
28	新海神社東御陵古墳	宮代・宮の沢	山　麓	円墳・横穴式石室、墳丘径７m、高２m、玄室２×1.8m
29	上宮代１号古墳	宮代・上宮代	平　地	円墳、墳丘径10m、高２m
30	上宮代２号古墳	宮代・上宮代	平　地	現在は五輪塔が置かれているだけで、取りこわされてしまった
31	山際１号古墳	入沢・山際	山　麓	円墳・横穴式石室、玄室2.4×2.1m
32	山際２号古墳	入沢・上大深	山　麓	円墳・横穴式石室、玄室1.7×2.2m
33	山際３号古墳	入沢・上大深	山　麓	円墳・横穴式石室、玄室1.5×2.2m
34	月夜平４号古墳	入沢・月夜平	丘　陵	円墳・横穴式石室、墳丘高1.5m、玄室２×1.8m、天井石長２m
35	権現通５号古墳	入沢・中権現	山　腹	円墳・横穴式石室、玄室1.6×1.6m、天井石2.1×1.7m
36	権現通６号古墳	入沢・中権現	山　腹	円墳・横穴式石室、奥壁巾170cm、天井石2.2×1.8m
37	権現通７号古墳	入沢・遠見場	山　腹	円墳・横穴式石室、玄室1.5×1.3m、天井石長180cm
38	五霊西８号古墳	入沢・五霊西	山　腹	円墳・横穴式石室、玄室3.1×2.4m
39	五霊西９号古墳	入沢・五霊西	山　腹	円墳・横穴式石室、側壁長さ120cm、130cmの石２枚
40	五霊西10号古墳	入沢・五霊西	山　腹	円墳・横穴式石室
41	五霊西11号古墳	入沢・五霊西	山　腹	羨門の一部とおもわれる石露出しているのみ。
42	五霊西12号古墳	入沢・五霊西	山　腹	円墳・横穴式石室、昭和61年調査、羨道となり破壊消滅
43	湯殿入13号古墳	入沢・湯殿入	山　麓	円墳・横穴式石室、天井石横巾170cm、縦150cm
44	天神平14号古墳	入沢・天神平	山　腹	円墳・横穴式石室、玄室推定250×180cm、墳丘径５m、高1.5m
45	天神平15号古墳	入沢・天神平	山　腹	円墳・横穴式石室、墳丘径７m、高３m
46	天神平16号古墳	入沢・天神平	山　腹	円墳・横穴式石室、墳丘径10m、高３m
47	天神平17号古墳	入沢・宮林	山　腹	円墳・横穴式石室、墳丘径10m、高３m、玄室1.2×1.9m
48	一万窪18号古墳	入沢・一万窪	山　麓	円墳・横穴式石室、玄室3.1×２m
49	西の窪19号古墳	入沢・西の窪	山　麓	円墳・横穴式石室、玄室2.3×1.7m、羨道1.9×１m
50	舟久保20号古墳	岩水・舟久保	山　腹	円墳・横穴式石室、玄室２×1.3m
51	曽原古墳	佐久町・曽原	山　腹	円墳・横穴式石室、玄室1.5×1.5m
52	塚畑古墳	佐久町・高野町	山　麓	円墳・横穴式石室、玄室２×３m

英田地畑古墳

昭和40年3月22日～25日の4日間、竹内恒氏を担当者として、佐久考古学会員、野沢南高等学校クラブ員の協力のもとに実施された。



英田地畑古墳出土蕨手刀・直刀実測図（1：5）

英田地畑古墳は、田口字英田地畑2414番地に所在している。新海神社の西南側の緩傾斜する畑に築造された古墳で、旧境内にあたる場所である。付近には5基の古墳が分布している。また、田口地区は群馬県と境を接しており、古くから交通路の要所であった。

古墳は、墳丘はおろか天井石の影形もなく破壊されていたようである。担当者の竹内恒氏の調査報告によると、『規模は、はっきりわからないが全体から見て、小規模な円墳と思われる。石室内部はおよそ矩形で、東西約1m、南北約2m、羨道は南に向いていた。床面には砂礫が薄く敷いてあり、その上に同様に薄く木炭が敷かれ、人体は西壁よりに南北に細長く伸びていたが、頭骨らしい骨は北奥にあった。詳しい埋葬の形はわからない。床に木炭が敷かれていた古墳は、佐久地方ではこれまでに見られなかった。…略』

出土遺物は、右の図に示した蕨手刀1、直刀1と鉄鏃約10、三輪玉1、須恵器高台付坏、土師器坏等である。蕨手刀はその後国立博物館に買い取られたが、腐蝕が進んでいなかったため、きれいに処理加工されて一時上野の国立博物館に展示されていたこともある。

蛇塚古墳

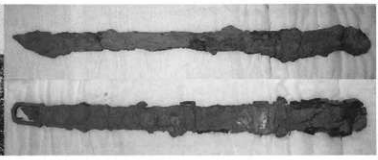
臼田町法印塚1025番地に所在する。数少ない千曲川左岸の古墳である。この地点より野沢平の千曲川河岸平野が北に向かって開ける。古墳は、地区のお年寄りが清掃にあたっているため、墳丘はきれいに整備されている。しかし、耕作や住宅の接近によってだんだんせばめられ、雄大な浅間を望む見事な景観は失われつつある。

墳丘の径は10m、高さ2.5mを測るが、築造時はこれより一まわり大きかったと考えられる。玄室の規模は、4m×2.8m、高さ1m、羨道は長さ1.9m、巾1.2mである。

遺物の出土地点は、骨は主に奥壁付近、鉄鏃、その他鉄製品は玄室入口付近の左右の壁際、蕨手刀、直刀は左側の壁際から出土している。鞘に納まった状態であるが腐蝕が著しい。

また、奥壁の右寄り床面上から生木の腐蝕したものが出土した。木槨の一部であることも想定される。骨は、鑑定の結果火葬骨と判定されている。

2　蛇塚古墳全景



3　蛇塚古墳出土蕨手刀(上)・直刀(下)4

内部の清掃調査であったため、軽トラック２台分のゴミを取り除いた。一部分天井部に穴があいていたので後世にゴミが投げ込まれたままになっていたのである。古墳は墳丘の土を全体に削り取ったことと、羨門と天井石の一部が破壊されただけで石室はほぼ原形を保っていた。千曲川氾濫原に近い位置に築造された古墳であるだけに、使用されている石材は角の丸い河原石が多く、東山に近い千曲川右岸の古墳の石材とは異なり、安山岩で占められている。床面に敷かれていた石も全て河原石で10～30cm大と不ぞろいであった。奥壁・両側壁の石は、６個の巨石を使い、奥壁の左コーナー寄りと右側壁の羨門付近は小形石を使用している。かなりしっかりした造りで、規模的にも群集墳の中では大形の部に入る。

五霊西12号古墳

入沢古墳群は、西に流下する谷川（やつ）添いに三角形に細長く開けた谷の南面傾斜地に群集する古墳群である。入沢はこのような谷あいの小地区であるが、先土器時代から縄文・弥生・古墳・平安時代、そして中世まで連続して古くから開けている歴史の深い地区である。とくに中世の城跡は、入沢城・磯部城・水石城・十二山城の４城跡がありその繁栄ぶりが伺える。

古墳は、農道整備によって破壊される事態となったため、昭和61年３月３日～20日にかけて緊急発掘調査が臼田町文化財副委員長の三石延雄氏を団長に、地元の佐久考古学会員・南佐久郡誌刊行会考古部会の協力のもとに実施された。

五霊西12号古墳は、南面する緩傾斜面に築造された横穴式石室の古墳である。付近より豊富に産出する溶結凝灰岩（佐久石）の巨大な１枚石を使用し、地山を50cm掘りこんで巨石を埋めこみ、同じ石材を薄く割り敷石状の床面を形成している。框（かまち）石は厚さ45cm、長さ75cm、幅18cmを測り、床面より10cm程顔を出したのみで約35cm程度が地下に埋め込まれていた。玄室は２ｍ×2.3ｍを測る四角形に近い方形を呈し、玄門付近に向ってやや開いた形状を呈している。玄門には方柱状の石を立て両袖型の形態がとられている。

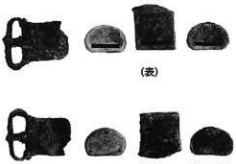
羨道は破壊が著しく、明確な構造は解りにくいが、玄門から羨門まで1.7ｍ、幅１ｍを測る柱状の巨石が横たわっていた。前庭部は柿の木が植えられていたことと、農道を作る時に大きく削り取られていて、おおよその範囲を想定するにとどまった。

また、石室周囲には列石と考えられる河原石が東西および奥壁外側に並列していた。天井石はすでに取り去られてしまっていたが、おそらく奥壁に匹敵するような巨大石を使用したものと考えられる。

本古墳は、巨石の１枚石を５枚使用して石室を築いていることが特徴としてあげられる。また、緩傾斜面を設

五霊西12号古墳から入沢部落を見下ろす遠望

五霊西12号古墳石室全景



五霊西12号古墳出土の銙帯具

五霊西12号古墳遺物出土状態

銙帯模式図

計の段階でうまくとらえて構築していることも、標高760mを測る高地性の山間地での古墳群の在り方をあらわしているといえよう。

石室内からの出土遺物は、第Ⅰ期（奈良時代）が鉄鏃14本、銙帯具（鈒具1・巡方1・丸鞆2）、刀子1などであり、第Ⅱ期（追葬で平安時代）が、刀子1、内面黒色土師器坏1、土師器高台付坏1などである。その他須恵器は墳丘盛土中からの出土であり、投げ込まれた混入物であると思われる。

また、Ⅰ期は火葬骨が出土し、Ⅱ期の追葬は小臼歯、大臼歯等の歯が14本、大腿骨、脛骨、踵骨、下顎骨、鎖骨、肋骨、上腕骨骨頭、上腕骨、肺骨、肩甲骨等の土葬の骨が多量に出土した。佐久総合病院整形外科医長町田拓也先生、同口腔外科医長三沢常美先生の鑑定によると、成・壮年者の骨格と思われ、14本の歯の鑑定結果では2体、あるいは3体になる可能性もある。とのことで歯牙年齢からすると20才以上と考えられるようである。

出土遺物の中で特に注目されるのは、銙帯具である。上に帯の模式図を示したので、銙帯がどのようなものであるか大よそ理解されるであろう。銙帯とは図の如く、出土した鈒具・巡方・丸鞆や鉈尾等の金具で装飾した革帯のことである。現代的に表現すればバンドというべきであろう。これは、官人が位によって用いたもので、古墳に埋葬されていた被葬者の位階を想定できる遺物といえる。

以上が現在までに調査された古墳である。これらの古墳は3基共に奈良時代・平安時代の遺物のみが出土しており、最終埋葬であると考えられる。さらに火葬骨が蛇塚・五霊西12号古墳から出土しているが、火葬骨に関しては今回調査の古墳からは出土していない。また、幸神古墳群周辺の古墳時代から平安時代にかかる遺跡は離山から原遺跡まで10遺跡が所在する。新海神社古墳群周辺は、明法寺・剣塚遺跡から丸山上遺跡まで11遺跡を数える。入沢古墳群は三分の西塚田遺跡から入沢の藤原遺跡まで15遺跡の所在である。これらの遺跡と古墳群とは大きな関わりを持っている。詳細は考察の章で稿を改めたい。

（島田　恵子）

第3章　調　査　内　容

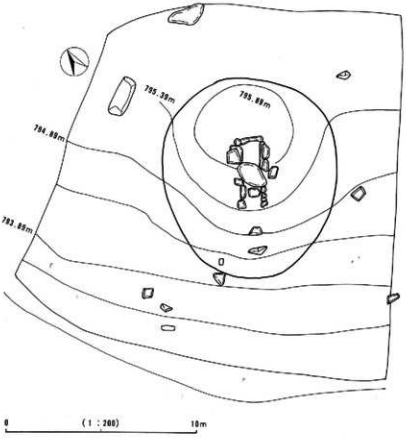
新海神社中御陵古墳

1　立　　地

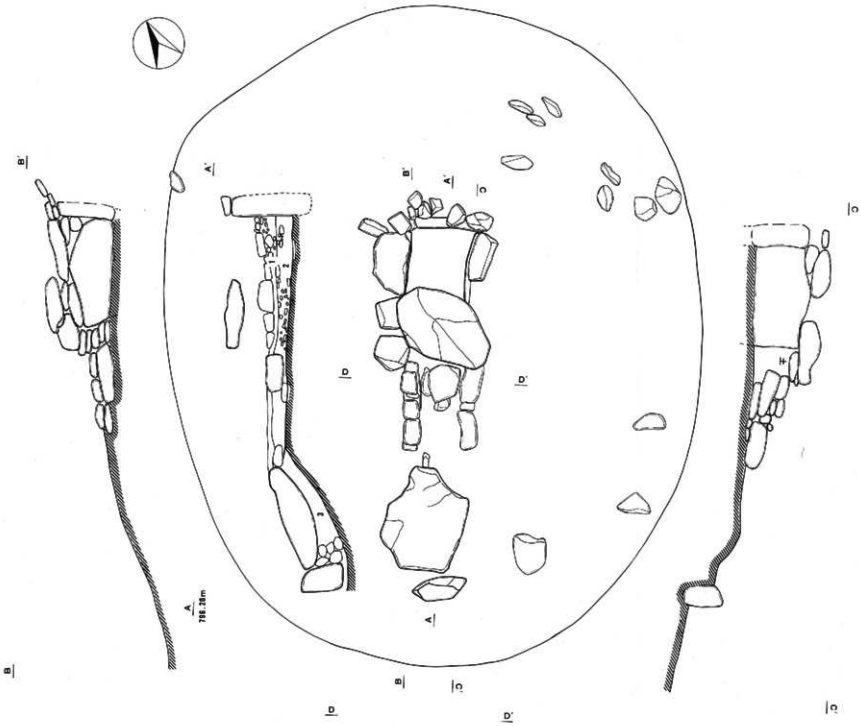
新海神社境内に所在する古墳群のうち中御陵古墳は、神社本殿の裏手にあたる山腹緩傾斜面の杉林の中に所在している。同じ杉林の中にある東御陵古墳はそれより50m離れた東方下段に位置し、比高は約3.8mを測る。また、中御陵古墳は新海神社拝殿の真裏に位置しているため、後世の拝殿建築には古墳を意識したことも考えられる。古墳の所在する山腹の山道からは神社の奥社である西花立山頂に通じ、さらに中世の山城である田口城へと続いている。新海神社境内の広大さには神社の歴史的深さが感じられる。

山腹傾斜面に築造された中御陵古墳は、羨道入口部が傾斜面の最も低い部分にあたるため自然地形に添って盛土の量が増減している。盛土は露出した奥壁および側壁の上部付近まで残っており、斜面の最上部から奥壁までは30cmの高低差があり、左右側壁では1.2m、羨道入口部までは1mを測る。この遺存状態から天井石を抜いた時点で盛土をくずした部分は約80cm前後であると考えられる。盛土は斜面最上部の土を削平して利用したかのように、傾斜の状態が不自然である。

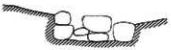
墳丘に残っていた礫は、全体図に示してあるように30～60cm大のものが13点程である。かつてこの古墳を外観



第3図　新海神社中御陵古墳全景実測図



1層（黒 色 土）腐葉土と上から落ちた溶結凝灰岩（古墳の石）混入
2層（褐 色 土）粘性の強いローム に軟質の溶結凝灰岩の小礫が多量混入
3層（明褐色土）粘性の強いローム層にやや褐色の浸みこみ



0 (1：60) 2m

第4図　新海神社中御陵古墳石室全体図

して、「積石塚古墳」であると断定した力がおられた。そのため、渡来人系の墳墓であるという記述が二〜三の書物にみられる。しかし、この墳丘の状態では素人が見てもとても積石塚とはおもえないし、葺石としても少ない程である。誤った解釈は郷土史をとんでもない方向に位置付けて後世に伝えてしまうという恐れから墳丘内面と胴張りとされている玄室内部に試掘清掃調査を実施した。

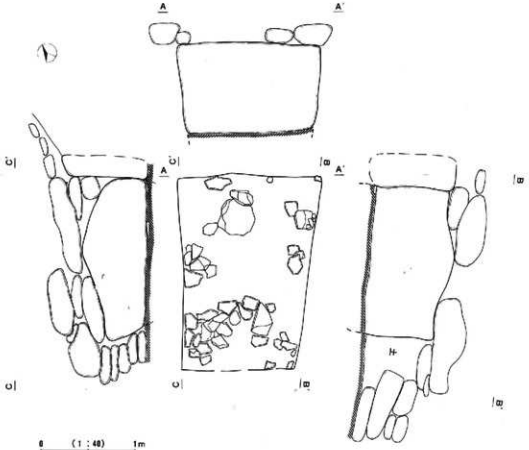
玄室上面の奥壁側の天井石はすでになく、羨道と玄室の接点部である中間地点の天井石は原形を保っていた。また、奥壁側の天井石は第4図の全体図に示したように、前庭部にずれ落ちていたので後日復元した。玄室内は盗掘されて空洞が生じており、その空間部には60cm大の溶結凝灰岩が投げ込まれた状態で横転していたが、いずれも古墳の石組に使われていた石である。

2　規模・構造

(1) 墳　　丘

墳丘の遺存状態は、明確に観察できた墳裾からみると、主軸の長さ10.5m、直交軸の長さ8.5mを測り、残存した墳丘の高さは前述したように東西左右の側壁上面まで1.2m、北側上段は奥壁上面まで30cm、南側下段は羨道入口まで1mを測る。

墳丘西側に50cm幅の簡単なトレンチを入れて、積石の状態が何えるか観察を試みた。しかし、盛土は北側傾斜面を削り取った地山層で、軟質の溶結凝灰岩が押しつぶれて砕かれたとおもわれる状態で混入しているローム層に覆われていて、人頭大の石で覆った痕跡はみられなかった。また、葺石・周溝は認められなかった。



第5図　新海神社中御陵古墳玄室実測図

(2) 内部構造

古墳石室の平面プランは、奥壁から開口部まで全長3.7mで、奥壁幅1.5m、中央で1.8m、開口部で1.2mを測り、無袖の横穴式石室形式である。主軸方位は自然地形の傾斜面に沿っているため、N－30°－Eを指す。

玄室内の底面における規模は、第5図に示した平面図では、奥壁幅1.5m、側壁幅2m、石室閉塞部幅1.2mで奥壁に向ってやや開いた方形を呈している。断面形は上面天井石が欠けているが箱状を呈すと推定される。

羨道部は、長さ1.4m、幅0.7mで玄室と深さはほぼ同一である。閉塞部の中央には、50cm×60cm、厚さ25cmの偏平な石が上にあり、その下には35cm大で厚さ15cmの角の丸い溶結凝灰岩が据えられていた。おそらく玄室を閉じた閉塞石の主要な部分にあたるとおもわれる。

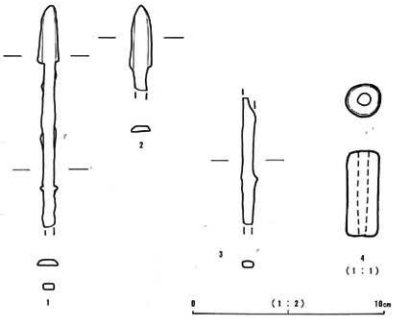
また、羨道開口部中央から2m離れた地点に、平面40cm×80cm、厚さ60cmの玄武岩が埋め込まれていた。前庭部の区画を示す重要な石であり、開口部から自然地形の傾斜に沿って50cmのレベル差をもった地点に据えられている。

奥壁は、鏡石ともいうべき板状の溶結凝灰岩1枚が用いられている。横1.5m、縦の高さ0.95mであるがこれは棺床敷石面からの高さである。これより下部に埋め込まれているため1.2m前後になるとおもわれるが、確認調査ということからこれ以上の測量はできない。厚さは20cmであるが、これは板状の自然石をそのまま使用したのではなく、加工を加えているとおもわれる。一定の厚さと高さに整えられていることからそのことが伺える。

東側にあたる右側壁は、横1.6m、高さ0.9mでやはり板状の溶結凝灰岩を使用しているが、奥壁のように先端の高さはそろえていない。自然のままで中央が山のように高くなっている。厚さは15cm前後でうすく、棺床面から30cm程上部をせまく傾斜して立てられている。

西側の左側壁は、横1.7m、棺床面からの高さは45～65cmで、右側壁と同じように上部先端は中央が高い山形状である。厚さは20cm前後であるが右側壁と同様に傾斜気味に立脚している。

左右側壁の上部には、図に示してあるように山形状の形にそって2段～3段に石が横積みされている。長さ0.25～1m、厚さ15～25cm内外の石をうまく積み重ねて隙間を埋めているが、天井石をはずした時に抜けてしまったとおもわれる石もあり空白部分もみられる。また、閉塞部付近の左側壁は、長さ30～40cm、厚さ10～15cm



第6図　新海神社中御陵古墳出土鉄鏃・管玉実測図

の丸みのある溶結凝灰岩を5段に積み重ねている。右側壁には石がなく土で覆われていたため、天井石の重圧で羨道右側壁の石がやや動いている。

羨道側壁は、左側が2段、右側が3段に積み重ねられているが、その上の1段～2段は崩されてしまったとおもわれる。玄室の敷石は、第5図に示したようにかなり抜かれていた。溶結凝灰岩、玄武岩を主に10～40cm大の石を敷きつめている。埋め込んだという感じではなく地面に敷いたという様相を呈していた。また、玄室内に残っていた土層のセクションは2層に分けられ、1層は上から落ちた木の葉などの腐植土が浸み込んだ土層で、2層は盗掘時に墳丘を壊した崩落土である。本古墳の盗掘は棺床敷石面までおよんでいた。

3　出土遺物

棺床敷石面に至るまで破壊、盗掘されていたため、遺物は玄室左側壁の閉塞部手前にへばり付いた状態で、鉄鏃3点、管玉1点が出土した。第6図1は茎（なかご）先端を欠くのみでほぼ完形をとどめている。長さ11.5cmを測り、長頸鏃篦被（とげのかつぎ）片切刃造に分類されるものである。鏃身部は3cmで頸部の3倍強となり、鏃身の断面は台形を呈し、刀でいう鎬は片面に有す。

3は、碧玉製の管玉である。片面穿孔を示すように上面の孔が大きく下端の孔は小さい。これは上から下へと片面から穿孔をしたものである。

この他に、墳丘から甕の細片1点が出土している。内面黒色でヘラの痕跡がみられる。また、墳丘周囲の地山層から黒曜石の剝片が28点出土した。この内、8点に調整痕がありスクレイパーであるとおもわれる石器もある。縄文土器片は1点もみられないことから、近くに旧石器時代の遺跡が存在することが想定される。

また、寛永通宝3枚と鋳写しの繰返しによって生じた、歪みのある古銭1枚が墳丘から出土した。これは、江戸時代の人々が古墳を敬い参拝していたあらわれであるとおもわれる。

以上の遺物から推定して中御陵古墳は、古墳時代後期の円墳でその形式は横穴式無袖型石室である。玄室に残っていた鉄鏃の長頸鏃篦被片切刃造柳葉形式から手がかりを求めてその構築年代を推定すると、6世紀末期に位置付けられよう。

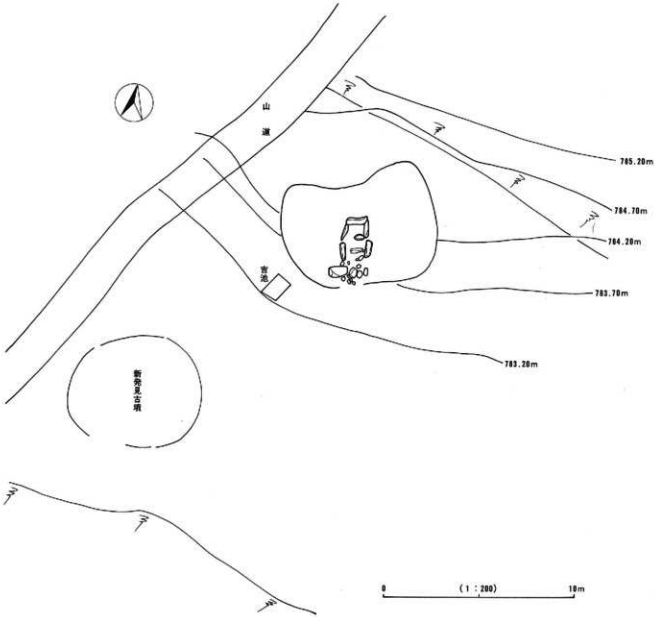
新海神社東御陵古墳

1　立　　地

東御陵古墳は、国の重要文化財に指定されている三重塔の背後の山腹傾斜面に位置し、標高は中御陵古墳から3.8m下って781mを計測する。また、古墳開口部の左側には吉池とよばれる小さな凹みがあり、古くには水が湧き出ていたので正月15日の早朝に神官さんが御符を書く硯の水をここから汲んでいたというが現在は水が全く涸れている。

古墳は、傾斜面の上段を整地して平坦面を作り出している。平坦面は奥壁までのびているがそこから羨門の墳裾にかけては自然地形のままに緩傾斜面を利用した石室設計がなされている。調査以前の古墳は、奥壁が1.2mの高さで地上に露出して立っていた。その左右には三本の杉・檜の巨木が立ちはだかって木の枝葉で暗く、奥壁に注連縄が張られていたため神秘的な雰囲気がただよっていた。そのため、この古墳を祖先の墓として祀りたいという人があらわれて古墳が鉄柵で囲われてしまった。

氏子総代さんのご理解により柵がとられ、巨木が伐り倒されたので、うっそうとしていた林は青空が見えるようになり明るくなった。檜の巨木の年輪は180年あるという。江戸時代文化十年前後に遡って植林されたことに



第７図　新海神社東御陵古墳全景実測図

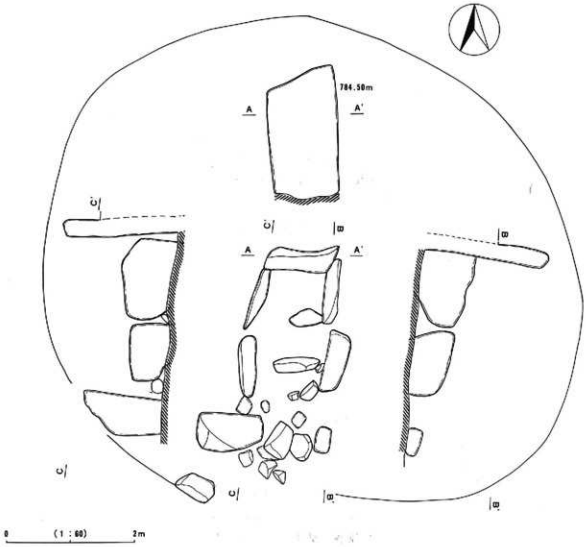
なる。

2　規模・構造

(1)　墳　　丘

墳丘の遺存状態を墳裾から計測すると、主軸の長さ7.6m、直交軸の長さ8.2mを測る。墳丘の高さは、奥壁中心から北側に向って35cm、西方の左側壁までは75cm、東方の右側壁までは30cmで、開口部は段になっていて平坦面とは50cmの高低差がある。全体に盛土の遺残は非常に少ない。

本古墳の墳丘は、盛土は少ないが東西側の墳裾はやや原形に近い状態にあるが、奥壁から北側は巨木に占地されその根が玄室に入り込んで破壊が著しく進んでしまっている。盛土も根によって全くみられない。古墳の構築にあたっては傾斜面を削って墳丘の盛土に使用していることは地形の状態から観察できるが、その土がどこへ流れたかはっきりわからない。



第８図　新海神社東御陵古墳石室全体図

(2)　内部構造

本古墳の石室平面プランは、奥壁から開口部まで全長3.2mを測り、奥壁の幅1.1m、中央で1.6m、開口部で1.4mとなる。石室形式は横穴式無袖型羨門付石室である。かなりしっかりした羨門が存在するので、中御陵古墳とはこの点が異なる。これは、奥壁が２ｍという高さであるために比率から考えても羨門が高くなければ、天井石で閉塞するにはつり合いがとれなかったと考えられる。主軸方位は、ほぼNを指している。

玄室内の底面の規模は、奥壁の最大幅1.4m、左右側壁幅1.9mを測る。しかし、玄室内は樫の根と杉の根が入り込んでその根の重圧により、左右の側壁は共に傾いたり、曲ったりと変形している。調査はこの木の根をチェーンソーで伐ったり、ノコギリで伐ったりすることに最大の時間を費やさなければならなかった。

羨道は、玄室との境に据えられた框石によって仕切られており、長さ1.4m、幅１ｍで、深さは玄室と比べると５㎝程浅くなる。

奥壁は、棺床面から最大の高さ2.1m、左側に傾いているため西方が1.6mで、厚さ25㎝、幅1.1mの板状を呈した１枚の鏡石が立てられている。中御陵古墳と同様一定の厚さに整えられている。

東方の右側壁は、横幅1.16m、高さ0.85m、厚さ20cmの板状の1枚石とさらに横幅1m、高さ0.6m、厚さ30cmの1枚石を2枚並べて玄室の側壁としている。

西方の左側壁も2枚の石が並べられている。横幅1.3m、高さ0.8m、厚さ15cmで、もう1枚は、横幅0.9m、高さ0.6m、厚さ20cmを計測する。

左右側壁2枚目の中心部棺床には、長さ70cm、横幅18cmの框石が据えられて、玄室と羨道との仕切りとなっている。

これら左右の側壁は、巨木の根による重圧により徐々に動いて傾き、曲ってしまったので、直線的できれいな側壁ではなくなっている。

羨道の右側壁は開口部際がぬかれて欠失している。左側壁も同様である。開口部左側の羨門は、幅45～60cm、高さ1.0mで形の良い門である。右側の羨門は、幅40cm、高さ1mであるが、羨道の中央に転がっていた。

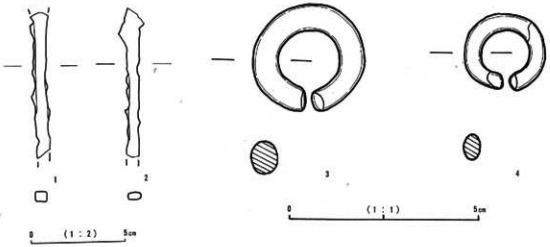
第9図　新海神社東御陵古墳玄室敷石状態図

第9図に玄室の敷石状態を示した。本玄室の敷石は、板状で形が整えられている石に比べて、自然のままのぶ厚い大きな石が多く並べられているのが特徴である。大きなものは、60cmを測る。

全体に東御陵古墳の石室は、巨木による玄室の破壊と開口部左右の側壁、羨門の破壊が著しかったが、本調査で巨木の伐採をして根の侵入を防ぎ破壊の進行を留めることができて、保存と復元に役立つことになった。

3　出土遺物

本古墳は、すでに天井石が取り除かれ周辺にはその影も形もなく、棺床面まで掘り返されていたので遺物は少ない。第10図に示した鉄鏃の頸部2点と耳環2点が全てである。鉄鏃は、共に7.5cmの残存で、腐蝕が進んでいるため棘箆被の有無がはっきりしない。1は頸部断面が厚い。耳環は、木の根直下にへばり付くように残っていた。



第10図　新海神社東御陵古墳出土鉄鏃・耳環実測図

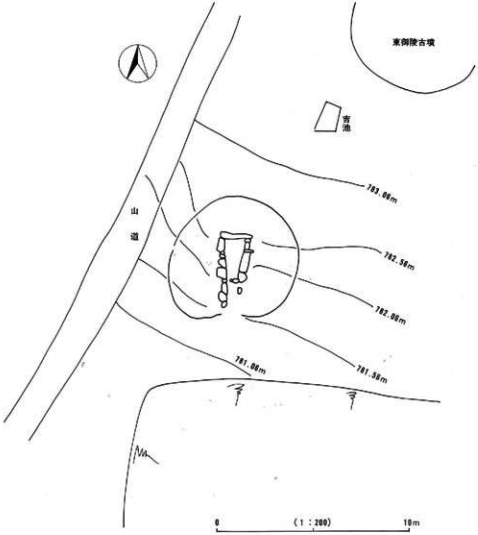
3は当初から白黄色に光って重量もありずっしりしている。外径2.8cm、内径1.6cmである。4は、小形で外径2.1cm、内径1.2cmで上面は銀色を呈している。一部銀が剝離して内部の軸が見えるので、表面にかぶせた銀の断面を観察することができる。3、4共に金箔・銀箔を貼り付けた接合部がみられないことで、メッキによると考えられる。また、3は当初銀色に近かったが時間がたつにしたがって金色が強くなっている。

本古墳は、4点の遺物の出土と鉄鏃が頸部だけで鏃身部がなかったため構築年代を決定する資料が乏しい。しかし、構造などから推定すると6世紀末期～7世紀代であると判断される。

新海神社新発見古墳

1 立　地

本古墳は、東御陵古墳から9m離れた西南寄りに位置し、中御陵古墳へ向かう右側の道沿いにあたる。また、古墳開口部から3.5mの場所は土堤となり比高2mの段差がある。ここには、蚕神様が祀られた社殿が建っているため平坦であるが、社殿建築の時に山裾を削ったものと考えられる。その下段は比高6mで急な石段が築かれており、国の重要文化財に指定されている三重塔が優美な姿をみせている。本古墳はこのように山腹傾斜面の端



第11図　新海神社新発見古墳全景実測図

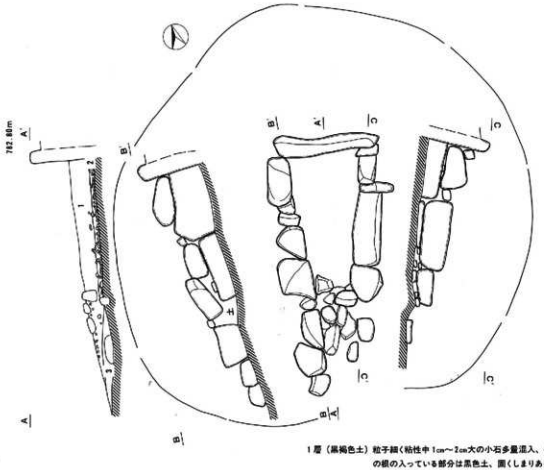
部にあたるため、墳丘の盛土がほとんどなく自然地形の緩やかな斜面に立地している。

発見の動機は、筆者が東御陵古墳の周囲を清掃のため、杉の落葉をまとめたのちに地面全体に生えている竜のひげと呼んでいる草を一本一本抜きとる、いわゆる草取りを行っていた時だった。平成七年度の夏は特別な暑さで、全身に汗が流れてひどい状態であった。草を抜いていると加工したと感じられる溶結凝灰岩が30cm程の長さに顔を出していた。これはただの石ではないと思われたのでその石を露出させると、長さ1.6m、厚さ15cmの石の面が姿をあらわした。表面は同じ厚さに整えられていたのですぐに奥壁の鏡石であると直感した。そこには、東御陵古墳を囲っていた鉄柵が置いてあったため、翌日、皆で重い鉄柵を移動させた。

2　規模・構造

(1)　墳　　丘

墳丘の盛土がほとんど見られず、斜面に沿って設計し築かれた石室は、開口部直下に２ｍの比高をもつ土提があるため、位置的には条件が悪くとうてい古墳の存在を想定することはできない。まして、その上に杉の枯れ枝



第12図　新御神社新発見古墳石室全体図

や雑草が生えていればなおさらわかりにくい。自然地形そのままの状態にあったので現在まで発見できなかったのである。

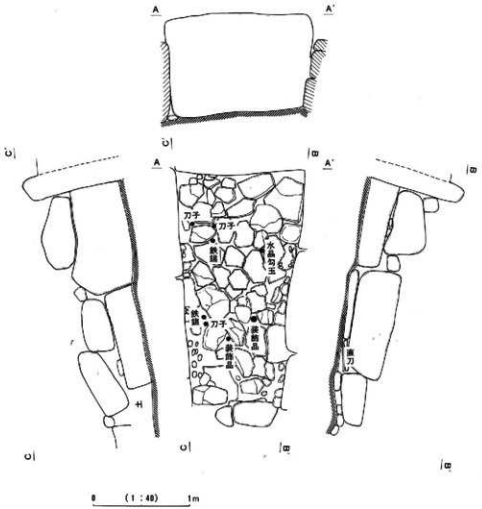
意識的に調査して墳丘の状態をみると、ほんのりと盛り上がった様相が観察できる。主軸の長さ12m、直交軸の長さ13mを測る。遺残した墳丘盛土の高さを墳裾からみると、北側、東側、開口部が5～10cm、西側が地形的に下っているので左側壁まで40cmの高低差があるがこれは盛土によるものではない。墳丘には葺石とおもわれる石はおろか礫の散布は少なかった。

(2) 内部構造

新発見古墳石室の平面プランは、奥壁から開口部まで全長4mを計測し、奥壁幅1.65m、中央で同じく1.65m、開口部で1.1mを測る。奥壁から開口部に向ってすぼまる横穴式無袖型石室形式である。断面形は上面の天井石が抜けてはいるが箱状を呈していると推定される。主軸方位は、N－16°－Eを指す。

玄室内棺床面の規模は、奥壁幅1.35m、側壁幅2.4m、玄室閉塞部幅0.9mを測り、奥壁から閉塞部に向って45cm狭くなる不整な長方形を呈している。

羨道部は長さ1.6m、幅1.2mで、玄室との仕切りに埋め込んだ框石とおもわれる25～30cm大の石が2個と閉塞



第13図　新海神社新発見古墳玄室実測図

石が残っていた。玄室と羨道とのレベル差は地形が傾斜している関係から差はないが、実際には玄室棺床面よりやや高い位置で保存のために掘下げはとどめている。また、羨道右側壁は石がほとんど抜けていた。

奥壁は、横1.6m、高さ1.05m、厚さ15cmを計測する板状の溶結凝灰岩の１枚石が使用されている。厚さと上面が共に一定に整えられていて加工の痕跡が伺える。

東側の右側壁は、長さ0.5～1.1mの石を３個使って基礎を築いている。中央の石は下に長さ70cm、厚さ10cm足らずの石を土台にして、長さ1.1m、高さ45cmで上面が平である巨石を傾斜して立ててある。このため棺床の幅が広く、上面が狭くなる。当初、この傾斜は後に土の重圧で動いたのではと思っていたが、袖が一直線にそろえられていることから、意図的な設計による傾斜であると判断される。

西方の左側壁は、基礎に長さ1.1m、高さ25～60cmの石を２個使用している。傾斜しているため奥壁側が高く２段に積み重ねてあるが、開口部入口付近になると１段になっているがバランスがとれている。

玄室の敷石は板状の玄武岩、溶結凝灰岩を並べている。10～45cmまでの石を使っているが、重ねてある部分もありやや粗雑な敷石状態である。玄室棺床面は横幅1.35m、左右の長さ2.4mを測る。また、奥壁の敷上面までの深さは１mとかなり浅くこれは本古墳の特徴でもある。

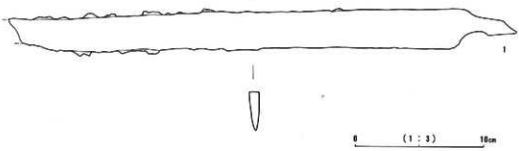
玄室内のセクションは３層に分けられる。１層は固くて締まりのある土層で１～２cm大の小石を多量混入していた。２層中には１層より大きな５～10cm大の礫が多量入っていたが、墳丘の盛土の流れ込みとおもわれる。

3　出土遺物

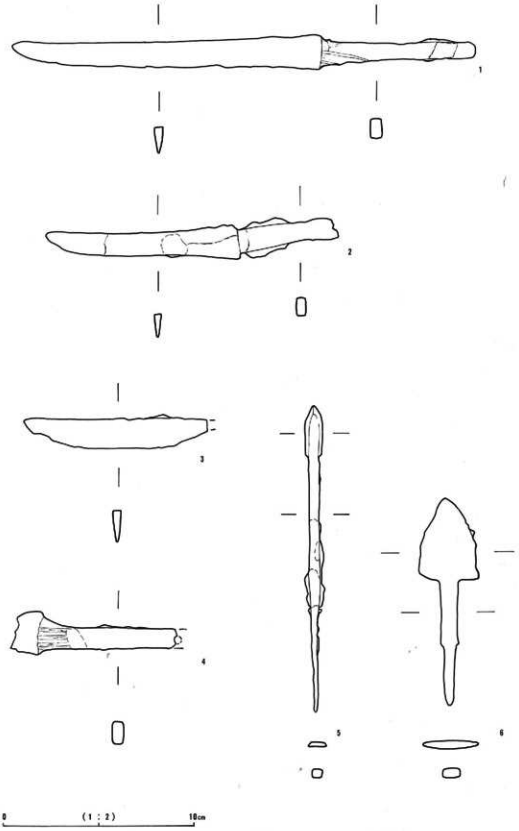
本古墳出土の遺物は、大刀１、小刀１、刀子３、鉄鏃２点があり、装飾品として勾玉９、ガラス小玉８、管玉１、蛇紋岩の大玉１、水晶の切子玉３、耳環２点が出土し、副葬品の１セットがそろった感を呈している。

出土状況を見ると、大刀が右側壁の下部敷石直上から出土した。側壁に押し込んだ様相であり、切先部が欠失しているがこれは当初からの状態であるとおもわれる。現存長さ40cmで、この内茎（なかご）は関から４cmを測り先端部が欠けている。背は0.7cmで重量もある。

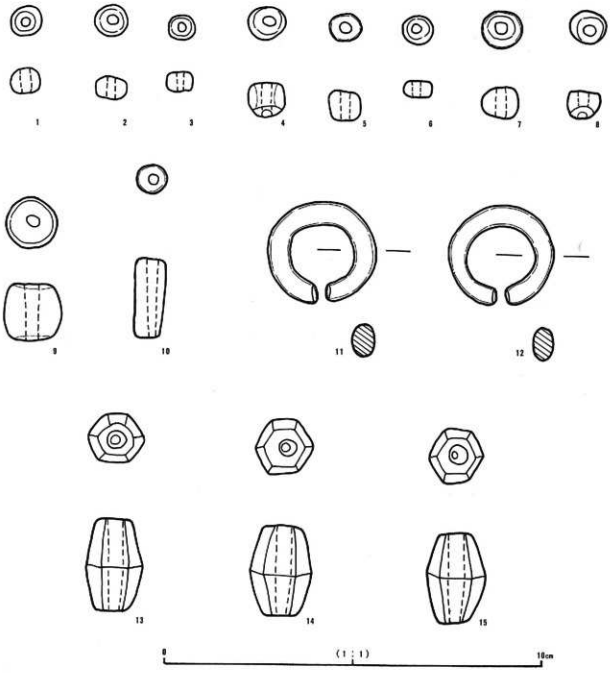
第15図１は、小刀である。完形品で全長24.5cmで、刀身16.2cm、茎8.1cmを測る。茎には鞘（さや）の腐蝕が筋状に残っている。背は最大幅0.5cmで刃は鋭い。２は反りのある刀子で全長15.5cmでほぼ完形品である。とくに切先と茎に鞘の付着物が残り、切先の刃はかくれている。関付近の付着も著しい。背は0.3cmあり頑丈である。３も反りのある刀子の刃部である。ところどころ鞘の付着物がみられる。残存刀身は9.6cmを測る。４は、刀身を１cm程残し、茎７cmで先端に目釘孔が半分残存しているので茎末端部を欠いていることが伺える。関の下部には両面に木質部が残っていて、さらに目釘孔までは鞘の付着がかなり付いている。背はわずか残り0.5cmを測る。



第14図　新海神社新発見古墳出土大刀実測図



第15図　新澁神社新発見古墳出土小刀・刀子・鉄鏃実測図



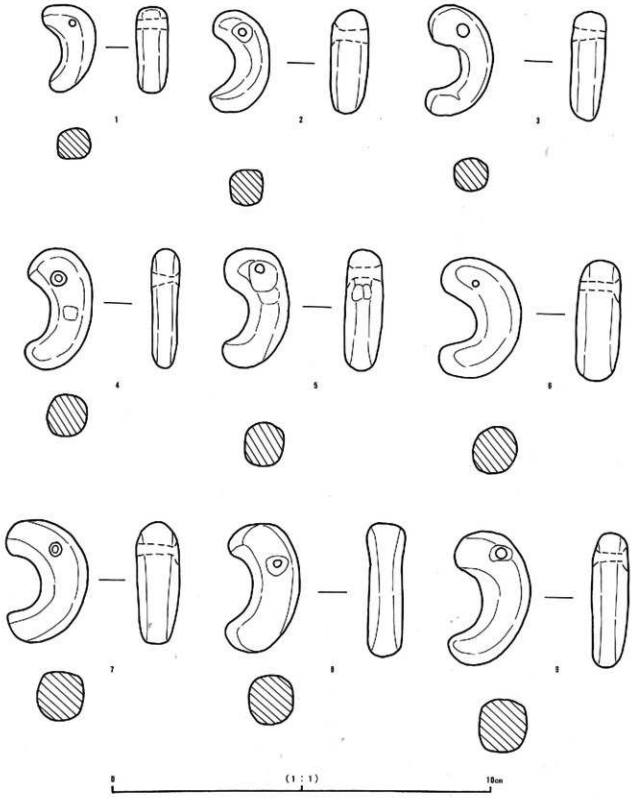
第16図　新海神社新発見古墳出土装飾品実測図

5・6は鉄鏃である。5は、腐蝕の少ない完形品で全長16.1cmを測る。鏃篦被の部分にちょうど腐蝕があるが長頸鏃篦被片切刃造柳葉に分類され、中御陵古墳出土の鉄鏃と同一形態である。6は、短頸篦被平造長三角鏃で全長10.8cm、鏃身部は長三角形で4.3cmを測る。編年的には5より新しく6世紀末期から7世紀前半に位置付けられている。これらの武器類は、第13図に示してあるように左側壁際の2箇所に分かれて棺床面から出土した。

装飾品は、果たして古墳であるか否かの試掘調査を行っている時のトレンチ掘りの時に出土した。玄室内は40cm程の地点で敷石があらわれたが、この浅い状況からとても棺床面とは考えられなかった。しかし、先ず奥壁から80cm離れた地点から第17図1に示した水晶の勾玉が出土した。次にこの地点から70cm離れて、勾玉、ガラス小玉、耳環、切子玉、管玉がゾロゾロとまとまって出土し、その他一部の勾玉、切子玉は30cm離れた地点に散乱し

ていた。副葬品の類飾りとしてこの場所に置いたと考えられる。

第16図１～５はガラス小玉で紺色に近いブルー系である。径0.7～1.0cm、厚さ0.5～1.0cm内外の規格で、形、厚さ、孔の穿孔など各々異なり一定ではない。８は、径0.8cm、厚さ0.4cmのスカイブルーの色調がきれいなガラ



第17図　新海神社新発見古墳出土装飾品実測図

ス小玉である。7・8は、カーキ色をした滑石製の小玉で、7は径1cm、厚さ0.8cm、8は径0.8cm、厚さ0.7cmで孔は0.3cmを測る。

9は蛇紋岩の大玉で径1.3cm、厚さ1.4cmを測る。孔の面は上下共にやや凹みを入れてきれいに磨かれている。

10の管玉は、径0.7cm、長さ2cmの円柱状を呈し、穿孔は片面から行われている。

11・12は耳環である。径2.6cmの正円形で断面は上面がふくらんでいる。共にサイズも同一に近いことからセットであるとおもわれる。両者共に銅芯は延棒状のものを使用し、表面の鍍金は金と銀の合金であることが、その光沢から観察される。

13～15は水晶の切子玉である。形状は截頭六角錘を二つ重ねた形で透明であるため孔がよく見える。13は、長さ2.4cm、幅1.5cmで、14・15は、長さ2.3cm、幅1.6cmを測る。穿孔は片面で統一されているが、孔の周辺の抉りは少なく、面はきれいに整えられている。

第17図は勾玉9点を図示した。1が水晶製で2～9は瑪瑙製である。1の水晶製は、長さ2.2cmで小形である。断面は角の丸い方形を呈し、0.8cmを測る。穿孔は片面から行われている。中央の湾曲が少ないが小形なのでこの程度がバランス的に適している。形と透明な水晶は神秘的な感を呈している。2は長さ2.7cm、3は2.9cmである。4～9は長さ3.6～3.9cmで断面は1～1.3cmを測る。瑪瑙はそれぞれ色調、透明度に変化がある。小形の1を除いては「コ」の字形である。この他、墳丘から土師器甕破片2点が出土している。

本古墳は調査中偶然発見した古墳であるが、玄室が浅いためおのずと墳丘も低かったので全く現在まで気が付かないほど目立たなかったのである。天井石は取り去られていたが、副葬品がセットで出土したことから棺床付近までは荒らされていなかったと考えられる。骨は、奥壁寸前の右側壁際から少量出土した。小さい骨片なので詳細は不明である。玄室の規模と副葬品のセットから一回だけの埋葬であったと判断される。さらに、東御陵古墳に隣接して墳丘が接触しあう近さに構築されている。山腹の斜部の場所で地理的条件があまりよくない場所である。こうした点から推定して本古墳は東御陵古墳に埋葬された被葬者と関係が深かったと考えられる。そのため、古墳はこのように隣接しているのであろう。構築時期は、鉄鏃の形態が中御陵古墳と同一の長頸棘篦被片切刃造柳葉と、外にもう1本これより時期的に新しい短頸で鎌身が平造で長三角形の鉄鏃が出土していることから、6世紀最末期から7世紀前半の所産であると推定される。

新海神社西御陵古墳

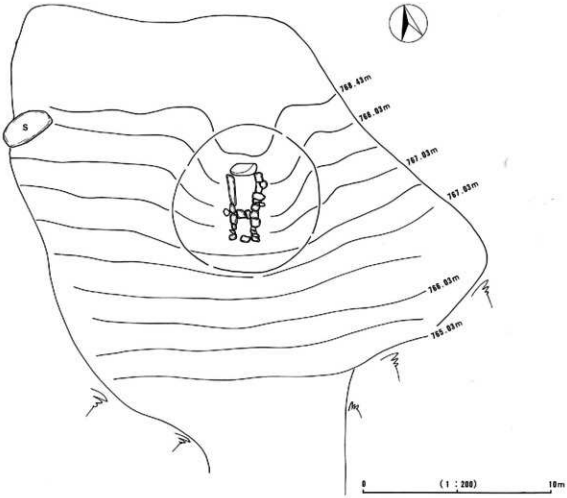
1 立　地

新海神社西御陵古墳は、中・東御陵古墳とは沢を一つ隔てた西花立山の山麓に所在する。傾斜のきつい南面傾斜面で、標高は767.53mを測り東御陵古墳と比較すると14m低い位置となる。背後の西花立山は柱状節理の溶結凝灰岩の岩が松林のあい間から姿をあらわしている。

この古墳は、昭和62年に実施された「臼田町遺跡詳細分布調査」の際、伴野神官さんから届出があり踏査を行った。その時すでに奥壁の二段目の石が見えるところまで露出していたため一目瞭然で古墳であることが判明し、西御陵古墳と伴野神官さんが新たに命名して登録された新発見古墳であった。

古墳の所在する山麓からは、宮代、川原宿、中町まで一望することができ、まさに自己の統括する領地が眼前に広がる絶景の地理的環境にある。なぜこのような急斜面に築造したのかがこの景観によって理解できる。

墳丘は、北側斜面を削り取って平坦面を作り、同時に削り出した土を盛土としている。中御陵古墳、東御陵古墳、新発見古墳も同様であったが、奥壁から北斜面を平坦にして、両側壁から開口部までは傾斜した自然地形を



第18図　新海神社西御陵古墳全景実測図

うまく利用した石室ならびに墳丘の設計がなされていることが新海神社古墳群の特徴である。

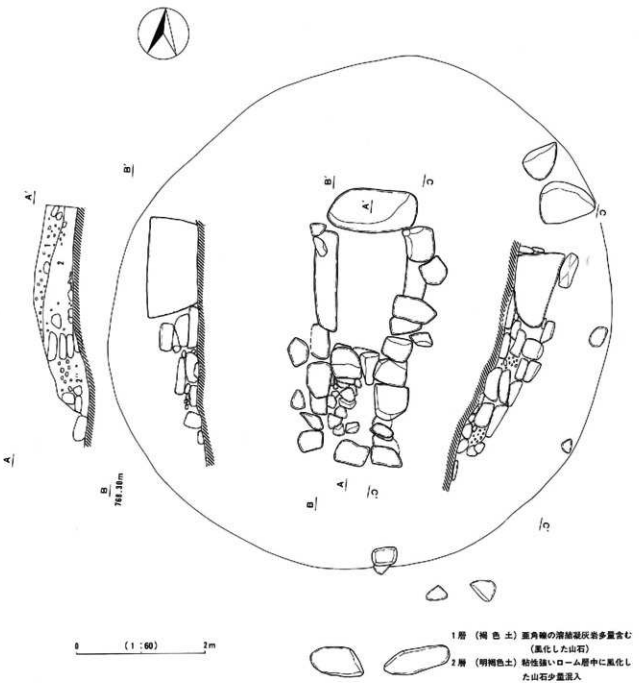
2　規模・構造

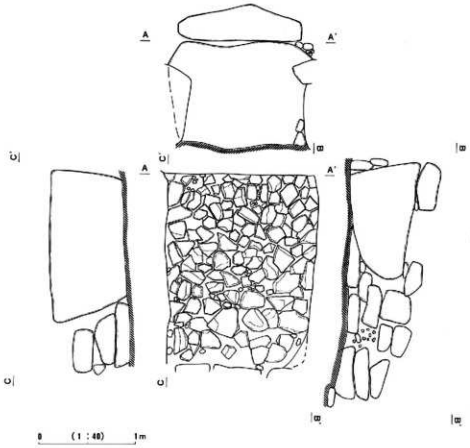
(1)　墳　丘

墳丘の遺残状態は、盛土が観察できる部分と外周の列石が残っていた北東コーナー側部分から計測すると、主軸の長さ８ｍ、直交軸の長さ7.8mを測る円墳である。残っている墳丘盛土の遺残状況は、北側奥壁周囲、左右側壁までのレベル差は約50cmを測る。傾斜する地形に沿って緩やかな盛土となってわずかな残存状態で円を描いているが、松の木が三木墳丘に三角形状に生え、その根によって墳丘の形もかなりくずれていた。

(2)　内部構造

西御陵古墳の石室平面プランは、全長4.4mを測り、奥壁幅1.4m、中央で1.8m、開口部で1.4mとなる。右側壁はやや湾曲気味に玄室から開口部へ続いている。反面羨道の左側壁はやや外側に寄っているが、石室形式は横穴式無袖型石室である。主軸方位はほぼNを指している。


A'
B'
A
B
A'
B'
A
B
A'
B'
A'
B'
A'
B'



第20図　新海神社西御陵古墳玄室実測図

で石が動きそうであった。

西側の左側壁も奥壁際には横幅1.55m、高さ80cm、厚さ20cmの１枚石が立てられている。それに連なる石組みは、横幅15～30cm、厚さ10cm大の礫が２～３段に積み重ねられている。石と石との空間は小さな石で支えて埋め込んでいる。

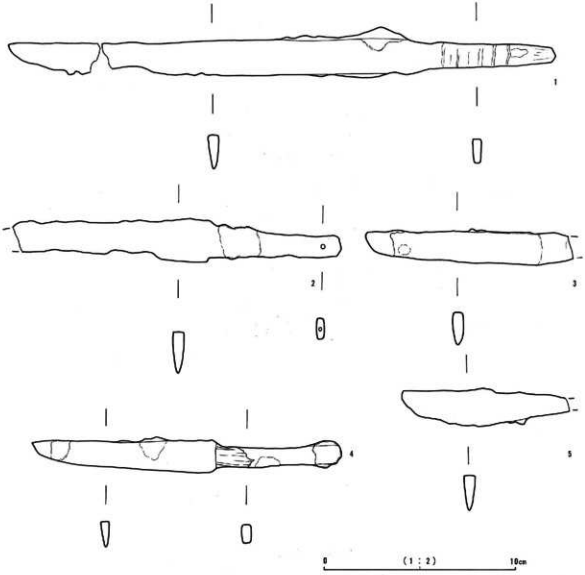
玄室と羨道との間には20～30cm大の平らな石を２個並べて２段重ねにして閉塞している。左側壁際には20cm大の偏平な石が３段に積まれていたことから、このように中・小の石を重ねて玄室と羨道とを仕切り閉塞していたとおもわれる。全体に本古墳の石組みは小さな石が使用されている。

玄室内の敷石は、板状の溶結凝灰岩、玄武岩を主に使って並べられ、15～30cm大の石がぎっしりときれいに敷かれていた。玄室内に残らていた土層のセクション は２層に分かれ、１層が褐色土で礫を多量混入、２層は粘性の強いローム層で、共に墳丘の盛土の崩落土である。羨道は明褐色を呈した粘性の強いローム層である。

本古墳は、すでに天井石が全て抜かれておりその残骸もみられなかった。そのため、盗掘が入っていると思っていたが、棺床面までは至っていなかった。敷石が密で動いていないこと、遺物の出土状況からみても盗掘は途中で止まっていると考えられる。

3　出土遺物

副葬品は、耳環が左側壁と奥壁手前60cm内の範囲に散乱していた。鉄鏃は右側壁の幅40cm×1.7mの範囲に集中していた。中には７本程並べられた状態にあった。小刀・刀子は奥壁に近い右側壁から３点、左側壁から１点

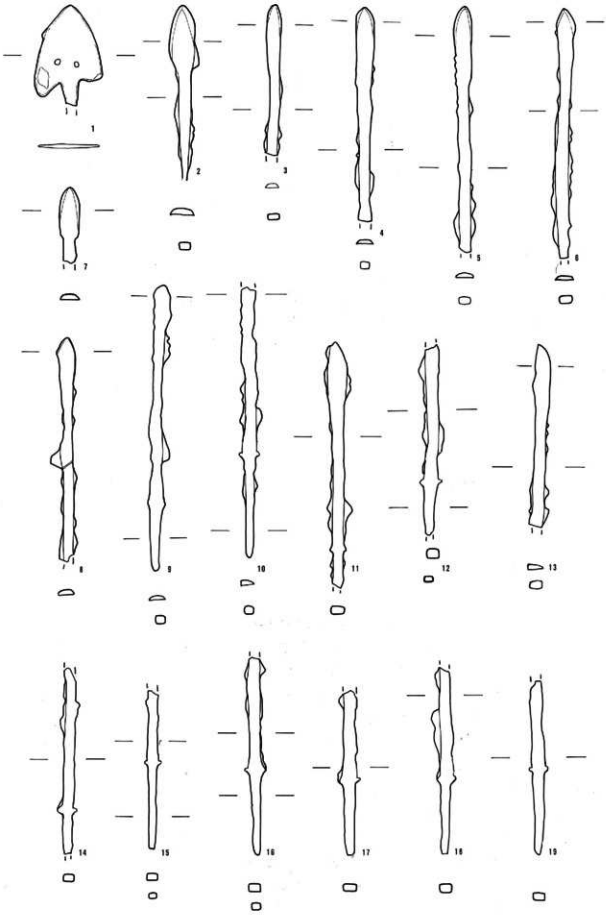


第21図　新海神社西御陵古墳出土小刀・刀子実測図

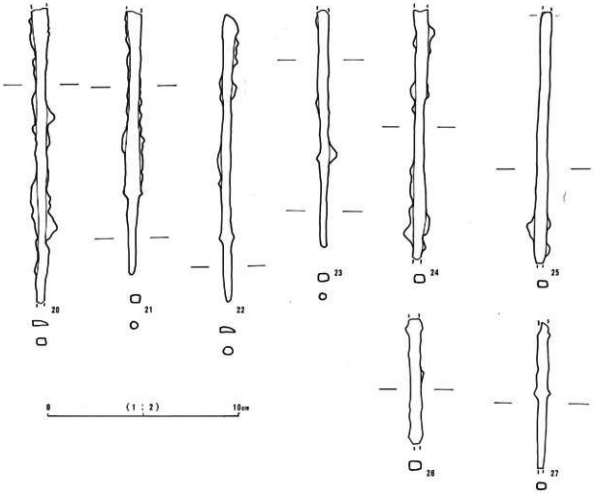
出土している。

第21図に小刀３、刀子２点を示した。１は切先部が離れてしまっているが全長29cmを測り、関を背の方に有している。茎には鞘の木の付着が筋状にわずかに残り、繊維を巻いた痕跡も認められる。２は関と目釘の孔を有し、切先部を欠損している。３は小刀の切先部のみが残っていた。全体に鞘の付着が多い。４は、完形の刀子で茎の部分に鞘の木の筋や先端は付着のために丸く変形している。５はずっしりと重いので小刀かとおもわれる。

第20～21図に鉄鏃27本を図示した。これらを形式別に見ると、１は、柳葉式の腸抉両丸造で短頸であるとおもわれる。孔が二つあり矢ばさみを付けるためである。２は、ほぼ完形の短頸鍬箆被両丸造柳葉の部類に入るとおもわれるが鍬箆被の部分に腐蝕が入りはっきりしない。３～27までをそれぞれに分けると、頸部が長い鍬箆被片丸造鏃(のみ)箭と長頸鍬箆被平刃片刃箭とに二大別される。この内、３～６、８・９が明確に鍬箆被片丸造鏃箭である。平刃片刃箭は、10・13・20・22である。腐蝕などにより明確に判断できない、11・21・24・25がある。その他は頸部のみで鍬箆被の残っている部分を図示した。とりわけ鍬箆被の部分に腐蝕が多く付着して、断面図が三角形になっているものが多い。



第22図　新海神社西御陵古墳出土鉄鏃実測図No. 1



第23図　新海神社西御陵古墳出土鉄鏃実測図№2

耳環は8個出土した。外径2.9～3.1cm、内径1.4～1.7cm、幅0.4～0.7cm、厚さ0.4～0.8cmを測り、形状は円形または円形に近い楕円形を呈している。断面の形状は2が楕円形を呈しているのみでその他7点全て円形である。

1は、出土時点から銀色に輝いていた。両面の中央は銀を貼り合わせた裂け目のようなものが生じているので金銀合金の箔を使用したとおもえるような状態であるが定かでない。内側には金色が光っており、重量がある。

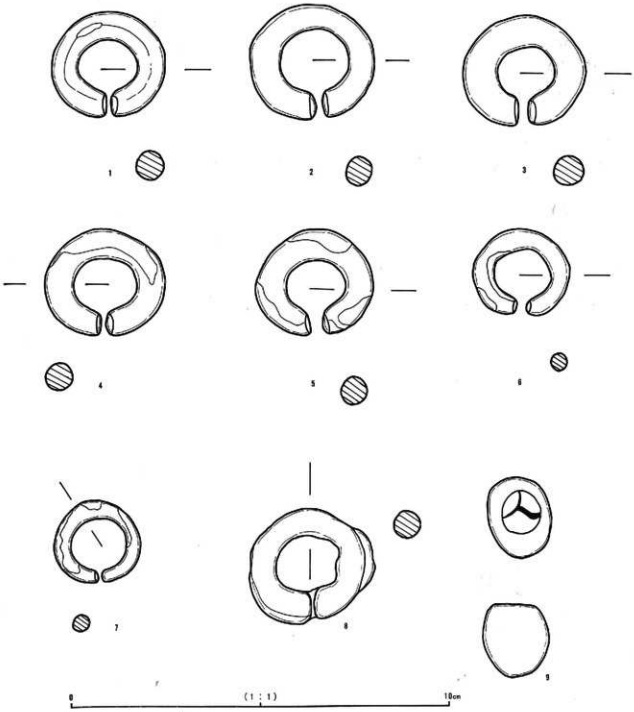
2～7は、緑青がふき出て表面の鍍金はすべて剝落している。8は鉄製である。また、6・7は小形であるが、7の方がさらに小さい。2は、銅芯が中空で軽く一部破れて中空の状態が見える。他は全て延棒状の芯であるため重量がある。

8の鉄製は腐蝕が出て変形している。球状の部分が腐蝕で埋まり環になっている。

9は、楕円形の小石の上面を平坦にして「人」の字のような文様が刻印されている。意図的な人工が加わったものであると考えられる。土器は土師器杯片の細片が1点出土したのみであった。

骨は、左右の側壁近くの敷石面から出土した。大腿骨、上腕骨などで、歯も二本出土した。それによると右下第一大臼歯（20才代）、左下第二大臼歯（30才代）であると鑑定されている。

本古墳は、多量の鉄鏃など武器が多く被葬者はこの地を統括する権威のある人物の家族墓であったと思われる。鉄鏃の編年から6世紀末から7世紀初頭の所産であると判断される。　（島田　恵子）



第24図　新海神社西御陵古墳出土耳環・石製品実測図

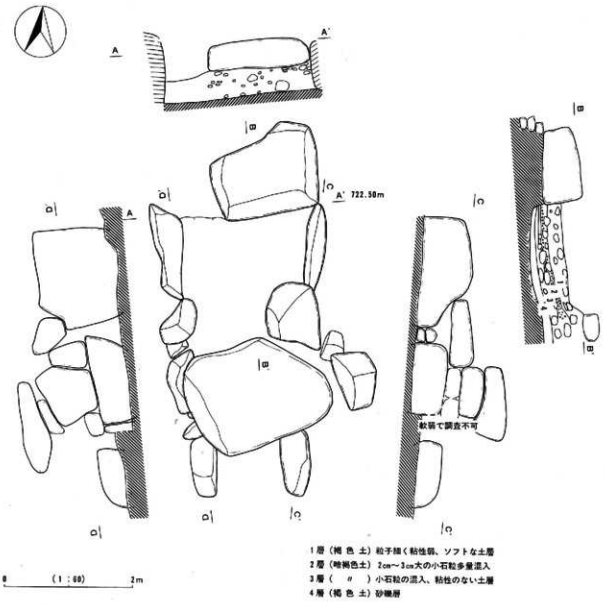
五庵古墳

1　立　地

五庵古墳は、田口下町部落内の住宅の路地に所在する。標高721.9mの平地で左右、前方、後方にも住宅がせまっていて景観が悪くその上、羨道と玄室の境には茂の木が根を張って古墳におおいかぶさっている。さらに、

右側壁際にはくるみの大木があり、左側壁際にも子どもの丈の木がところ狭しと生い茂っている。閉塞部から玄室にかけて天井石があるが、玄室中央から奥壁にかかる天井石は持ち去られて、玄室内はゆ穴があいてゴミが捨てられていた。また、奥壁の石は１枚石が立てられていたとおもわれるが、それが寝かせられており一部路地内の通行に邪魔になるとのことで割られてしまったようである。奥壁部分も左側壁部に近い場所が１ｍ程穴があいてしまい、ここから盗掘が行われたと思われる。左右の側壁も全て露出していた。

築造当時の景観は、北方に田口城が築かれた山があり、東側は中町の平坦地が続き、南側は南川に至るまでゆるやかに下る平坦地が広がっている。おそらくここは水田の開けた生産の場であったとおもわれる。また、西方は三分から原地区の耕作地が展開しており、古墳にはこの一帯を配下に持つ首長が埋葬されたであろう。円をえがいて盛り上げた墳丘は四方から一際目立って見えたにちがいない。現在は、家と家との間にところせましと大きな石を露出させており、往古のおもかげはみられない。



第25図　五庵古墳石室全体図

2　規模・構造

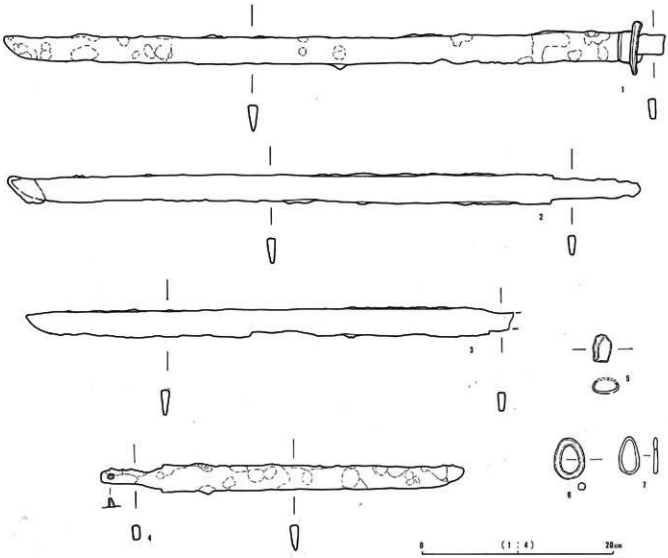
(1)　墳　丘

前述したように墳丘は全く残っていない。左右側壁際まで削り取られてしまい石室の石組みが露出しているという状態であった。地面から天井石まで1.2mを測るので、墳丘の盛土は地面から２m以上あったと考えられる。石室の長さから推測するとおそらく墳丘の直径は15mはあろう。

(2)　内部構造

崩壊が進んでいた古墳ではあったが、清掃、整備をしながら構造をつかむことができた。古墳石室の平面プランは、現存の全長は4.4mを測るが羨道閉口部が一部完全に崩壊されていることから、石室全長は5.5mを測ると推定される。右側壁は羨道まで一直線で結ばれているが、左側壁は羨道にかけて袖がつけられているとおもわれるため、石室形式は横穴式片袖型石室になろう。主軸方位はほぼNを指している。

玄室内棺床面の規模は、奥壁幅２m、左側壁幅2.8m、玄室閉塞部は1.6m程になるとおもわれるが、この部分は石組みが不安定なことと渋の木の根があり片袖の玄門部は調査することができなかった。



第26図　五庵古墳出土大刀実測図

羨道は幅1.9m、長さ１mであるが破壊されて開口部先端の両側壁が欠落している。玄室と羨道とのレベルは30cm程羨道の方が高い。傾斜面に築かれた新海神社古墳群と平地での構造の違いであろうか。

奥壁は、現在奥壁側に倒れている横1.6m、縦1.4m、厚さ60cmの巨石が路地内の通行に出張りが危険であるからと縦幅１m内外を割り取ってしまったということから、多分この巨石が2.4mの高さで立てられていたと考えられる。

左右両側壁は、奥壁寄りに横幅1.7m、高さ80～120cmの大きな石を先ず使い、それに続く石は、幅80～1.4m、高さ30cm前後の溶結凝灰岩を２～３段に積み重ねている。

天井石は、閉塞部から玄室にかけて横幅2.3m、縦幅1.6m、厚さ40cmの溶結凝灰岩が横架して残っていた。おそらくこの天井石は築造当時のままであるとおもわれる。棺床面から天井石までの高さは1.5mである。

羨道は、左右側壁の石を除いた道幅のみで１mを測る。片袖と考えられるのは左側壁が奥壁から一直線であるのに対し、羨道右側壁は約40cm内側に入っている。運悪くこの内側へ入る部分がとくに軟弱で天井石がズリ落ちる心配から調査することができなかった。しかし、羨道右側壁の急直線での内側への入り込みは不自然な状態である。石室の奥壁幅2.7m、中央で2.4m、開口部で1.8mを測り、奥壁と羨道では90cmの差が生じている。以上から右側の羨道が入り込んだ片袖式であると判断した。

玄室内に残っていた土層は、１～４層に分けられる。１層は粒子の細いやわらかい土層であるが10～20cm大の玄武岩を中心とする礫が多量混入していた。２・３層は暗褐色を呈し、２層が小石粒を多量混入し、３層は小石粒の混入は少ない。４層は砂礫層である。この下部に敷石が認められたが危険なため実測を取り止めて、埋めもどして保存のため清掃、整備を行った。

3　出土遺跡

遺物は主に３層下部から出土した。奥壁中央際、左側壁際、玄室入口の左側壁際に点在していた。第24図に大刀を図示した。大刀は玄室入口左側壁に重なり合うように横に並んでいた。玄室にはこれを跨がなければ入れない状態にあった。１は、全長70cmで背を玄室側に向け切先は閉塞部コーナーに向けて３点の大刀の最上部にあった。４点共に切先は左側壁方向に向けられて重ねてあった。刃部長さ64.5cm、刃部最大幅３cm、茎部は先端を欠失し４cmの残存であるが、錆がしっかり付いたままの状態で出土した。刃部全体に鞘の一部分が腐蝕してこびり付いている。切先は丸味をもっているので脹切先である。棟は厚さ１cmを測る。

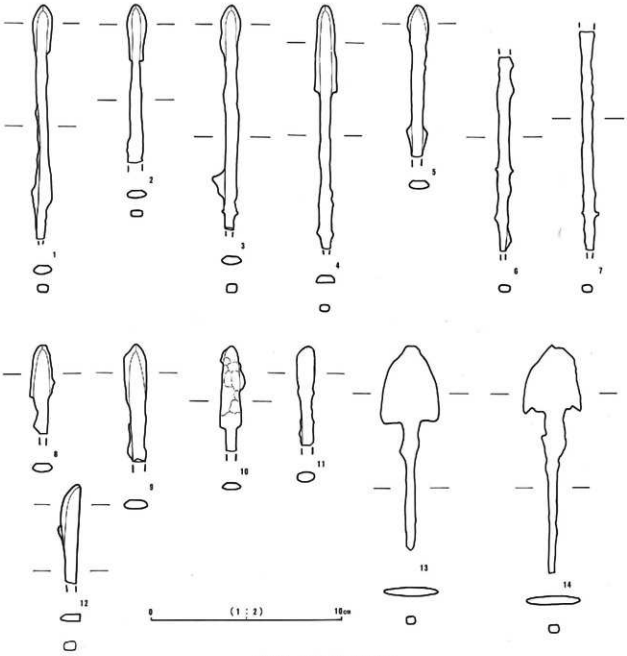
２は、全長67cmを測る大刀で、刃部長さ56.4cm、刃部最大幅３cm、棟厚0.8cm、茎部の長さ９cmを測り、刃関と背関を有す。切先には鞘の一部分が付着しており正確な実測はできない。１と同様刀身全体に鞘の腐蝕物がこびり付いている。目釘孔はかなり丁寧に探したが腐蝕のためか見られない。

３は、４と重なって上面にあった。茎先端を欠くが全長51cm、刃部長さ49cm、刃部最大幅2.8cm、棟厚0.8cmを測り、切先は脹切先である。刃関を有すとおもわれるがこの部分の裏側に大きな鞘の腐蝕があり明確でない。

４は、３の下から出土した。全長38.5cm、刃部長さ32cm、刃部最大幅2.5cm、茎部の長さ６cm、棟厚0.8cmを測り、背関・刃関を有す。目釘は付いたままの状態で長さ0.8cmである。切先は脹切先であるが先端0.5cmの背の部分がやや折れ曲がっている。全体に鞘の腐蝕が付着している。

５～７は刀装具である。５・６が鉄製で７は銅製である。これらは大刀出土地点とやや離れた左側壁際から出土した。

第25図は鉄鏃を示した。１～３・５・８・９・11は、長頸棘篦被片切刃造柳葉に分類される。完形品はないが、１は下端を少し欠くが、これから全長を推し測ると完形品は15cm位とおもわれる。鏃身部長さ2.5～３cmで、棘



第27図　五庵古墳出土鉄鏃

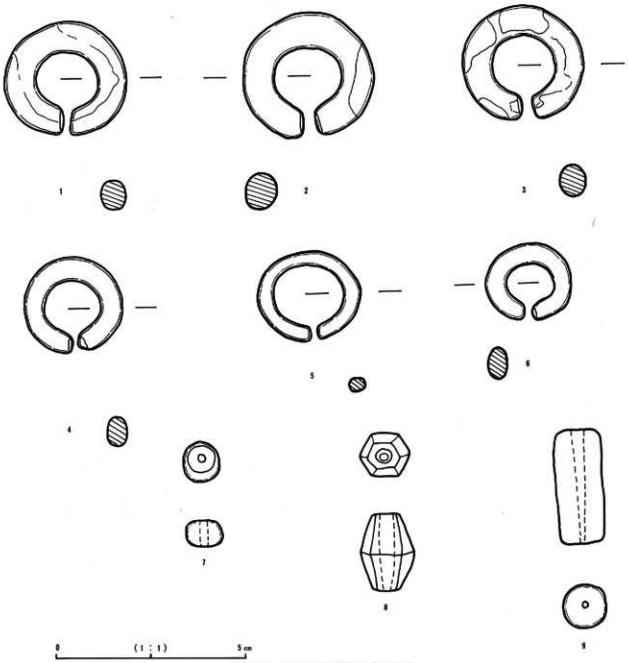
篦被まで7cm前後である。全体に厚さがあり0.4～0.5cmで新海神社の古墳群から出土した鏃とは異なり頸部断面も厚い。そのため腐蝕が多く付着して刃部が不明瞭であるが、片切刃であることは確実である。また、11は鏃身部左先端に研ぎ減りがある。6・7は頸部で棘篦被を有し、共に下端部を少し欠損している。

4・10は、鏃身部が長三角形で4.5cmを測る。4は、残存全長12.9cmで下端部を2cm程欠損している。棘篦被を有しているので、長頸棘篦被片刃刃造長三角形式である。

12は鏃身部の破片である。刃は切刃片刃箭であるが長頸か棘篦被かはわからない。

13は、短頸の篦被で鏃身部は平造りの長三角形である。完形品で全長10.8cmを測る。14は全長12cmで下端をやや欠損している。鏃身部は平造長三角形であるが、抉りの部分が重抉りのようで抉りの少ないきざみが入っている。

五庵古墳出土の鉄鏃は鏃身部が厚くしっかりした造りである。また、形式も5種類に分けられバラエティに富



第28図　五庵古墳出土装飾品実測図

んでいる。鉄鏃に混入して右下第一大臼歯（20代以下の若年者）が出土している。

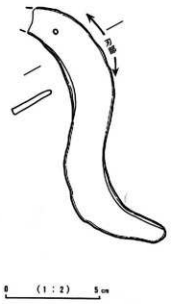
第26図は装飾品を示した。耳環は敷石面の直上から出土した。1・3はほぼ規格が同一であるが、2はやや大型である。外径3㎝～3.3㎝、内径1.5～1.7㎝、幅0.7～0.8㎝、厚さ0.7～0.8㎝で、形状はいずれも楕円形を呈すが断面の形状も楕円形に近い。2は表面に銀粉が、3は金がまだらに付着している。4～6は小形で外径2.1～2.6㎝、内径1.2～1.8㎝、幅0.4～0.5㎝、厚さは4・6が0.8㎝を測るが、5は0.3㎝でうすくなる。形状は4・6がほぼ円形を呈しているが、5は楕円形である。断面形状は4・6は長楕円形で5は方形を呈している。1～6まで全て銅芯が延棒状のものを使用しているので重い。

7は紺色のガラス小玉で幅0.9㎝、厚さ0.7㎝で両面共に平である。8は水晶の切子玉で長さ2㎝、最大幅1.3

cmで、穿孔は片面からである。9は碧玉製の管玉で長さ2.9cm、幅1.2cmを測り大形である。玉類は浮いた状態で2層中から出土した。

第29図は、玄室中央の左側壁際から鉄鏃、刀装具と並んだ状態で出土した薙鎌を図示した。上端を欠損するが全長13.7cm、厚さ0.3cmで、右側面が刃のように尖っている。0.2cmの孔が存在して目であることが分かるが上端が欠損しているのでロの状態が不明である。

本古墳は、大刀の4振出土にはじまって、鉄鏃・耳環がありこれらは形態がバラエティに富んでいる。さらに、装飾品があり、古墳出土例の全くみられない薙鎌までが出土している。骨も少量あったが小さいので部位の判定はできなかった。この内、編年の位置付けが可能なものに鉄鏃があるのでこれを頓りにおおよその時期をみると、長頸篦被片切刃造長三角形が6世紀後半に比定されている。続いて長頸鏑篦被片刃刃造柳葉形が6世紀末で、続く短頸篦被平造長三角形が7世紀初頭に比定されている。これから推定すると6世紀後半～7世紀まで本古墳は埋葬されていたと判断される。



第29図　五庵古墳出土薙鎌実測図

幸神1号古墳

1　立　地

幸神古墳群の所在する一帯は、雨川右岸の台地でかつては畑地であったが現在は宅地化が進んでいる。ここは15万㎡を有する臼田町最大の原遺跡で、縄文後期～中世までの連続した時代の複合遺跡となっている。その北方には大奈良部落があり部落全体が縄文中期～平安時代の大奈良遺跡として登録されている。また、西方は沖積平野の豊かな水田地帯が千曲川まで続き、古墳群の所在する原遺跡とは比高10mを測る。

幸神1号古墳は、北東側に田口城跡の所在する山があり、北方には3基の古墳がある離山とそのはるか遠方に浅間山を望み、南側には蓼科山、八ケ岳連峰の雄姿を望むことができる景観のすぐれた地に立地している。標高712.70mを測り、本古墳の右側には幸神2号古墳が、左側には4・5・6号古墳が隣接して点々と連なっている。また、前方の10m離れた地点にかつて3号古墳が所在していたというが現在は姿、形は全く消滅している。

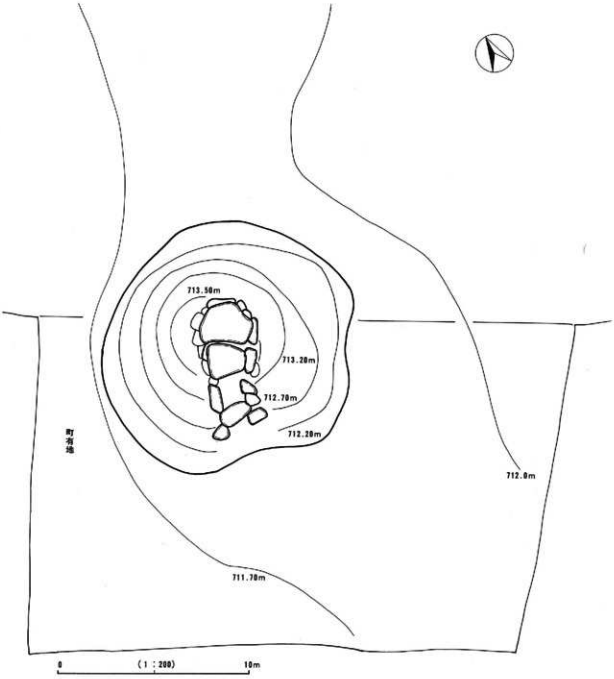
2　規模・構造

(1)　墳　丘

本古墳は、横幅2.8m、縦幅2.3m、厚さ90cmの天井石が露出し、その東側は玄室に入れるように穴があいている。戦後しばらくの時期まで乞食が玄室内で寝泊まりしていたというように、玄門側からの出入はできないが、天井石と天井石の間の空間を利用して出入していたようである。玄室内は本、缶、ビニールなどのゴミが投げ込まれていた。

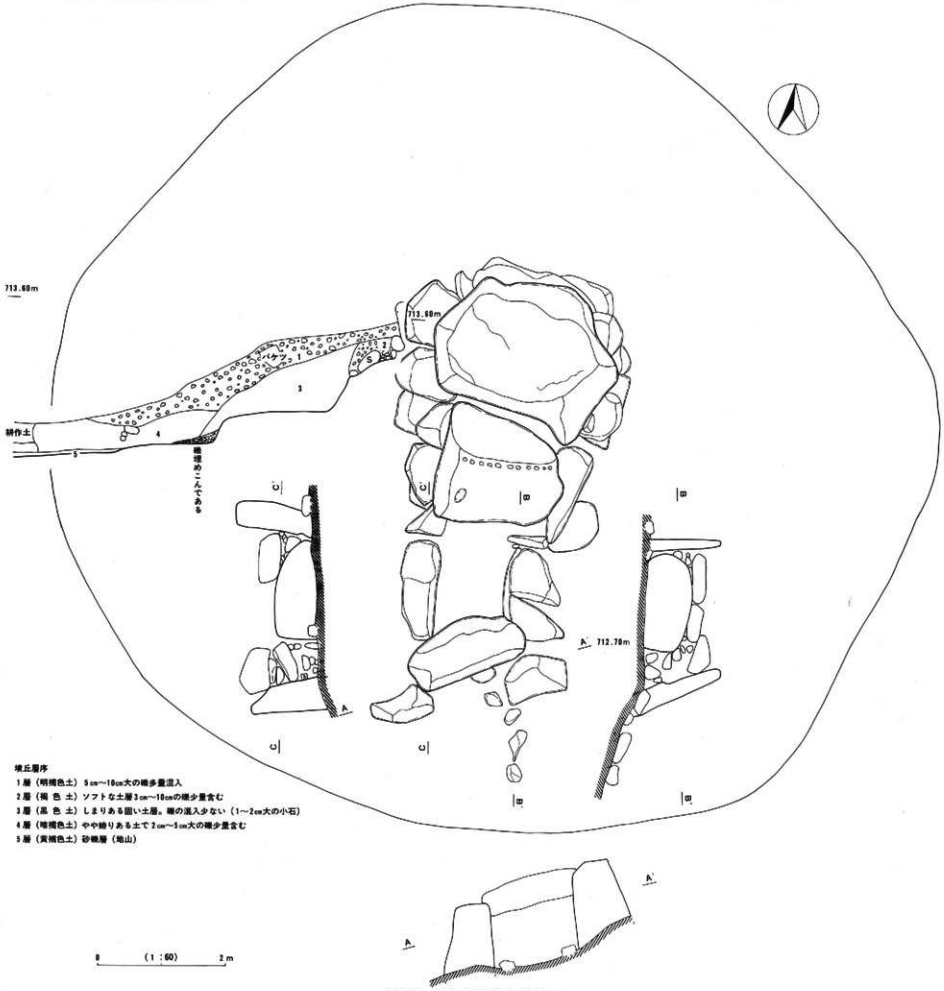
残っていた墳丘は、主軸の長さ13m、直交軸の長さ14mを測り、平坦面とのレベル差で高さをみると、北側・東側が約1.5m、西側が1.9m、前庭部は羨門に横架した石の露出面まで埋っており、その残存は1.5mの高さにあった。墳丘の直径は20mあったであろうとおもわれる。

墳丘の西側に1mのトレンチを入れて盛土の状態をみると、上段は耕作時に拾い出した礫を積みあげているた



第28図　幸神１号古墳全景実測図

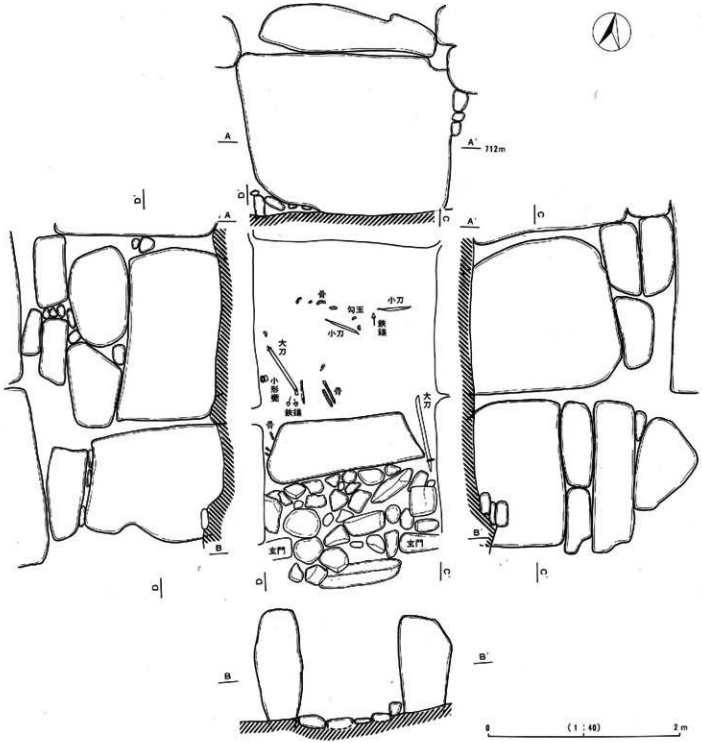
め、土と礫の混合で中には缶やバケツが入っていた。盛土は上段・中段・下段と分かれ、壁石の際から盛土されていた。裏込めの状態を観察することは、危険が伴う完全な掘り下げは止めるべきであるとのことでその寸前まで掘り下げた。裏込めは10～30cm大の礫が高さ20cm、幅70cmの範囲に積まれている。そこからさらに50cmの段を有した掘り込があり、土層は締りのある固い黒色土で礫の混入が少ない。この層が長さ1.5m続くと40cmの段を有して暗褐色土の層となる。この層は２cm～５cm大の小石を少量含んでいる。このように３段の階段状に墳丘の盛土が築かれており墳丘の基盤をなす内側は黒色土で形成されている。人頭大の石を積み上げて墳丘を築く積石塚でないことが理解できる。また、第４層中には列になっている礫がみられた。壁石から４ｍの地点である。外周列石としては距離的に短いので他の役割があるとおもわれる。



第31図　幸神1号古墳石室全体図

(2) 内部構造

幸神1号古墳石室の平面プランは、奥壁から開口部まで全長7.8mを測り、奥壁幅2.8m、中央で3.2m、羨門部幅3.2mを測る。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室である。玄門に近い天井石の右側が側壁からはずれて玄室内にずり落ちていたがその他は旧状を留めて良好な状態にあった。主軸方位は、天井石をのせた平面図ではほぼNを指しているとおもわれるが、玄室の形から合わせると、N－13′－Wを指している。断面形は箱状を呈す。



第32図　幸神1号古墳玄室実測図

玄室内の規模を第32図の玄室平面図でみると、奥壁幅２m、右側壁幅３m、左側壁幅3.2mを測り、右側壁が羨門までやや短いが長方形の形をとる。天井石が残っているので玄室の高さは2.1mであることが分かった。

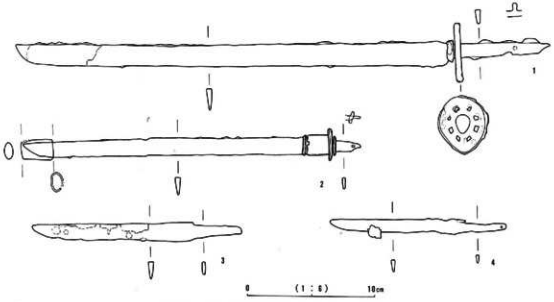
羨道幅は、2.5m、長さ2.6mであるが、両側壁の内側である道幅は１mである。敷石のみられる玄室内と羨道との比高差は20cmであるが、奥壁側の棺床面とは50cmの比高がある。

奥壁には先ず板状の横幅2.3m、縦幅1.7mの溶結凝灰岩を立て、その上に横幅1.9m、縦幅0.5mの同石質の石をのせているが、寸足らずのため左横が20cm程空いている。多分ここには空間を埋める石があったとおもわれるが抜かれている。３mを測る右側壁、左側壁は共に、幅1.2～1.8mの石を２枚ずつ並べている。高さは１m～1.6mを測る。その上には幅0.7m～1.6m、高さ34～65cmの石を２～３段に横積みしている。ところどころに空間があるがこれも抜かれてしまったとおもわれる。

玄門は、幅48～55cm、高さ１m～1.2mの細長い石を立てて門にしている。門は玄室から30～45cm程内側に入り込んでいる。玄室内の玄門付近には横幅1.6m、高さ50cm、厚さ25cmの巨石があり、両面共に平に整えられ加工されている。羨門の上に横架した楣石である可能性が高いが、転げ落ちたにしては座りが良く据えつけられている。そして、敷石もこの楣石の底面に合せて敷かれているので、何度目かの埋葬の棺床面であると考えられ、玄門に架けた楣石はこの後に転げ落ちたとおもわれる。玄門と玄門の間には框石があり玄室と羨道を仕切っている。

羨門は、右の門がやや北側に倒れているが、上面の幅１m、高さ1.3m、厚さ30cm、左の門は、上面の幅70cm高さ1.15m、厚さ48cmで、幅の広い面を正面にして立てられている。門の内側に長さ1.9m、幅90cm、厚さ50cmの石が横架している。地面から約１mの高さなので腰をかがめると門をくぐることができる。ここから框石のある玄門との間は2.7mで黄泉国(よもつくに)への道筋という考え方もされている。框石は長さ80cm、高さ20cm、厚さ10cmでやや貧弱である。この下にもう一段最初の框石があるとは玄門の埋め込みの状態から考えられない。

玄室内のセクションは３層に区分できる。１層は40～50cmにわたって大小の礫とゴミが堆積していた。２層は粒子の細い土層中に５～30cm大の礫が多量含まれており、盗掘によって撹乱された堆積の様相を示していた。３層は褐色土で粘性が強くローム粒子を多量混入していた。撹乱はこの土層直上で終わっているため玄室内の土を取り除いて清掃を行った。



第33図　幸神１号古墳出土大刀・小刀実測図

3　出土遺跡

遺跡は、撹乱層から第33図４の小刀が浮いた状態で出土した。その他は第32図に出土地点を図示した。先ず、１の大刀は玄室中央から玄門寄りの右側壁際から、２は玄室中央の左側壁際から鉄鏃と共に、３は奥壁に近い中央から勾玉、鉄鏃と共に出土した。骨は玄室の中心からやや左寄りに多く、とくに転倒している榻石の下に多くある。

第33図１の大刀は、全長84cm、刃部の長さは68cm、最大幅3.5cm、茎部の長さ16cm、棟厚８cmを測る。鞘が付いたままの状態にあり、縦９cm、横7.5cmで、中心部に長方形の透し窓が８個ある。茎部の先端５cm内側の目釘孔には釘が付いたままの状態にある。刀身は平造りである。また、切先部には鞘の付着が残るが、脹切先である。２は、全長53.5cm、刃部長44cm、刃部最大幅2.8cm、茎部長９cm、棟厚0.8cmを測る中型の刀である。

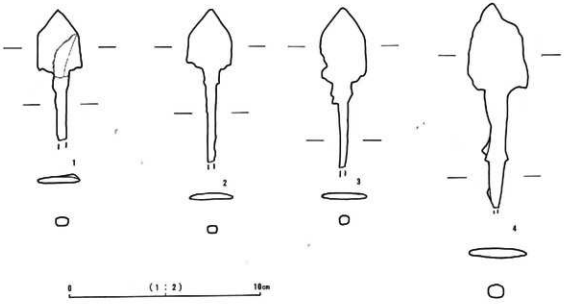
切先は直線的で鐔切先に近い。この部分に鞘尻金具がはずれ気味の状態で出土したが、当初はきちんと鞘がかけられていたとおもわれる。鐔・栫間金具・目釘も付着したままである。

３は全長33cm、４は27.5cmでやや小ぶりとなる。４は目釘孔を有すが３には腐蝕で埋ってしまったのか見当たらない。４は鞘金具の付着が多いが関はない。３は背関を有す。副葬品として大・中・小の一セットとなり得るか興味もたれるところである。

第34図は鉄鏃で４点の出土があった。１～３は鏃身部が五角形で短頸である。関の部分が２段になっていて重抉的状態にあるが抉が少ない。さらに、刃が両刃で平刃に近く篦被である。あまり例のない形態であるため形式名をいれると、短頸篦被重抉平造五角となる。この形態は六世紀末～七世紀初頭に多い。４は、鏃身部が長三角である。短頸篦被平造長三角に分類され、やはり１～３と同じ時期に入る。

第35図は勾玉を図示した。瑪瑙製であるがあまり質的によくない。長さ3.8と3.9cmで共に変わらないが幅は１が1.8～2.2cm、２が1.5～1.8cmでやや小ぶりである。穿孔は片面から行われている。「コ」の字状の形状で古墳時代後期の特徴を呈している。

第36～38図は土器を示した。６が玄室から出土しているのみで、その他土師器・須恵器は羨道からである。37図の須恵器拓影に示したものは墳丘の清掃時に出土したものである。



第34図　幸神１号古墳出土鉄鏃実測図

第36図１～３は須恵器蓋である。１・２はボタン状つまみで３は皿状のつまみを有している。また、２はカエリがあり、肩がややくぼんでいる。

４・５は土師器坏で４は器厚が薄く底面から直線的に立ち上っている。５は内湾して立ち上っているため口径が短く感じられるが反面器高は0.6cmほど高い。４は底部糸切りロクロ調製で、５は糸切りではない。

６は小形の甕で、器高5.8cm、口径7.8cm、底径4.2cmを測る。頸部「く」の字状で短い。玄室の左側壁際に正位に置かれてあり中には骨粉が入っていた。４～６まで内面黒色である。

７・８は高台付坏で口縁部直立気味に開いて立ち上がる。底径が広く、器高は短い。７は土師器であるが、８は生やけの須恵器である。

９は、低い高台が付く須恵器坏で、口辺部に稜を有して内傾し口縁先端0.5cmの幅をもって直立している。類例の少ない器形である。

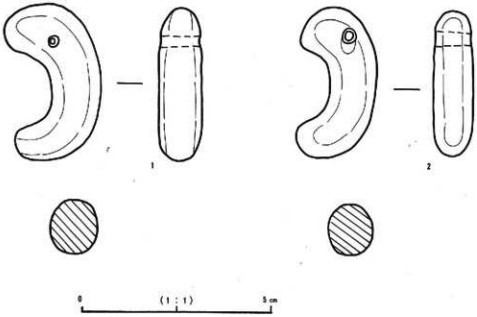
10～11は須恵器坏で、10は底径広く丸味を帯びて器高短い。11は底部篦削りの平底で口縁に向けて直立気味に開く器形である。

12は、篦削りが底部～外面、内面にみられる器厚の厚い甕底部片である。13は高坏片で坏が湾曲気味に立ち上っている。内面黒色である。

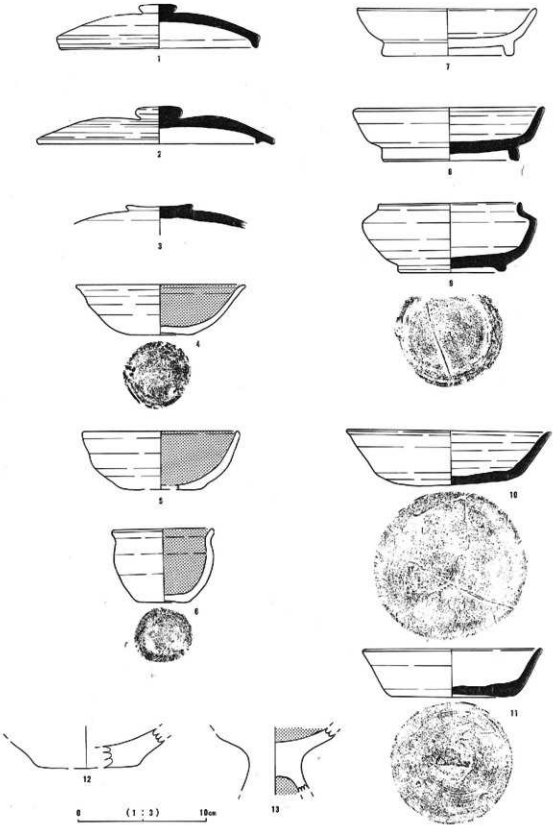
これらの土器の編年をみると、八世紀前半期の中頃に比定される。

第37図は須恵器甕の口縁部片で波状文の文様を有するものを図示した。内側は全てナデ調整である。５・６は甕の胴部である。表面は平行叩き目文で、内面は同心円文がついている。

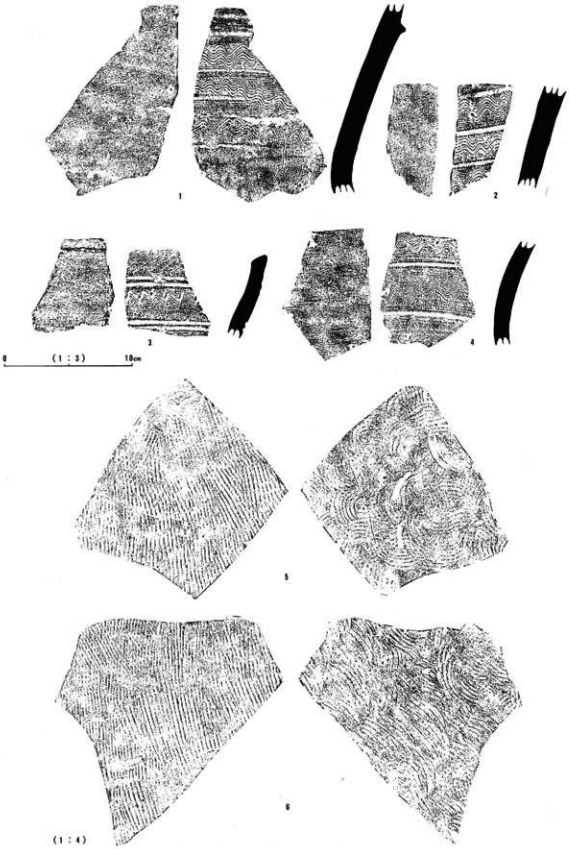
骨は、玄門際のかなり高い位置で天井部から１m下った地点に頭蓋骨があった。かなり攪乱されている土層の堆積中からである。また、玄門に横架してあった榁石が横転した石の際から、大腿骨骨幹上部、下部、脛骨、右



第35図　幸神１号古墳出土勾玉実測図



第36図　幸神１号古墳出土土器実測図



第37図　幸神１号古墳出土須恵器拓影図

側頭骨などが残っていた。鑑定によると成人男子の人骨であるという。

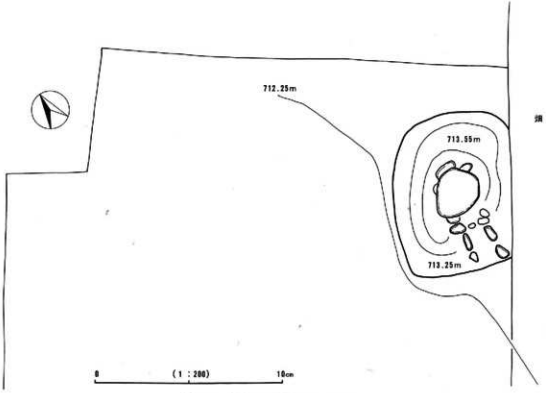
前庭部は耕作により削平されていて不明である。また、トレンチで試掘したが周溝は確認できなかった。

本古墳は、これらの土器、鉄鏃などから埋葬された年代を判断すると、鉄鏃は六世紀末～七世紀初頭に比定されている短頸鏡被平造長三角や平造五角形式である。しかし、羨門直下～羨道にかけて出土した土器類は八世紀前半期に比定されるものである。このことから考えられることは六世紀末に構築され、長い期間埋葬されているということを物語っている。遺物の出土した玄室の棺床面は敷石がなかった。その下部も試掘をしたが地山の砂礫層であってその下部には棺床面はないと判断された。また、本古墳は巨石を用いて石室が築かれている。玄室は棺床面から天井石まで高さ2.1mを測るので、人間が楽々と出入りできる大きな古墳である。羨門～羨道～玄門～玄室と全ての構造が整っている。厚さ1mの天井石が露出しているのでその全景は奈良明日香の石舞台古墳の小形的様相を呈しているため、「ミニ石舞台古墳」という声が見学者からきかれた。幸神1号古墳は今後の学習に役だてるために清掃を完全に行っていつでも見学できるように備えた。その雄姿には心打たれるものがある。

幸神2号古墳

1　立　地

本古墳は、幸神1号古墳から30m離れた東方の畑の中に隣接している。標高は713.25mを測り1号古墳とは55cmの比高差があるが平坦地なので高低差はほとんど感じられない。古墳の北西側に接近して工場が建設され、東南側には住宅が建ち並び、さらに、原から田口へ向かう道路と清川から三分へ抜ける道路の交叉点が60mの矩離にある。また、外九間2号古墳は50m離れた南東側に所在している。このような環境により、かって北に浅間山南に八ケ岳連峰を望んだ美しい景観は失われつつある。

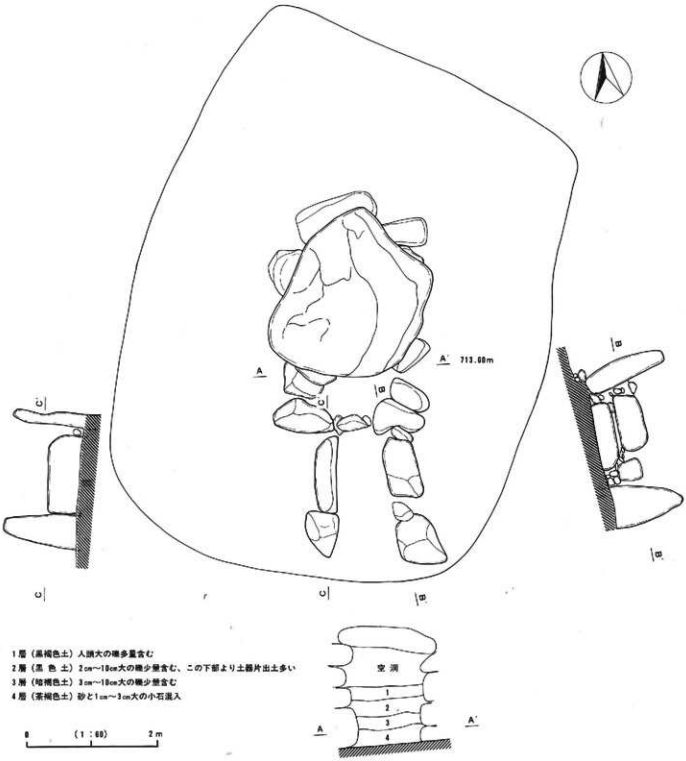


第38図　幸神2号古墳全景実測図

2　規模・構造

(1) 墳　　丘

早くから天井石、右側の羨門が露出し、雑草のツルに埋っていた古墳の墳丘は耕作に使われたビニールシート

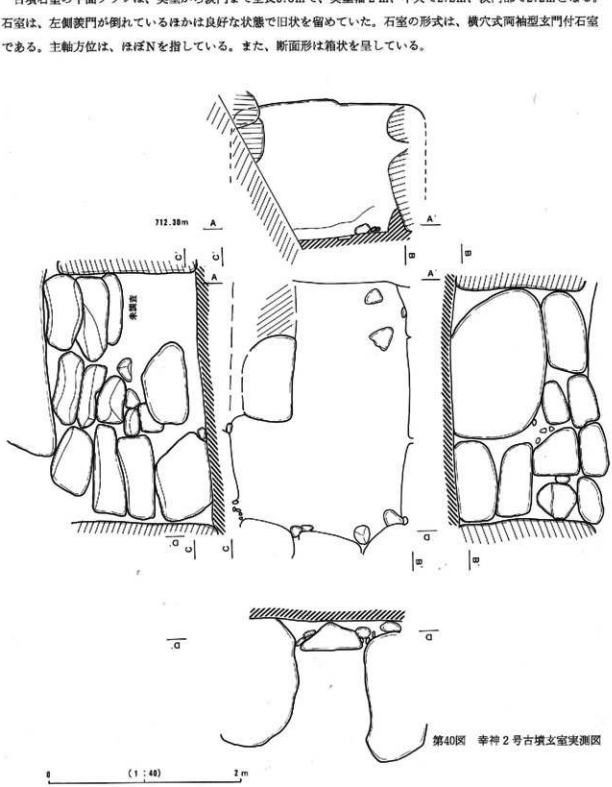


第39図　幸神２号古墳石室全体図

が数段に重ねられており、これを一日がかりで取り除くとやせた墳丘があらわれた。主軸の長さは8.8m、直交軸の長さは6.7mを測る。墳丘盛土の高さは北側1.15m、西側１m、東側0.85mで、一面褐色土層に覆われていた。ビニールシートにより耕作時に拾い出した石は墳丘にはなく、かわって玄室内に投げ込まれていた。

(2) 内部構造

古墳石室の平面プランは、奥壁から羨門まで全長5.8mで、奥壁幅２m、中央で2.2m、羨門部で2.2mとなる。石室は、左側羨門が倒れているほかは良好な状態で旧状を留めていた。石室の形式は、横穴式両袖型玄門付石室である。主軸方位は、ほぼNを指している。また、断面形は箱状を呈している。



第40図　幸神２号古墳玄室実測図

玄室は東西側1.7m、南北側2.5mで長方形を呈する。玄室中央の左側壁の石積みがはずれて玄室の中央にとび出しているので危険であり、右側壁側と奥壁の一部、玄門にかけてのみの清掃調査となった。

奥壁は、板状の溶結凝灰岩を縦積みにしている。1枚石のみであるが天井石をかけるとすき間ができてしまうので外側から幅1.2mの石を横積みにして空間を埋めたとおもわれるが、盗掘の時にはずしたらしく墳丘にずり落ちていた。棺床面から天井石までの高さは1.6mを測る。

右側壁は、奥壁側の棺床直上の石が幅1.5m、高さ1mの一枚石を縦積みにしてあるが、その他左右壁共に横幅30～90cm、厚さ20～60cmの溶結凝灰岩を横積みにしている。それにしても、左側壁棺床直上の最下段部の土台石が玄室中程にとび出していることには驚かされる。多分、最下段部の石組みがしっかりなされていなかったので上からの重圧によってとび出したと考えられる。左側壁の奥壁付近は石組みがガタガタであった。補強をしながら玄室内の清掃にあたったが危険なため一部分実測不可能であった。

玄門は、平面の最先端上面は左85cm、右80cmで安定しているが楣石は取り除かれている。高さ1.35m、厚さは左門20cm、右門40cmを測る。柱状の溶結凝灰岩の自然石を使って加工はほとんどされていない。

羨道は、玄門との間に置かれた框石によって仕切られている。幅45cmの三角形をした石を逆三角形に立てて埋め込んでいる。道幅は玄門入口が75cmで羨門で開き1mを測る。羨道の側壁は、左が幅1.2m、高さ50cmの石が一個横積みにされている。右側は、0.9～1.0mの石を2段重ねにし、すき間には小石を詰め込んでいる。羨門は、高さ1.1m、横幅0.8m、厚さ0.6mを測る柱状の溶結凝灰石を使用し、幅の広い面を正面に向けている。これは幸神1号古墳でも同様の立て方をしていた。

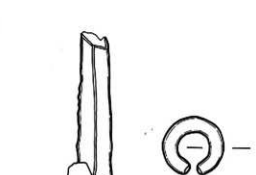
玄室内のセクションは玄門入口から少し入った部分で東西側の横で実測した。天井石から60cm程空洞があるため、4層に区分される。1層は人頭大の礫やゴミで埋まっていた。2層は黒色土で2cm～10cm大の礫を少量含む。この層の下部から第42～43図に示した須恵器大甕の破片が多量に出土した。攪乱層であると考えられる。3層は暗褐色土でやはりこの層中からも須恵器の出土が多かった。4層は棺床面の下部まで川の氾濫原とおもわれるような1～3cm大の小石と砂の混入した層であった。敷石は2～3残っているのみでほとんど1層～3層中にバラバラになって混じっていた。盗掘による攪乱が著しい。

3 出土遺物

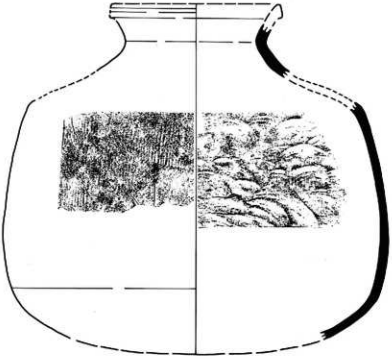
第41図は幸神2号古墳出土の金属器を示した。1は鉄鐸で全長9cmを測る。直径1～1.5cmで中に横0.9cm、縦0.6cmの鉄の棒状のものが入っている。この鉄鐸を軒などに下げておくと、風が吹くたびにゆれて棒状の芯が両脇の鉄の円縁にあたり音を出すという。平安時代の祭祀用具である。田口宮代の宮東遺跡の3号住居址の床面から出土しており、臼田町では2例目であるが、出土例の少ない遺物で注目される。

2は小形の耳環で、外径1.5cm、内径0.8cm、幅0.4cm、厚さ0.5cmを測る。円形であるが断面は長楕円形である。内側に金が1mmの点状に2箇所付着して残っている。

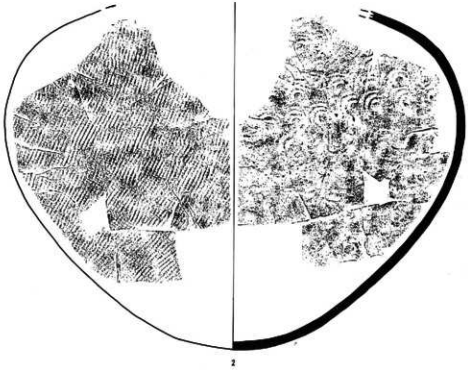
第42～43図は須恵器甕と平瓮である。1は、胴部と頸部の破片である。底部と口縁部を欠失するが胴中央～下のカ



第41図　幸神2号古墳出土鉄鐸・耳環実測図



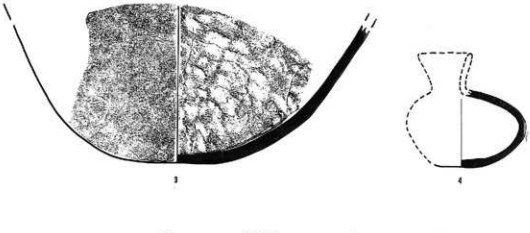
1



2

0 (1 : 4) 20cm

第42図　幸神２号古墳出土須恵器実測図No. 1



第43図　幸神２号古墳出土須恵器実測図No.２

ーブから横瓮であるとおもわれる。器面は平行叩目文で内型は同心円文を重ねているので魚のうろこのように見える。２は、胴中心の最大径48.6cmを測る甕であるとおもわれるが口縁部を欠失するので正確なことは不明である。丸底を呈している。平行叩目文と同心円文の状態を拓影に示した。３は胴下～底部にかけての破片であるが、底部は10cm、胴下最大径36cmを測る。器面は叩目文がなく無文である。内型は同心円文を指でなぞって消している。乱雑な消し方であるため凹凸がはげしい。古い要素が残っている。４は、平瓮であるが口頸部を欠失するので器形がわからない。長頸壺になる可能性もある。底径６cmの平底で篦削り痕が顕著である。

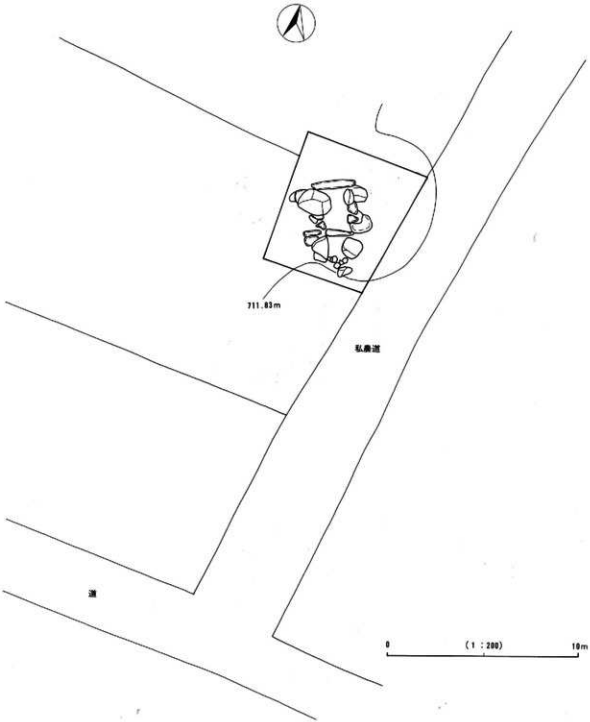
骨は、上腕骨、大腿骨などが出土している。骨の様相から成人女性であると鑑定されている。

本古墳は小形ではあるが構造は全く幸神１号古墳と変りない。同一人物の設計によると考えられる。これは、幸神１号古墳と血縁の濃い同族の墳墓である可能性が高い。構築年代は須恵器甕からみると七世紀後半に位置付けられる。また、鉄鏃の出土により平安時代まで追葬されていたと考えられる。(105ページの歯牙から伺える)しかし、盗掘もあり出土遺物が少ないので不明な点が多い。

幸神４号古墳

１　立　地

本古墳は、一列に並んでいる幸神古墳群の最西端に位置している。外九間１号古墳、中原２号古墳もこの西端に１直線に南側へ並んでいる。これより西側へは古墳を築くことは許されないというような状況があったかとおもわれる。また、幸神１号古墳、６号古墳、５号古墳、本４号古墳までは各々10mの間隔をもって並んでいる。標高は711.83mを測り、幸神１号古墳からは87cmの比高差がある。なだらかに東方から西方へかけて傾斜している地形である。往古には、本４号古墳の西方側に新海神社道という小さな道があり古墳へ通じていたという。本古墳は新海神社の所有である。同じように幸神２号古墳の東方側にも神社道があったと伝えられている。幸神１号～４号まで神社所有の古墳であることから、古墳と神社とはなんらかの関係があったと考えられる。

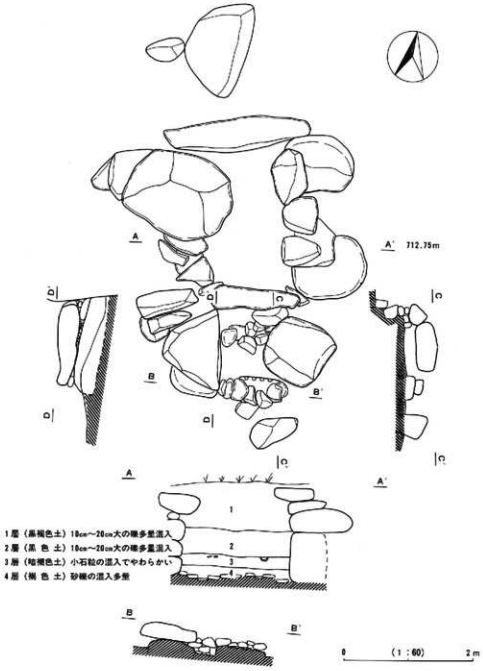


第44図　幸神４号古墳全景実測図

2　規模・構造

(1) 墳　　丘

本４号古墳はところどころに大きな溶結凝灰岩が顔を出していたので古墳である可能性はあったが、墳丘全体が10～30㎝大の礫で埋まり、その上面はつる草やバラなどの雑草におおわれており、ヤックラという感じが強かった。墳丘の遺残状態は、主軸の長さ７ｍ、直交軸の長さ６ｍを測り、墳丘の高さは地表面から約80㎝程盛り上がっていた。確認調査はこの墳丘中心部を覆っている礫を取り除くことから開始したのである。



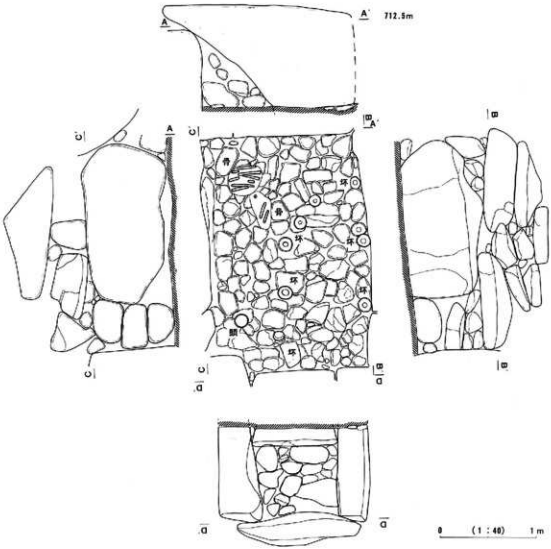
第45図　幸神４号古墳石室全体図

(2) 内部構造

墳丘の石を取り除くと地表から50cmの地点に、玄門にかかった榴石が先ず顔を出した。続いて側壁、奥壁の上面が姿をあらわしたので、大よその玄室の規模を把握するに至った。

古墳石室の平面プランは、奥壁から開口部まで全長4.6mを測る。横幅は、奥壁で2.3m、中央で2.6m、開口部で2.2mである。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室であるが、幸神１号古墳、２号古墳とは玄室、羨道の側壁、開口部、羨門のみられない点などかなり異なってる。主軸方位は、N－15'－Eを指している。

奥壁は、長さ２m、高さ１mの溶結凝灰岩の１枚石を使っている。しかし、左側の榴床面部分が幅、高さ70cm

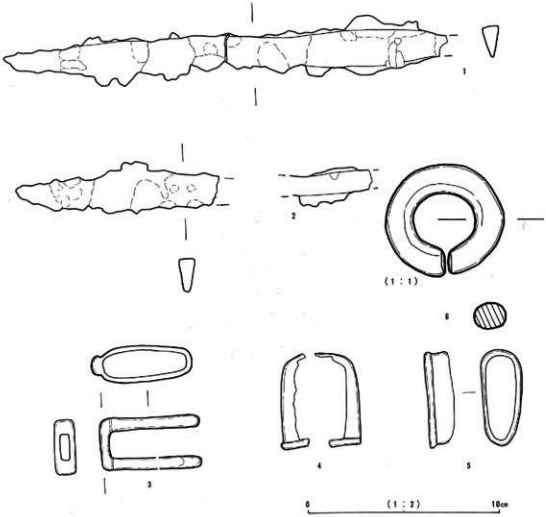


第44図　幸神４号古墳玄室実測図

の三角形状に欠している。この状態は自然石のままであるためこの空白部分には、10～40cm大の礫を埋め込んでいる。左右側壁は、横幅165cm、高さ80cmの１枚石を棺床面に据え、玄門に近い側の60cmの範囲には、幅20～40cm、厚さ 10～30cmの礫を横積みにしている。さらに、これらの礫の上に幅0.3～1.1m、高さ20～40cm大の礫を横に２～３段重ねている。割って平坦にし加工を加えているものが目立つ。

玄門は、右門が幅33cm、高さ95cm、左門が幅35～45cm、高さ1.05mの柱状の溶結凝灰岩が立っている。その上に長さ1.3m、幅15～30cmの割り石が横に架けられていた。玄門と玄門の間には上面15cmを平に整えた長さ90cm、高さ15cmの角を四角形に加工した框石が据えられていた。第46図の断面図には閉塞状態を図示してあるが、40～50cmの大きな礫と10～25cm大の礫を積み重ねて閉塞している。

玄室内の規模は、奥壁側1.6m、右側壁2.45m、左側壁2.3mで、中央の幅は1.55mを測り、長方形を呈する。敷石は、溶結凝灰岩、玄武岩、礫岩がきれいに敷かれていた。下段から５cm上がった状態に敷かれたものは棺をしっかり支えるために敷かれているという感じがするが、敷石をはがして調査することは破壊になるため、直上でおしとどまざるをえない。敷石面まで盗掘はされていなかった。玄室円のセクションは４層に区分された。１、２層は耕作によって投げ込まれた礫と土で埋り、３層は暗褐色土で礫もなく小石粒の混入と骨の出土がみられる。



第47図　幸神４号古墳出土小刀・刀装具・耳環実測図

４層は敷石直上の土層で砂礫が多かった。

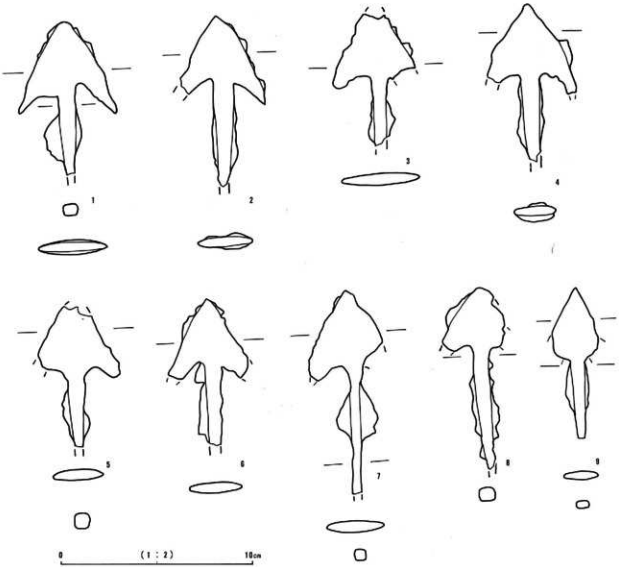
羨道は、框石から長さ1.6m、幅は2.7mを測る。幅が広いのは側壁の石が方形・三角形の自然石を加工することなく横積みにしているからである。道幅は80cmを測る。羨門がみられない。しかし、羨道を仕切る70cm×40cmの矢の籏がついた長方形の石があり、その上に20cm大の礫が並べて積み重ねられている。ここで羨道が終っていることがわかる。

天井石は１枚左側壁に架った状態で西方の墳丘へ傾いていた。横幅1.9m、縦1.3mを測り、厚さは中央で50cm、両先端で20cmを測る長三角形である。棺床面から天井石まで1.5m、玄門の框石から棚石までの高さは70cmである。本古墳は、地山層を20～30cm掘り込んで棺床面としているためかなり墳丘が低く感じられる。幸神２号古墳も同様であったが天井石の大きさも影響している。本古墳は天井石が小さいため古墳がより小さく感じられる。

3　出土遺物

遺物の出土状態は４層上面から土師器坏が、棺床敷石直上に小刀・刀装具・耳環が出土した。鉄鏃は框石と左玄門の間から主に出土している。

第47図１・２は小刀であるが腐蝕がすすんでいる。１は、責金具の一部付着がみられる。３～５は銅製の柄間



第48図　幸神４号古墳出土鉄鏃実測図

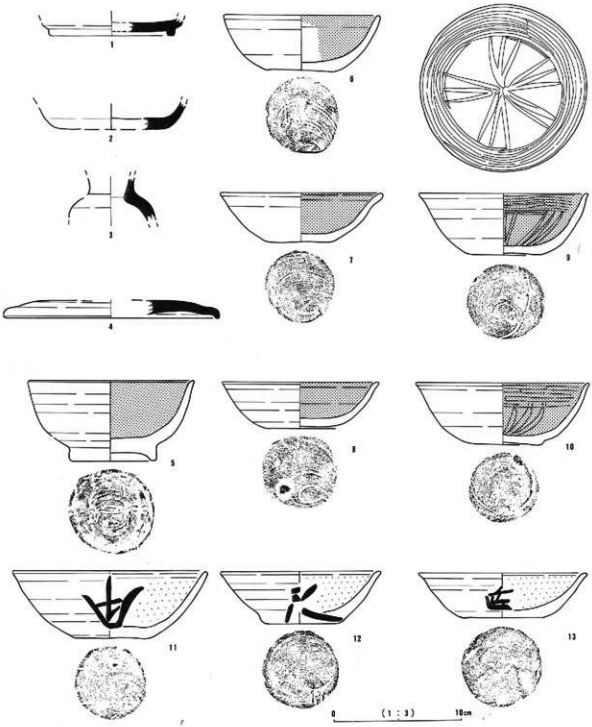
金具、縁金具などが出土した。６の耳環は、断面形が横長の楕円形で正裏面が偏平である。綱の延棒が芯に使われている。

第48図には鉄鏃を図示した。鉄製品はいずれも腐蝕が著しく鉄鏃は特に箙被の部分とおもわれるところが腐蝕しているので明確に箙被の存在をつかむことができないが、おそらく箙被はないとおもわれる。短頸で鏃身部が両丸造長三角を呈し、両端の抉が腸抉であることから短頸腸抉両丸造長三角の形態に分けられる。この鏃は７世紀から８世紀以降までみられる。

第49図１～４は須恵器の破片である。１・２は玄室３層中から出土した底部片である。３は墳丘から出土した小形の壺形口頸部片で耳状の付着がみえる。４は蓋で表道から出土した。カエリがなく器高が浅い。

５は唯一の埦である。内面黒色の糸切底で高台は低い、内湾して立ち上る。６～８は内面黒色で底部糸切りの坏である。６が内湾して立ち上るが７は口縁部で大きく開き、８は直線的に立ち上り端部でやや開く。

９、10は、内面黒色の糸切り底であるが、内面には暗文がある。９は内面中央を中心にして５単位に３条の線が口縁に向って描かれている。口縁部には1.8～２cmの幅に箙による乱雑な円が巡っている。10はほぼ同様の暗文であるが４単位であることと、暗文に艶がない。両者共に底部から口縁にかけやや湾曲して立ち上っている。



第49図　幸神4号古墳出土土器実測図

11～13は墨書土器である。やはり内面黒色であり、11・12は糸切り底であるが13のみヘラ切りである。3者共に底部から直立気味に立ち上っている。墨書は、11が逆さに書かれているが𠆢である。12は太字で書かれているが運悪くそこに割れ傷があるので判読できないが図に示した字が書かれている。13もかなりきちんとした文字であるが古代文字なので判読できない。いずれ専門家にご指導願いたいと考えている。

これらの土器は、第46図に示したが玄室4層上面から出土した。玄門付近から右側壁際と真中にかけて9個体分散していた。

骨は多量に出土した。第46図に位置を示したが、左の玄門から30cmの地点に頭があった。これは南側を向いている。その直線上の奥壁から30cmの地点に成人男性の脛骨、大腿骨、尺骨、大腿骨骨頭、左上顎骨、上腕骨骨頭初老男性の大腿骨などが出土している。歯は4本見つかり、50才代、30才以下の青年であると鑑定されている。

本古墳は多量の土器から、最終的な被葬者は九世紀であると判断される。また、短頸鍔付平造長三角の鉄鏃は7世紀から発現しその後も継続する。以上から古墳築造の時期は7世紀代であると予想される。

幸神5号古墳

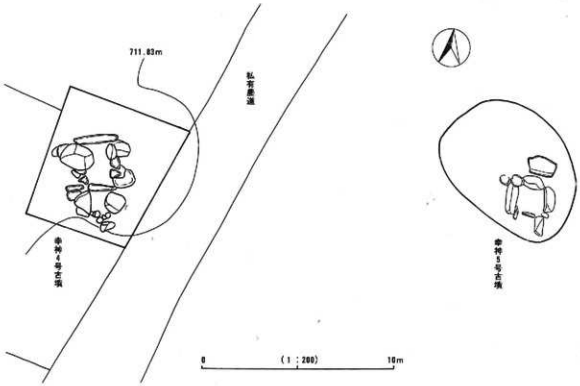
1　立　地

本古墳は、東西に一列に並ぶ幸神古墳群の西端に位置している4号古墳の東隣りに所在し、本古墳の東側には6号古墳が隣接している。立地は平坦な畑の中に構築された平地の古墳である。一列に6基並んだ古墳群は平地にあっては見事な景観であったと推察される。

2　規模・構造

(1) 墳　丘

本5号古墳は、拳大の礫で一面埋っており古墳の石室に使われている溶結凝灰岩が全く見えなかった。そのためヤックラとしての可能性の方が強く、古墳であることは予想できなかった。墳丘も低くて小さいためその感じが一層強かった。いつも墳丘にはビニール袋やブリキ缶、さらに雑草のつるで覆われていて小さな円墳はあわれな姿を呈していた。



第50図　幸神5号古墳全景実測図

墳丘の遺残状態は、主軸の長さ5.8m、直交軸の長さ7.6mを測るが、墳丘は羨道から右側壁際が削り取られていたため円墳というよりは、隅丸長方形に近い形状であった。墳丘の高さは60～70cmで耕作時に拾い出された礫で上面は覆われていた。

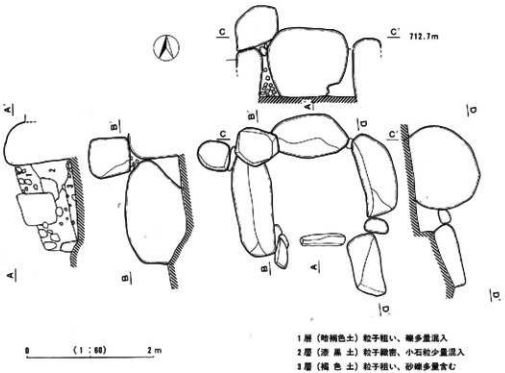
(2) 内部構造

ヤックラだと思っていた墳丘の中心から礫を取り除いたが一向に古墳らしき様相がみられない。あきらめかけていると東西側から天井石とおもわれる溶結凝灰岩が姿をあらわした。これを目標にしてその周辺に焦点をしぼって精査していくと玄室の側壁があらわれてだんだん石室らしくなった。しかし、天井石は墳丘にはがされて玄室中央に横50cm、縦60cmの四角形に近い溶結凝灰岩が入り込んでいた。框石はあるが羨道は壊されている。

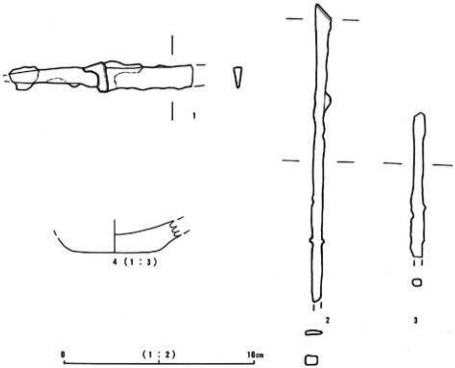
古墳石室の平面プランは、奥壁から羨道まで2.8mを測る。多分3.5m位はあったと推定される。奥壁幅1.8m、中央で2.5mを測り、羨道で1.7mを測ると推定される。石室形式は、玄門がみられないので横穴式両袖型石室となる。主軸方位はほぼNを指している。

奥壁は、横1.3m、縦1.1mの角の丸い自然石を1枚縦に立てている。左右共に横幅が足りないので、30～40cm幅を礫と土で埋めている。左右の側壁は共に横1.3～1.6m、縦1mの自然石を立てている。框石は幅73cm、厚さ25cmの石を中央に置いて玄室との仕切りとしている。玄室は、1.2m×1.45mでほぼ正方形の形をとっている。

框石は玄室の側壁端部との間に置かれ玄門と玄門の間ではない。玄門がないのでこのような形をとっているとおもわれる。羨道は幅1.7m、道そのものの幅は80cm前後を測ると推定される。羨道側壁は右側に横1m、幅45cm、高さ20～35cmの溶結凝灰岩が並べられているのみで、左側壁は姿がみえない。すっかり破壊されている。



第51図　幸神5号古墳玄室全体図



第52図　幸神５号古墳出土刀子・鉄鏃・土器実測図

玄室内のセクションは３層に区分されるが、盗掘ならびに破壊による埋土であった。とくに２層は漆黒色土で腐植が強い。棺床面には敷石は一片も残っていなかった。全てはがされて破壊してしまったのかは不明である。また、玄室内の高さは1.4m前後であると推測される。四角形の玄室を量し、玄門のない小形古墳であることが本古墳の特徴である。

3　出土遺物

棺床面まで盗掘、撹乱されていたため框石脇の右側壁際に第52図に示した刀子・鉄鏃が出土した。１の刀子は腐蝕が著しく鞘の一部分がしっかり付着している。２・３は鉄鏃である。２は無関の端刃片刃箭で棘篦被を有す。長頸棘篦被関無端刃片刃箭に分類される。７世紀～８世紀に多い。

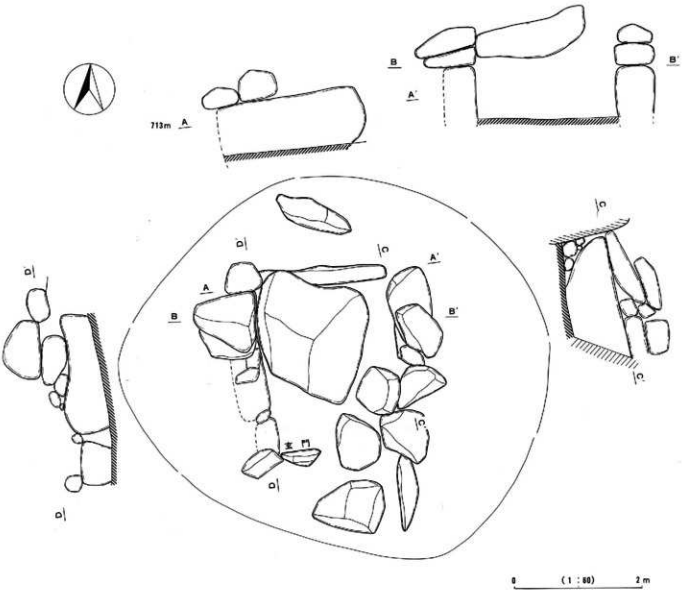
４は、土師器甕底部片で墳丘から出土した。

以上の遺物から鉄鏃に埋葬時期の手がかりを求めるならば、構築は７世紀初頭で被葬者は８世紀まで追葬されていたと想定されよう。

幸神６号古墳

1　立　地

本古墳は、幸神１号古墳から10m離れた南西寄りに位置し、さらに西寄り10mの地点に幸神５号古墳が所在している。平地に東西に向って５基の古墳が一列に並んでいる形をとっている。その真中に位置しているのが本古墳である。

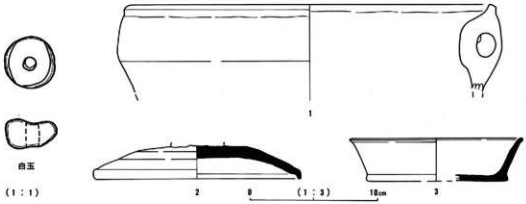


第53図　幸神6号古墳石室実測図

2　規模・構造

(1) 墳　丘

墳丘は畑から拾い集めた石の他に付近から運んだ礫で覆われ、北側の奥壁付近から姿を見せていた横積みの溶結凝灰岩と南側の羨門付近に顔を出していた同質の礫が古墳らしい様相を呈していた。1.5mの高さに礫を積み上げたヤックラは完全に古墳を覆い、それは積石塚的な感じさえしたが、確認作業の時点で墳丘を覆っていた礫を剝いでいくに従って羨道を壊した大きな礫が無理に押し込まれていて、乱雑でかつ無惨な様相を呈している。かつて墳丘を覆っていた土は畑に散らされ、かわりに羨道を壊した石が円周の端に寄せられて、天井石を覆っている礫が落ちないように土留めの役割を果たしている。まるで古墳であることを打消すような状態であった。しかし、このヤックラはいつもきれいにされていた。雑草のツル草やバラなどは全くなく礫の山であるヤックラとして整然としていたことがせめてもの救いであった。



第54図　幸神6号古墳墳丘・付近出土遺物実測図

墳丘は、主軸の長さ5.8m、直交軸の長さ6.8mを測り、この規模に墳丘としてのヤックラが残っていた。

(2) 内部構造

本古墳の調査は、周囲の作物・果樹の関係からとくに羨道、右側壁側が作物で身動きがとれなかったため第53図に示した全体図の計測が精一杯で、充分な調査に至ることができなかった。

石室の平面プランは、奥壁から開口部まで5.2m前後であると推定される。残存は羨道の途中まででで4.2mである。奥壁幅3m、中央で3.6mを測る。玄室端部の左側壁際に幅60cm、高さ85cmの玄門が存在することから、横穴式両袖型玄門付石室の形式を呈した古墳であると判断される。主軸方位はほぼNを指す。

玄室内の規模は、奥壁2.2m、左右側壁2.6mで四角形に近い形状を呈している。奥壁は、横幅2.3m、高さ50cm、厚さ20cmで板状に整えられている。左右側壁共に横2m、高さ60～80cm、厚さ50cmの大きな礫を奥壁側に使い、玄門付近はその3分の1程の溶結凝灰岩を土台としている。その上部に0.5～1.2m、高さ20～60cmの礫を横積みにしている。これから測定すると玄室の高さは1.4m前後で断面形は箱状を呈すと推定される。左側壁際に試掘を入れると棺床面は敷石が認められた。この時の覆土は暗褐色土の小石粒を微量混入した粘性のある土層でこの層が墳丘を覆っていた当初の盛土であると考えられる。玄室上面には幅1.4mの天井石が残っていた。奥壁側に架けられていたとおもわれるが、かなりの角度に動いていることが観察できる。

3 出土遺物

第54図2・3は墳丘の玄室近くから出土した。2は蓋であるがカエリがない。ツマミは中心部が残っているが周囲が割れているがボタン状であるとおもわれる。口縁が16cmで広い。3は須恵器の杯で、底径・口径が広いため口辺が直線的に開く。

この他、滑石製の臼玉を墳丘際から表面採集した。径1cmを測り粗雑な作りである。

1は、内耳土器の耳の部分で墳丘から出土した。本古墳群の所在する原遺跡は縄文後期～平安時代までの遺跡であったが内耳土器の発見によって中世まで継続することが判明した。他に中原1号古墳から同様の内耳土器の胴部片が出土している。

本6号古墳はヤックラである様相が強かったが、今回の試掘調査によって古墳であることが明確になった。整備の段階では天井石の頭をいくらか表面に残して碑を封じ込めないよう配慮して盛土をした。古墳として後世に伝え残していくことが現在に生きる私たちの役目である。　　（島田　恵子）

外九間１号古墳

1　立　　地

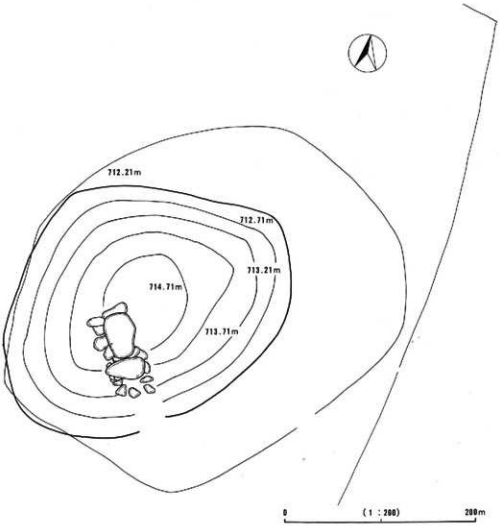
本古墳は、幸神４号古墳から直線的に南へ75m寄った地点に所在している。道を隔てて字名が外九間となるため外九間１号古墳と命名されており、外九間古墳群３基の内では西端に位置する。標高712.21mを測る平坦な畑の中に築かれており、35m離れた東寄りに外九間３号古墳が隣接している。

古墳の周囲は、北側に住宅地がせまり、東方側は耕作された畑地である。南西側一帯は、かつて薬用人参が栽培されていたためいまだに人参の小屋が朽ちて残っているが、一帯は雑草やバラ、茅などが繁茂して足を踏み入れることもできない藪である。古墳もこの藪をかき分けなければたどり着けないありさまで、調査開始にあたっては周囲の藪の刈り取りを行ってやっと墳丘の全景を見ることができた。

2　規模・構造

(1)　墳　　丘

墳丘はバラが一面繁茂しており、その間にノリデの木が生え、先ず草刈りと木を伐ることからはじめなければならなかった。これ等が終了した後に墳丘の全景を観察すると、北東側にかなり出張って変形していることがわ



第55図　　外九間１号古墳全景実測図

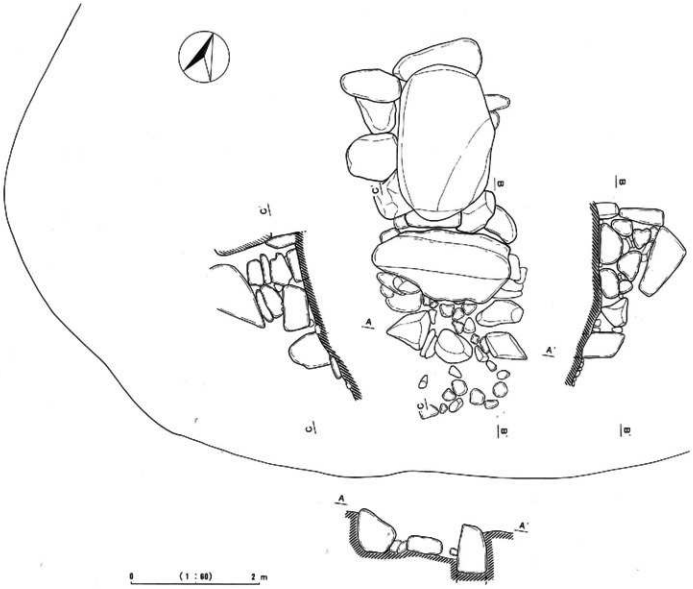
かった。主軸の長さ13m、直交軸の長さ15.5mを測る。奥壁を中心として墳丘の直径を推定すると10m前後であると考えられ、かなり大きくなっていることが分かる。

墳丘は、3～10cm大の小石で埋まっていた。これは薬用人参の栽培にあたって畑の石を丹念に拾いだしたことに起因している。とくに大きく張り出した北東側は5cm大の礫で埋まっていた。薬用人参栽培の場合特別小石を拾い出されなければ質の良い人参は作れないという。墳丘の高さは奥壁側・東側で2m、西側で1.8mを測る。

(2) 内部構造

本古墳の墳丘は変形する程礫が盛られて保存された形をとっていたが、石室は全面盗掘されていた。盗掘は左側壁の上段天井石との境にある礫を取り除いてそこから出入りしていたようである。

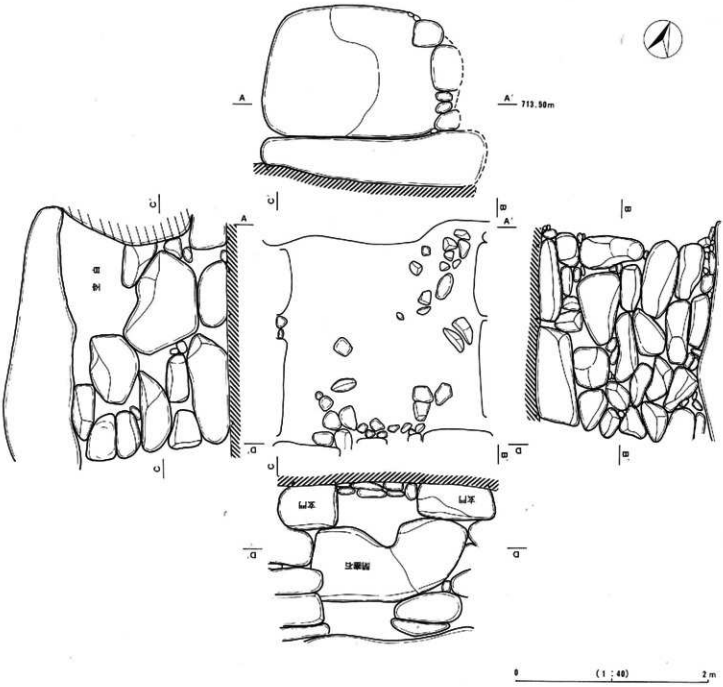
石室の平面プランは、奥壁から開口部まで全長5.8mを測り、奥壁幅2.2m、中央で2.4m、開口部で2.2mとな



第56図　外九間1号古墳石室全体図

る。石室の形式は、横穴式両袖型玄門付古墳で主軸方位はN－20°－Wを指す。

玄室内の規模は、奥壁側が1.9m、左右側壁が２ｍを測り四角形を呈している。敷石は自然石が使われていて人為的に割った石はあまりみられない。10～30cm大のものが残っていたが散漫的である。盗掘は棺床面まですっかり撹乱されていた。奥壁は、横1.4m、高さ30～60cmの溶結凝灰岩が横に設置され、上部に横2.1m、高さ1.4mの自然石が縦積みにされている。右側壁は幅0.3～１ｍ内外の礫を横積みにしてぎっしりと積み重ねてある。下から天井石にかけて持ち送りされ、見事な積み具合である。左側壁も持ち送りの積み方がなされているが、奥壁際から天井石にかけて盗掘時にはずして玄室へ入る穴をあけたため、いくらかゆるみがあり右側壁のような美しさ

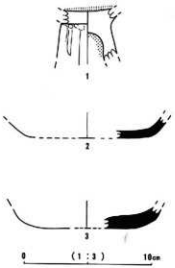


第57図　外九間１号古墳玄室実測図

がない。全体に小さな石を積み重ねた側壁で、新海神社古墳群、幸神古墳群にはこのような持ち送りの積み方はみられなかった。また、玄室が小さく正方形に近いことも大きな特徴である。

さらに、玄門は柱状ではない。横幅60～80cm、高さ38～44cm、厚さ20～26cmを測る長方形の石を据えて玄門とし、その上に横幅1.6m、高さ70cmの石を横架させている。それは玄室を閉塞する役目を果たしているのである。しかし、中央下端部は横幅80cm、高さ40cmにわたって空間があるが、玄室と羨道を仕切る境に15～30cm大の偏平な石が2段に積み重ねられて残っていることから、多分このように3段、4段と積み重ねて閉塞させていたとおもわれる。

羨道は、道幅80cm、長さ2mで、開口部両側に縦横40～60cm、高さ50～60cmを測る羨門が存在している。低い門である。羨道の側壁も横幅30～70cm、高さ10～40cm大の小さい石を横積みにしている。



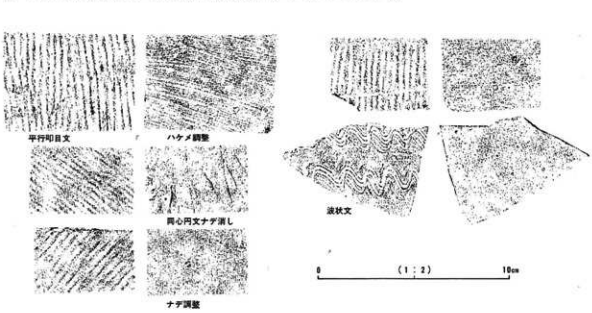
第58図　外九間1号古墳出土土器実測図

天井石は、長さ2.4m、横1.5m、厚さ60cmを測る平坦な石を玄室にかぶせ、さらに閉塞石から羨道にかけて、長さ2.2m、幅1.1mの石を横にのせて2枚目の天井石としている。断面形は箱状を呈す。

本古墳は玄室内は盗掘されて空洞であった。棺床面直上に残っていた土は10cm程で、投げこまれた10～15cm大の礫が多量混入していたが、玄室内の側壁は旧状を留めていた。また、玄室天井石、羨道の天井石が良好な状態で残っており、古墳内部の構造を学習するには最良の資料となろう。持ち送りされた小さな石の横積み状態、四角形の玄室、羨門と閉塞石の組み合わせ、低い羨門などが今まで見てきた古墳群と設計が異なる。

3　出土遺物

敷石をはがして棺床面下まで撹乱されていたことから出土遺物はない。第58図1に示した高坏接合部の破片が羨道から出土したのみで、全て墳丘清掃時に採集した須恵器の細片である。土師器高坏は内面黒色で脚部に粗雑なヘラケズリがなされている。須恵器坏は底径広くヘラケズリされている。

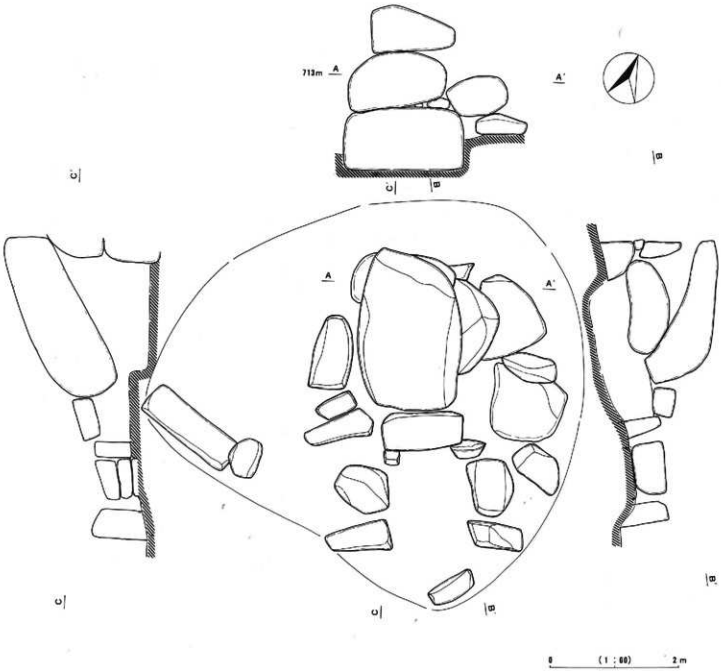


第59図　外九間1号古墳出土甕の叩き目文拓影図

第59図は墳丘出土の須恵器叩目文と内型の痕跡を拓影で示した。表面は平行叩目文で叩いている。内型はハケ目状調整、ナデ調整、同心円文ナデ消しなどがみられる。また、口頸部波状文の内型はナデ調整が多い。

以上の遺物から埋葬年代を推定すると、高杯が八世紀前半、その他が八世紀前半～後半に比定されるとおもわれる。細片なので詳細な判断はできない。

本外九間１号古墳は、古墳築造の設計者が幸神古墳群とは異なる。この事実は大きな意味をもつと考えられる。第一に氏族の異なる集団であり、村の異なる首長級の墓である。ということが推定される。幸神とあまり隔たりのない地区にこのような古墳が群集していることは、さまざまな問題を投げかけているといえよう。



第60図　外九間２号古墳石室全体図

外九間２号古墳

１　立　　地

本古墳は、外九間古墳群の東端に位置し、東方の脇に住宅がせまりさらに住宅の脇には三分、平賀線の県道が南北に通じている。南西側は畑が広がっているが最近徐々に宅地化が進んでいる。また、本古墳から一直線に結ばれる北方の山崎地籍に山崎古墳が所在している。

２　規模・構造

(1)　墳　　丘

外九間２号古墳は、新宮神社地となっているが個人所有の畑の中に所在している。本古墳の墳丘は西方にわずか残っているのみで全て裸に近い状態にあった。奥壁側は削られて平らになっており、２段に組まれた奥壁の最下段まで露出していた。右側の側壁も抜かれて散らばっており、羨門も表面が地山層まで顔を出している。玄室は、左右共に最下段の側壁が姿をのぞかせて攪乱されていた。天井石は、長さ2.7m、幅1.6m、厚さ１mを測る巨石が玄門の楣石の手前までずり落ちて傾斜していた。残存していた主軸の長さは6.4m、直交軸の長さは6.8mを測る。

(2)　内部構造

本古墳石室の平面プランは、奥壁から羨門まで全長4.7mを測り、奥壁2.2m、中央で2.8m、羨門幅3.1mとなる。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室で、主軸方位はN－25'－Wを指す。

玄室内の奥壁幅は1.6m、左右側壁幅は約2.1mを測る。天井石が玄門手前で傾斜してずり落ちているため危険であり、正確な玄室の実測はあきらめざるを得なかった。また、クレーンによる修復も車が入れないので現状のままで清掃を終了しなければならなかった。

玄室と羨道との境には柱状の玄門が設けられている。門の高さは55cmでその上に長さ1.3m、幅60cm、厚さ30cmの角柱が楣石として横架していたとおもわれるがこれも玄門からややずり落ちている。天井石下端部と楣石先端部は接触気味に接近してずり落ちている。左側壁と玄門との間には松の木が植えられており、その根が入り込んで側壁が崩れそうになって、幅60cm、高さ20cmの溶結凝灰岩が３段に横積みされていた。右側壁は幅80cm、高さ50cmの溶結凝灰岩が一個横に設置されて両側10cm強の空間は土で埋まっている。

玄門と玄門の間は80cmであるが羨道の道幅は1.2mと幅広くなっている。羨門は0.8～１mの広い面を正面に据えているので安定感があり、見た目もきれいである。

本古墳の構造は、北方に近接する幸神２号古墳と同一の形態であり、外九間１号古墳とは異なっている。

３　出土遺物

破壊、盗掘が著しかったので図示した２点と土師器細片３点、須恵器細片３点を採集した。１は、低い高台付の碗、２は、底部ヘラケズリで丸みのある浅い坏である。共に羨門付近から出土した。

これらの須恵器からみて、八世紀後半に比定されるが、羨門部付近からの出土は被葬者との別れの儀式に使用された可能性が強い。

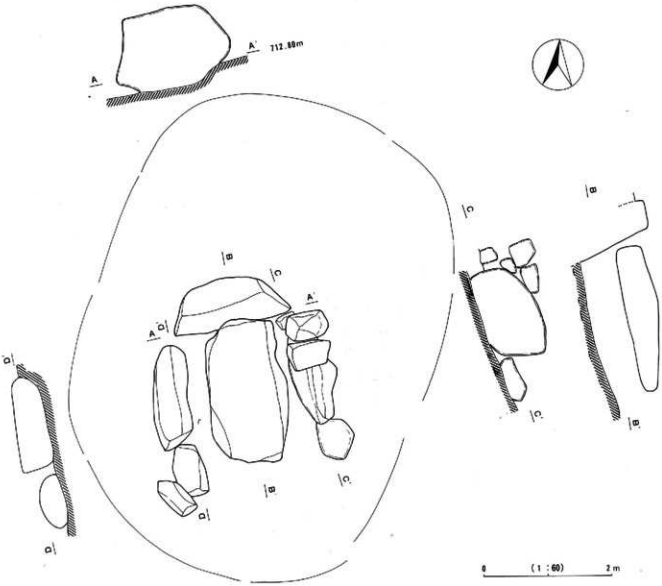
第61図　外九間２号古墳出土土器実測図

外九間３号古墳

１　立　地

本古墳は、外九間古墳群３基の中では真中に位置している。西方40mの地点に外九間１号古墳が隣接し、さらに北方100m離れた地点に幸神１～６号古墳が所在する。

本古墳はヤックラと呼ばれ高さ１mに礫が積み重ねられていた。しかし、外周のところどころに溶結凝灰岩が積み重ねられていることから古墳であろうという想定はぬぐえなかった。地主さんもそんな話は伝わっていないということで、ずっとヤックラとして農具を囲ったり、かぼちゃを這わせたりして利用していた。周囲は平坦な畑であるが近年耕作しない畑が多くなり一面雑草で荒れているところがある。その荒畑南方の直線上に中原１号古墳、その西寄りに中原２号古墳が所在している。



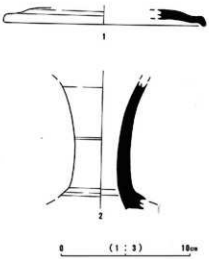
第62図　外九間３号古墳石室全体図

2　規模・構造

(1)　墳　　丘

高く積み重ねたヤックラの墳丘は、主軸の長さ7.6m、直交軸の長さ5.7mを測る。高さは北方が1.1m、西方70cm、東方80cmである。墳裾は直立して石を重ねているため非常に高く感じられる。墳丘は北方の裾まで2.9mでこの部分が比較的広く残っているがその他はカットされて1.2m前後の幅だけしか残されていなかった。

試掘は、先ず中心部にメスを入れたが天井石らしきものがなかなか見つからなかった。右側壁上面の60cm前後の礫では確信が持てない。範囲を広げると天井石が姿をあらわした。ここで焦点がしぼられたのでうず高く積まれた礫の山を徐々に片付けた。



第63図　外九間３号古墳出土土器実測図

(2)　内部構造

本古墳は、奥壁、左右側壁、天井石１枚が残りほぼ玄室の状態は把握できたが羨道はすでに破壊されていた。残存している玄室の平面プランは、奥壁幅2.8m、玄室中央で３m、入口で2.8mを測る。主軸方位はN－10°－Wを指す。古墳の形式は横穴式石室であるが羨道が破壊されているので袖の形式は不明である。

玄室内の規模は、奥壁幅1.6m、右側壁長さ2.4m、左側壁長さ2.5m、入口1.6mを測る。奥壁は幅1.9m、高さ1.3m、厚さ45cmを測る板状の鏡石１枚を立てている。溶結凝灰岩の自然面を生かしているが玄室内の面は割り加工されている。左右側壁は横幅1.6m、高さ50～90cm、厚さ20～35cmの大形石を奥壁側に先ず１枚使い、羨道側には横幅70～80cm、高さ30～40cmの小さい礫を横積みにしている。また、右側壁の奥壁際には20～40cm大の小形石を３段に横積みして空間を埋めている。敷石は剝がれたのかまだらに残っているのみである。

天井石は玄室の中央に横たわっていた。長さ2.2m、幅1.2m、厚さ50cmを測るが横幅が足りないのでこれは当初奥壁方向に架かっていた天井石であるとおもわれる。奥壁は1.3mを測る高さにあるのでその上にこの石が架かるので玄室の断面は箱状を呈していると推定される。盗掘時に玄室入口付近に架かっていたもう１枚の天井石はどこかへ持ち去られている。さらに玄門、羨道側壁、羨門、左右側壁上段の石は取り除かれて、墳丘裾の石垣に使われている。柱状の礫が見られないことから玄門、羨門は門柱ではなく１～２段の横積みであったと考えられる。この場合両袖型であったろうと推定される。

3　出 土 遺 物

確認調査であることと玄室中央に天井石が崩落しているため、実測に必要な部分のみ掘り下げを行った。盗掘がひどかったためか遺物は墳丘から破片２点が出土したのみである。

１はカエリのない須恵器蓋である。２は、灰釉陶器広口瓶の頸部接合部で緑色の釉が接合下部に目立つ。

本古墳は、玄室の奥壁、左右側壁が旧状を留めており方形の形状であることが確認できた。玄室内からの出土遺物が皆無であるため構築年代を決定することはできないが、構造面における奥壁の鏡石使用の年代から判断すると七世紀後半に位置付けられよう。

墳丘出土の灰釉陶器は、本遺跡内には平安時代の住居址が検出されていること、さらに幸神４号古墳の平安時代までの追葬からも、本古墳と関係ある遺物と考えられる。　　（島田　恵子）

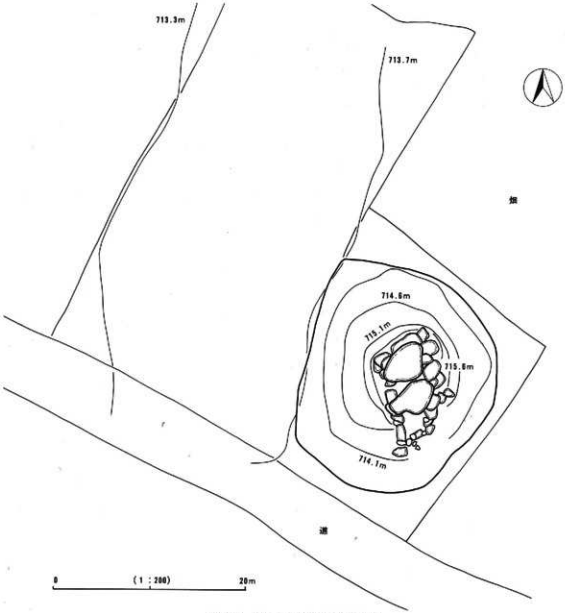
中原１号古墳

１　立　　地

本古墳は、外九間３号古墳から一直線に南方へ130m寄った地点に所在する。すぐ西方の20m離れた地点に中原２号古墳が隣接している。かつて中原３号古墳が85m離れた南東方向の新興製作所内に所在していたが、昭和43年工場設立の時点で取り壊されて消滅してしまった。

３基の古墳が群集する中原古墳群と隣接する北方には、東西の長さ35m、幅15mを測る丘がある。西端は高さ10mの岩が突き出ている。その峰に石造の三重塔が安置され、下の岩の上にはお地蔵様が立っている。伝承によると江戸時代田口藩の処刑場であったという。この岩は溶結凝灰岩の噴出物によって形成されている。

古墳は、原遺跡の南東端側の畑の中に位置し、この地点から200m南方に東西方向に流路をとる雨川が流れている。かつてはこの一帯まで雨川の氾濫原であった。



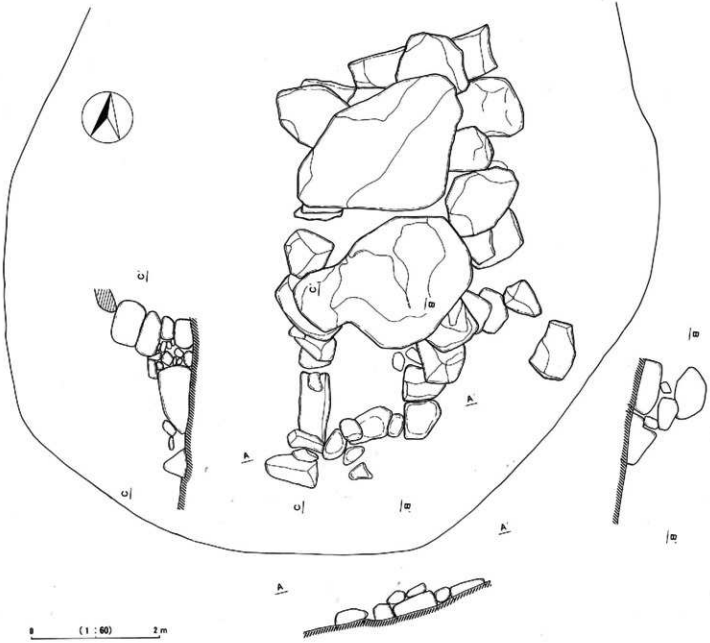
第64図　中原１号古墳全景実測図

2　規模・構造

(1)　墳　丘

古墳の周囲一帯がきれいに耕されていた時は、周囲の耕作者の皆さんの善意によって墳丘は草や木もなくかなり清掃されていた。時代の移り変わりの中で耕作者が老齢化するに従って、近年ますます耕されなくなった畑が増加して、古墳は草と木の藪と化している。本古墳はとくにうるしの大木、ふじの木の根、バラ、ウドまでが墳丘に繁茂して、そのすき間から天井石がところどころ顔を出している状態は不気味な感じであった。

本古墳は厚い天井石が全体に露出し、天井石と比較して墳丘はやせおとろえ、範囲もせばまって実に貧弱な様相を呈している。主軸の長さ11.5m、直交軸の長さ10.5mを測る。墳丘の高さは、北側1m、西側1.4m、東側0.8mを測る高さで残存している。天井石を覆うには地面から4m以上の高さが必要である。



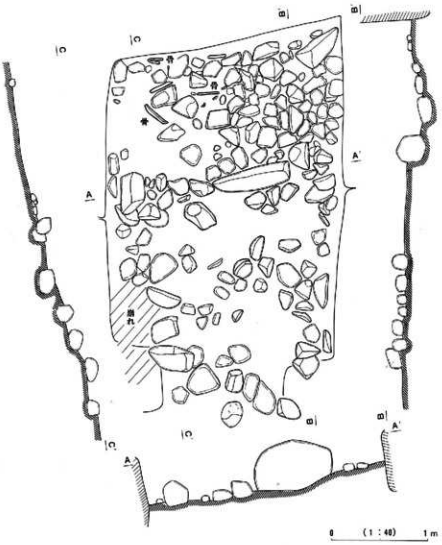
第65図　中原1号古墳石室全体図

(2) 内部構造

本古墳石室の平面プランは、奥壁から開口部まで全長７ｍを測り、奥壁幅3.6m、中央で3.6m、開口部で2.2mとなる。石室形式は、横穴式両袖型玄門付石室で主軸方位はほぼNを指す。

玄室内底面の規模は、奥壁長さ2.4m、右側壁長さ3.6m、左側壁長さ3.3m、羨門部幅1.2mで右側壁先端が北東に突き出た方形を呈す。当初、天井石が崩壊して開口部をふさいでいたので右側壁のすき間から出入りして玄室内の清掃にあたった。玄室内は盗掘により底面まで荒らされていた。それは、ビニール・缶・小ビンなどが最後まで混入していたことにより判断される。

第64図は、玄室敷石および骨出土の実測図である。撹乱されてはいるが玄武岩、溶結凝灰岩、安山岩の角礫、板状など10～15cm大の礫が一面埋め込まれていた。中には、長さ80cm、厚さ25cm、高さ30cmの大型の安山岩が奥壁から1.35m、中央からやや右寄りに位置していたため、骨の点在する奥壁際の被葬者をここで仕切ったような感じであった。奥壁と玄門付近のレベルに差があるが、これは天井石が羨道にずり落ちて掘り下げが思うように出来なかったからである。本古墳は当初から今にも崩壊しそうな状況にあったため、玄室内に入って清掃することを誰もが嫌がったので、担当者である筆者が左右側壁、天井石の状態をくまなく調べた結果、これは大丈夫と

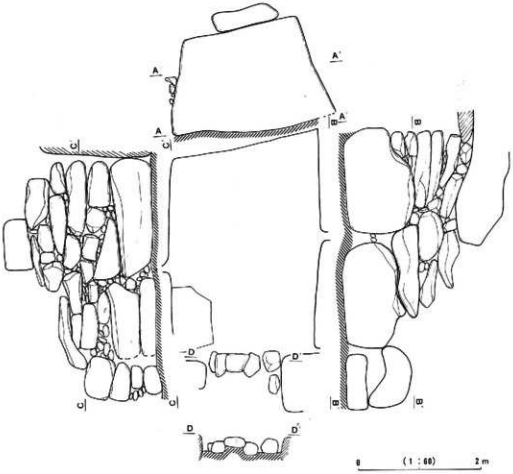


第66図　中原１号古墳玄室上面実測図

の確信を得たので一人で入って清掃を行った。その後、クレーンでずり落ちた天井石を元の位置に戻して、玄門から羨道の清掃、整備を行った。

奥壁は、最大幅2.7m、高さ1.6m、厚さ0.7mを測る鏡石を立てている。右側壁は、横幅1.7m、高さ0.9～1.15mの大形石を土台とし、その上に横幅0.8～1.5m、高さ0.2～0.4mの小形石を横積みに3段重ねている。隙間は5～20cm大の小礫を埋め込んで動かないようにしている。左側壁は1.3～2mの大形石を土台としているが、高さ30～70cmと低いためその上への積み重ねは5段である。やはり隙間に小石を埋め込んでいる。小さな角度で下段から徐々に持ち送りされていて6段重ねの左側壁はとくに美しく感じられる。残念ながら玄門付近が崩壊しており危険であるため詳細な図面の記録ができないまま補強しなければならなかった。また、奥壁と左側壁の間に1m近い隙間があるが、当初の盗掘はこの隙間の石を抜いて玄室に入ったとおもわれる。墳丘に抜いた石が転んでいた。

玄門は、縦横0.5～1m、高さ30cmの上面平な石を土台にしている。門柱ではない横積みの玄門である。外九間1号古墳と類似した設計である。羨道の長さは2m足らずで短く、道幅は1.2mを測る。玄室幅は2.4mを有するのに対して羨道はその半分に縮小されている。羨道側壁は50～80cmの小形礫で横積みされているが、玄門付近は3～4段に積み重ねられているが開口部は貧弱になり、柱状の羨門はみられない。また、羨道を閉塞したとおもわれる礫が開口部に残っていた。この状態の礫は玄門と玄門の間にも並んでおり、玄室と羨道を仕切る框石はみられなかった。古墳に使われている石は全て溶結凝灰岩である。



第67図　中原1号古墳玄室実測図

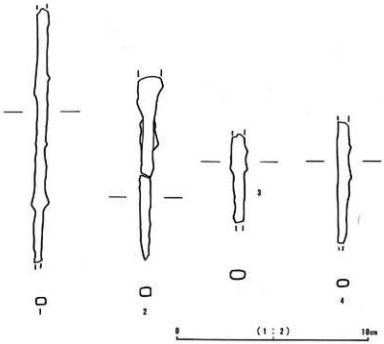
3 出土遺物

棺床敷石面まで盗掘、撹乱されていたので、遺物はところどころにへばり付くように残っていた。

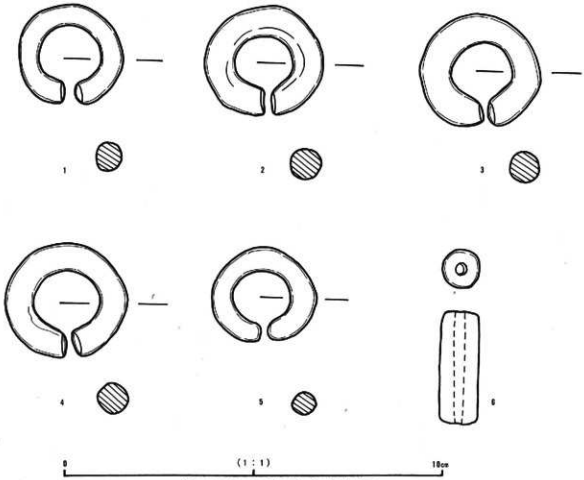
鉄鏃は、頸部片4点がある。1は長頸棘箆被で鏃身部を欠失する。2は、短頸で無箆被的な感じがするが腐蝕と破片なので不明である。

3は、関箆被を有す短頸の鉄鏃であるとおもわれる。4は、棘箆被の感じであるがその部分が剝落気味である。

第69図は耳環・管玉を図示した。耳環は5点共に銅芯の延縒を使用している。1・5は外径2.6cmで小形であるが、2～4は3.0～3.1cmで同規格である。内径は1～5



第68図　中原1号古墳出土鉄鏃実測図



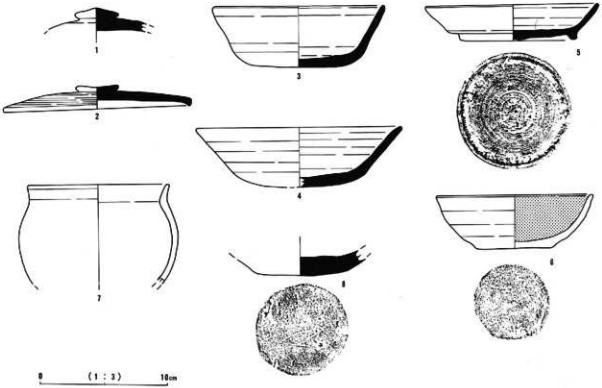
第69図　中原1号古墳出土耳環実測図

共に1.5～1.6cmでほぼ同一である。金・銀の鍍金は全くみられない。

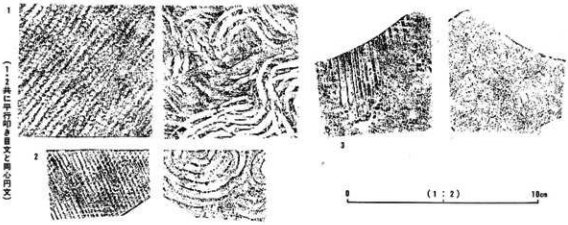
6の管玉は碧玉製で、長さ2.8cm、幅0.9cm、5.1gを測り大形である。

第70図は土器類である。1・2は須恵器蓋で1は宝珠ツマミ、2はボタン状ツマミでカエリがない。3・4は須恵器坏である。3・4共に底径広く、3は直線的に立ち上るが4は大きく開いて立ち上るため口径16cmとかなり広い。5は、須恵器高台付坏で浅く皿状であるがロクロ回転の折にできたとおもわれる口縁部に大きな歪みがある。暗灰色を呈す。6は、内面黒色の土師器坏で底部糸切り後ヘラケズリされている。

7は土師器小形甕である。日常汁器であったことを示すこびり付きが内外面に付着している。8は須恵器底部片で回転ヘラケズリとヘラ記号らしきものが伺える。



第70図　中原1号古墳出土土器実測図



第71図　中原1号古墳墳丘出土の甕叩き目文拓影図

第71図は墳丘出土の須恵器甕の叩き目文を拓影図に示した。1・2は正面平行叩き目文、内面同心円文で叩かれている。3は、正面平行叩き目文と格子目文があり、内面は同心円文のナデ消しがみられる。

骨は奥壁から1m内外の中心部に多く残っていた。盗掘は、骨が出たところで気味が悪くなったのか取りやめたようである。当初玄室内のゴミをかたづけ、投げ込まれていた礫を取り除くとすぐに大腿骨があらわれたことにより理解されよう。

頭蓋骨、下顎骨正中部、鎖骨、肩甲骨、側頭骨、大腿骨、大腿骨転子下部、腓骨、中足骨などで老人男性と明確に判別された骨と大柄な老人男性の大腿骨と区分されたものがある。歯もあり109ページに記述されている。また、髪の毛も残っていた。

本古墳は、玄室が大きく臼田町所在の古墳中最大である。奥壁幅2.4m、側壁が3.3～3.6mを測る長方形の室内で、鏡石の奥壁、持ち送りの美しい側壁、天井石は1mの厚さで、天井までの高さは1.9m、玄門は横積みで羨道は玄室幅の2分の1となる。羨道が短く羨門はみられなかった。以上が本古墳の特徴である。

出土土器は、奈良時代後半に比定される。おそらく最終被葬者と現世との別れの飯食をしたとされる黄泉戸喫（よもつへぐい）の儀式に使用された副葬品であろう。本古墳の構築年代は奥壁の鏡石から七世紀後半であろうと考えられる。

中原2号古墳

1 立　地

中原1号古墳と20m離れて接触している本古墳は、北方の外九間1号古墳と一直線で結ばれる西端に位置している。古墳群はこれより西方へは一基も所在していない。古墳築造にあたりなんらかの取り決めがあったものと推定される。以前調査した原遺跡の集落はこれより西方に確認されていることから、古墳群の西方に集落があり、この集落から一段下った沖積平野に生産の場所である水田耕地が広がっていたとおもわれる。

2 規模・構造

(1) 墳　丘

見事に草やバラにまとわりつかれた方形の墳丘は、列石がところどころに残っていたが一面の藪であった。周囲は雑草が背丈程にのびて荒れ果てた草原と化しており、古墳の全景を出すまでは草刈りを二日間も続けなければならなかった。昨年秋に今回の調査のためにと一度墳丘の雑木、雑草は取り去っている。

以前、薬用人参畑が周囲にあったので、小石を羨門から1.5m手前まで積み上げてあり墳丘はさらに南北に細長くのびた方形を呈していた。主軸長10.5m、直交軸長8.5mを測るが、羨門の手前に1.5mの長さにヤックラが存在するため主軸の長さは最終的には9mに整えた。しかし、その分北方に2.8m程延長拡大する必要があったが、個人所有の古墳であるため後日の復元時まで待つことにした。墳丘は1～1.3mの高さに残っていた。

(2) 内部構造

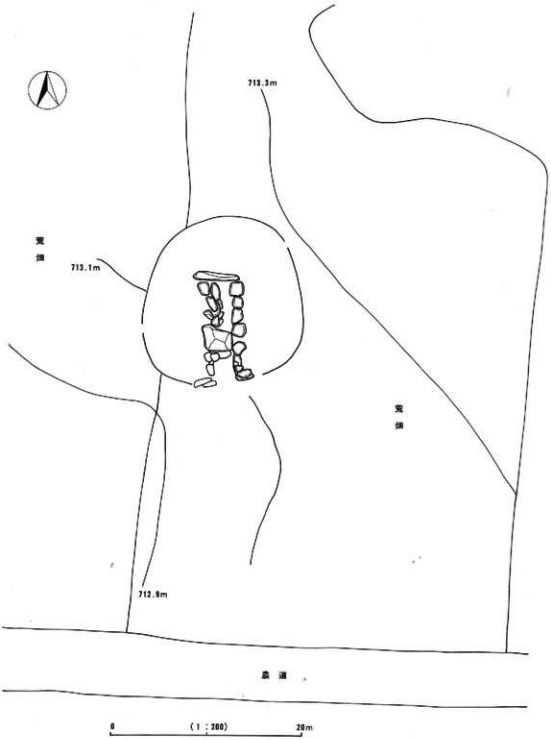
本古墳石室の平面プランは、奥壁から羨門部まで全長6mを測る。奥壁幅は2.7mで羨門部は3.2mとなる。中心部は左側壁が崩れているため測定はできなかったがおおよそ奥壁と同じであると推定される。また、確認調査であるため礫を取り除くことはできないので、危険が伴う箇所は石組の状態を確認することはできなかった。

古墳石室の形式は横穴式両袖型玄門付石室であるとおもわれる。両袖とおもわれるのは、羨道幅が1mと細くなっている。玄室幅は1.8～2mはあると推定されるからである。また、羨道の側壁が大形石1枚を立てているこ

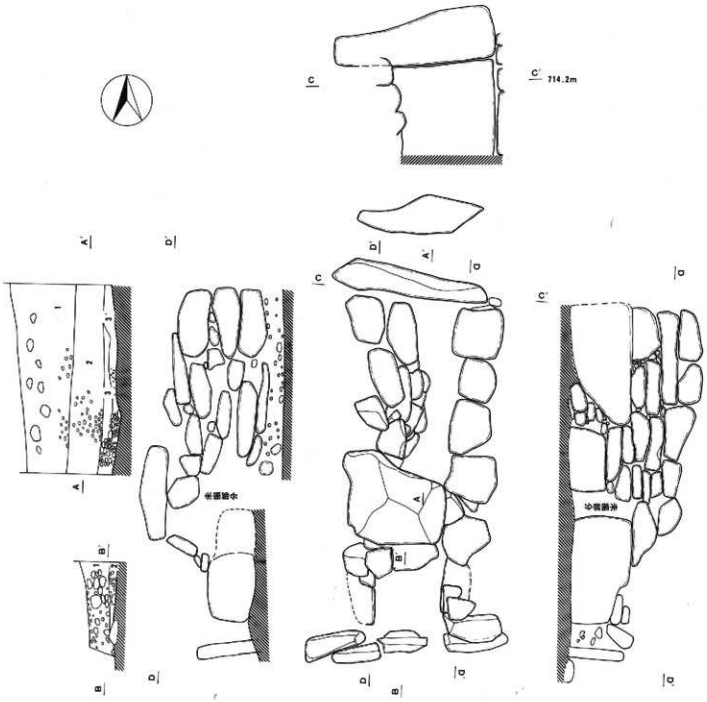
とから玄門は柱状の礫を使用しているとおもわれる。主軸方位はほぼNを指す。

奥壁は高さ1.4m、横幅2～2.5mを測ると推定される板状の溶結凝灰岩を用い、その上面に横幅2.5m、高さ40～80cmの同質の自然礫を重ねている。これからみて玄室内の奥壁幅は少なくとも2m以上はあるとおもわれる。

右側壁は、棺床面直上に横幅1.8m、高さ0.95mと横幅90cm、高さ60cmの溶結凝灰岩を土台とし、その上4～5段に横幅0.3～1.4m、高さ10～50cm大の礫を隙間なくきっちりと積み重ねている。小さな隙間には小石と土が埋め込まれて見事な積み重ねの側壁である。



第72図　中原2号古墳全景実測図



1層（暗褐色土）粒子細く粘性中、礫多量混入
2層（褐 色 土）粒子粗い砂礫層

0 (1：80) 2m

1層（褐 色 土）粒子粗く粘性小、上部人頭大の礫多量混入
2層（暗褐色土） 〃 3cm～18cm大の 〃
3層（黒褐色土） 〃 奥壁部分礫少量
3'層（褐 色 土）粘性中でこの層よりやわらかくなる

第73図　中原2号古墳石室全体図

左側壁は、平面図に示してあるように玄室中央にせり出している。上からの重圧によるものである。これは断面図で明らかなように土台が土で礫を使用していないためであろう。土台がしっかりしていないから上からの重圧に耐えられなかったと考えられる。

玄門入口付近には、横幅1.55m、縦幅1.45m、厚さ40cmの天井石が架かっていて危険なため玄門の存在を確認することができなかった。右側壁の空白部分を断面図でみると、幅40cm、高さ90cmである。この位置に玄門があると推定できる。玄門は柱状であったと仮定してもあまり高くはない。

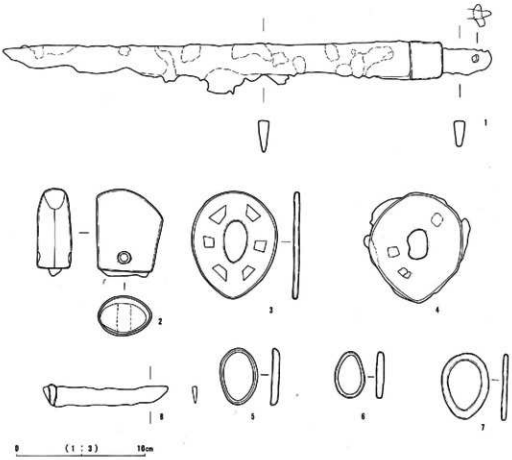
羨道は、左右側壁共に1.7mの長さの溶結凝灰岩でしっかりと築かれている。少なくとも2段重ねであったとおもわれるが抜けている。

羨門は幅の広い面を正面に向けている。左羨門が75cm、右羨門が1m幅で、厚さ20cmを測る板状の溶結凝灰岩を用いているため門として形状が美しい。また、門と門の間には長さ70cm、幅30cmの玄武岩が埋め込まれている。

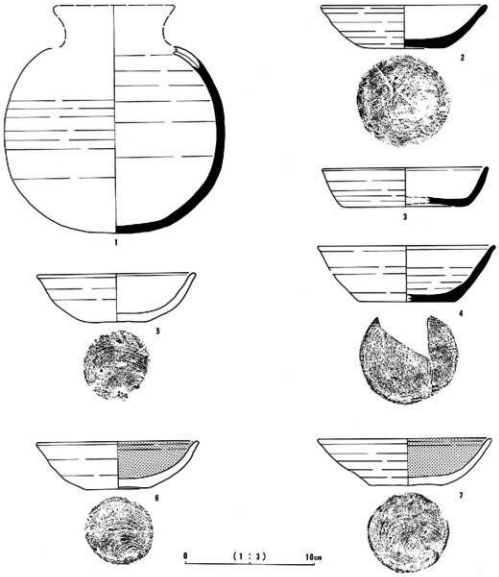
玄室内のセクションは4層に分けられた。全体に層状地特有の粒子粗く小石粒の混入が多い土層である。棺床付近の土層はやわらかく骨が粉状にくだけて混入していた。棺床面には敷石はみられない。

3 出土遺物

遺物は棺床面から10cm程上面に出土した。刀装具、土師器坏が玄門から左側壁付近にかけて点々と出土したが刀身は破片もみられなかった。第74図1の小刀は奥壁際の左側壁棺床面から出土した。全長38.5cmで茎部は6cmを測るが柄間金具と目釘がしっかり付いている。棟厚0.8cmで厚くてがっちりしているが腐蝕が進んでいる。



第74図　中原2号古墳出土小刀・刀子・刀装具実測図



第75図　中原２号古墳出土土器実測図

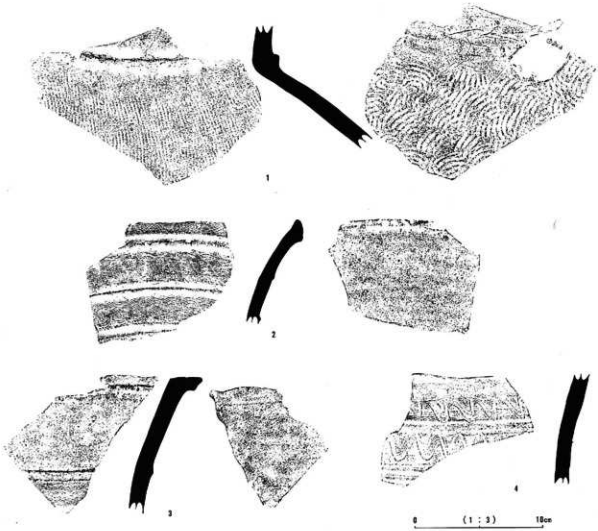
２は、円頭把頭で中に木製の柄が孔を穿たれた状態で入っている。銅製である。３も銅製の鐔で６窓である。４は鉄製の鐔で腐蝕が進んでおり３窓だけ確認されているが、８窓になるとおもわれる。両者共に倒卵形である。５～７は鞍金具で共に銅製である。８は刀子の刀身部で茎部に至る手前に帯状に鉄が付着している。

土器は、須恵器が羨道から出土し、土師器は玄室入口部から出土した。１は、丸底で頸部から胴部にかけて円形で球状の器形である。口縁部を欠失するが甕形であろうと推定される。ロクロ痕が顕著である。２は糸切り底部で５・６の土師器と器形は同一である。３は底径広くヘラケズリが施され器高は浅い。４も糸切り底部であるが底径は２より広く一まわり大形の坏である。

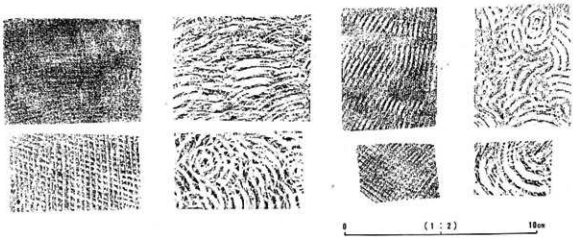
５～７は糸切り底部の土師器坏で、６・７は内面黒色である。共に底部から内湾して立ち上る。

第76図・77図は、須恵器の叩き目文、口縁部波状文を拓影図に示した。口縁部の内面叩き目文は全てナデが施され、頸部から胴部に入ると第76図１にみられるように同心円文で内型されている。また、口縁部波状文は２～４までそれぞれ異なった状態で描かれている。

第77図の拓影は、外面平行叩き目文、格子叩き目文が施され、内型はそれぞれ異なった型の同心円文を示した。



第76図　中原２号古墳墳丘出土須恵器拓影図



第77図　中原２号古墳出土須恵器叩き目文

骨は頭が奥壁際の右側壁に沿って一体出土した。かなり高い地点に頭があり、その下部の棺床面あたりまでたくさんの骨が重なっていた。寝かせた状態の埋葬というより立った状態というようであった。また、玄室入口部にも頭、大腿骨などが集中していた。この付近から土師器坏、刀装具などが出土している。

2体の頭と共に大腿骨骨幹部、脛骨、側頭骨、歯などが出土して、歯牙から20才代以下・60才代と鑑定されている。玄室内の埋葬状態は敷体の骨が粉状になって土に混入し撹乱された状況にあった。

本古墳は、左側壁の崩落により一部分清掃できない箇所があり全体を把握することはできなかった。天井石がどこかへ持ち去られてしまい玄室内は空洞がなく土と礫で埋まっていた。棺床面から天井石までの高さは2m近くあり深い玄室である。左側壁の崩落がなければ構造的にも見事な古墳であったが、右側壁の石積みの素晴らしさに比べて何故左側壁が粗雑な組み方をしたのか不思議な感じがしてならない。

本古墳の構築年代を比定する遺物の出土はなかった。だが、2段重ねの奥壁、1枚石の広い面を表面に向けた羨門、羨道側壁の石組みなどの構造から、隣接する中原1号古墳と時間的差はないと考えられるが設計者は別人である。築造当時の両古墳は墳丘と墳丘が接触する近さに盛られていたとおもわれる。　　（島田　恵子）

第2表　幸神古墳群出土鉄鏃一覧表

（ ）は残存値　　上段　長さ、中段　幅、下段　厚

挿図番号	古墳名	全長(cm)	鏃身(cm)	篦被部(cm)	茎部(cm)	重量(g)	欠損状態	形式名	備考
6－1	新海神社中御陵	(11.6)	3.1 1.1 0.3	6.7 0.8 0.3	(1.8) 0.6 0.3	8.9	茎部先端欠損	長頸鏃篦被片切刃造柳葉	
6－2	新海神社中御陵	(4.4)	3.4 1.0 0.3	— — —	— — —	3.9	頸部欠損	長頸鏃篦被片切刃造柳葉	
6－3	新海神社中御陵	(6.7)	— — —	— 0.3 —	— — —	4.5	鏃身と茎部先端欠損	——	
10－1	新海神社東御陵	(7.7)	— — —	— — —	— — —	9.7	鏃身と茎部先端欠損	——	
10－2	新海神社東御陵	(7.9)	— — —	— — —	— — —	6.8	鏃身と茎部先端欠損	——	
15－5	新海神社新発見	16.1	2.7 1.0 0.2	8.3 0.5 0.4	5.1 0.4~0.1 0.4~0.1	11.3	完　形	長頸鏃篦被片切刃造柳葉	
15－6	新海神社新発見	10.9	4.4 2.9 0.4	3.5 0.9 0.5	3.0 0.6~0.2 0.3~0.2	17.5	完　形	短頸篦被平造長三角	
22－1	新海神社西御陵	(5.3)	4.1 3.2 0.1	— — —	— — —	8.3	頸部欠損	短頸腸抉両丸造柳葉	
22－2	新海神社西御陵	(9.2)	3.3 1.3 0.2	2.4 0.6 0.4	(3.5) — —	10.7	茎部先端欠損	短頸鏃篦被両丸造柳葉	
22－3	新海神社西御陵	(8.0)	— 0.8 0.2	— — —	— — —	5.4	茎部先端欠損	長頸鏃篦被片丸造鑿箭	
22－4	新海神社西御陵	(11.3)	— 0.9 —	— 0.5 0.4	— — —	11.4	茎部先端欠損	長頸鏃篦被片丸造鑿箭	
22－5	新海神社西御陵	(13.0)	— 0.9 0.2	— 0.7 0.5	— — —	10.7	茎部先端欠損	長頸鏃篦被片丸造鑿箭	
22－6	新海神社西御陵	(13.3)	— 0.9 0.3	— 0.6 0.4	— — —	10.9	茎部先端欠損	長頸鏃篦被片丸造鑿箭	

挿図番号	古墳名	全長(cm)	鏃身(cm)	篦被部(cm)	茎部(cm)	重量(g)	欠損状態	形式名	備考
22－7	新海神社西御陵	(4.0)	2.8 0.9 0.2	－ － －	－ － －	1.6	頸部欠損	――― 片切刃造柳葉	
22－8	新海神社西御陵	(11.9)	－ － －	－ － －	－ － －	7.3	茎部先端欠損	長頸棘篦被片丸造鏃鏑	
22－9	新海神社西御陵	(15.0)	－ － －	－ 0.5 0.4	－ － －	12.2	茎部先端欠損	長頸棘篦被片丸造鏃鏑	
22－10	新海神社西御陵	(14.3)	－ 0.6 0.3	－ 0.5 0.5	－ － －	13.1	鏃身部欠損	長頸棘篦被平刃片刃箭	
22－11	新海神社西御陵	(13.0)	－ 1.0 －	－ 0.7 0.4	－ － －	11.0	鏃身・茎部先端共に欠損	長頸棘篦被―――	
22－12	新海神社西御陵	(10.0)	－ － －	－ 0.6 0.5	－ 0.5 0.3	9.65	鏃身・茎部先端共に欠損	長頸棘篦被―――	
22－13	新海神社西御陵	(9.5)	－ － －	－ 0.6 0.4	－ － －	7.75	頸部下端・茎部欠損	長頸棘篦被平刃片刃箭	
22－14	新海神社西御陵	(9.7)	－ － －	－ 0.5 0.3	－ － －	7.3	鏃身部・茎部先端欠損	長頸棘篦被―――	
22－15	新海神社西御陵	8.3	－ － －	－ 0.6 0.3	－ 0.4 0.3	4.8	鏃身部欠損	長頸棘篦被―――	
22－16	新海神社西御陵	(10.5)	－ － －	－ 0.6 0.4	－ 0.4 0.4	9.1	鏃身部欠損	長頸棘篦被―――	
22－17	新海神社西御陵	(8.7)	－ － －	－ 0.7 0.4	－ － －	7.45	鏃身部・頸部上端欠損	長頸棘篦被―――	
22－18	新海神社西御陵	(9.9)	－ － －	－ 0.6 0.4	－ － －	8.45	鏃身部・頸部上端欠損	長頸棘篦被―――	
22－19	新海神社西御陵	(9.2)	－ － －	－ 0.5 0.3	－ － －	6.6	鏃身部・頸部上端欠損	長頸棘篦被―――	
23－20	新海神社西御陵	(15.6)	－ － －	－ 0.5 0.3	－ － －	13.9	鏃身部欠損	長頸棘篦被平刃片刃箭	
23－21	新海神社西御陵	(13.9)	－ － －	－ 0.5 0.4	－ 0.3 0.3	11.2	鏃身部欠損	長頸棘篦被―――	
23－22	新海神社西御陵	(15.2)	－ － －	－ 0.4 0.3	－ 0.5 0.4	10.7	鏃身部欠損	長頸棘篦被平刃片刃箭	
23－23	新海神社西御陵	(12.4)	－ － －	－ 0.5 0.4	－ 0.3 0.3	7.9	鏃身部欠損	長頸棘篦被―――	
23－24	新海神社西御陵	(13.2)	－ － －	－ 0.5 0.4	－ － －	11.8	鏃身部・茎部先端欠損	長頸棘篦被―――	
23－25	新海神社西御陵	(13.2)	－ － －	－ 0.5 0.3	－ － －	8.6	鏃身部・茎部先端欠損	長頸棘篦被―――	
23－26	新海神社西御陵	(6.6)	－ － －	－ 0.5 0.4	－ － －	6.1	鏃身部・茎部先端欠損	長頸棘篦被―――	
23－27	新海神社西御陵	(7.7)	－ － －	－ 0.4 0.3	－ － －	4.4	鏃身部・茎部先端欠損	長頸棘篦被―――	
27－1	五　庵	(12.0)	－ 0.9 0.4	－ 0.5 0.3	－ － －	11.7	茎部先端欠損	長頸棘篦被片切刃造柳葉	
27－2	五　庵	(8.2)	－ 1.0 0.4	－ 0.6 0.3	－ － －	7.4	茎部先端欠損	長頸棘篦被片切刃造柳葉	

挿図番号	古墳名	全長(cm)	鏃身(cm)	筈被部(cm)	茎部(cm)	重量(g)	欠損状態	形式名	備考
27－3	五　庵	(11.7)	— 1.0 0.4	— 0.5 0.4	— — —	11.3	茎部先端欠損	長頸鏃筈被片切刃造柳葉	
27－4	五　庵	(12.7)	4.5 0.9 0.4	7.3 0.5 0.3	(0.9) — —	10.7	茎部欠損	長頸筈被片切刃造長三角	
27－5	五　庵	(8.0)	— 1.0 0.4	— — —	— — —	8.5	茎部欠損	長頸鏃筈被片切刃造柳葉	
27－6	五　庵	(11.2)	— — —	— 0.6 0.3	— — —	9.5	鏃身部、茎部先端欠損	長頸鏃筈被———	
27－7	五　庵	(11.5)	— — —	— 0.5 0.4	— — —	7.5	鏃身部、茎部先端欠損	長頸鏃筈被———	
27－8	五　庵	(4.6)	2.6 1.0 0.4	(2.0) — —	— — —	3.65	筈被部より下欠損	長頸鏃筈被片切刃造柳葉	
27－9	五　庵	(6.2)	— 1.2 0.4	— — —	— — —	7.2	筈被部より下欠損	長頸鏃筈被片切刃造柳葉	
27－10	五　庵	(5.6)	4.4 0.9 0.4	— — —	— — —	4.9	筈被部より下欠損	長頸鏃筈被片切刃造長三角	
27－11	五　庵	(5.4)	— 0.9 0.5	— — —	— — —	5.0	筈被部より下欠損	———片切刃造柳葉	
27－12	五　庵	(5.2)	3.0 1.0 0.3	— 0.7 0.4	— — —	4.2	頸部欠損	———切刃片刃箭	
27－13	五　庵	(10.8)	4.0 2.9 0.4	— — —	— 0.4 0.4	17.6	完　形	短頸筈被平造長三角	
27－14	五　庵	(12.1)	3.5 2.8 0.4	— — —	— 0.5 0.4	17.7	ほぼ完形	短頸筈被重抉平造長三角	
34－1	幸神1号	(6.9)	3.2 2.2 0.4	1.0 0.7 0.4	— 0.6 0.4	8.9	茎部先端欠損	短頸筈被重抉平造五角	
34－2	幸神1号	(8.1)	3.2 2.2 0.4	0.8 0.7 0.4	— 0.4 0.3	9.3	茎部先端欠損	短頸筈被重抉平造五角	
34－3	幸神1号	(8.4)	3.9 2.4 0.4	1.1 1.0 0.4	— 0.4 0.4	10.3	茎部先端欠損	短頸筈被重抉平造五角	
34－4	幸神1号	(10.5)	4.4 3.0 0.4	3.9 1.0 0.7	— 0.8 0.6	21.6	茎部先端欠損	短頸筈被両丸造三角	
48－1	幸神4号	(8.1)	3.3 3.6 0.4	3.5 0.8 0.7	— — —	30.7	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	
48－2	幸神4号	(9.0)	3.3 2.8 0.5	— — —	— — —	30.7	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	
48－3	幸神4号	(7.0)	3.2 4.2 0.6	— — —	— — —	24.6	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	
48－4	幸神4号	(8.3)	3.7 2.2 —	— — —	— — —	30.6	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	
48－5	幸神4号	(7.4)	3.3 2.6 0.5	— — —	— — —	22.1	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	
48－6	幸神4号	(7.8)	3.3 2.8 0.6	— — —	— — —	23.2	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	
48－7	幸神4号	(10.7)	3.9 3.0 0.6	— — —	— 0.6 0.6	28.0	頸部先端欠損	短頸鏃抉両丸造長三角	

挿図番号	古墳名	全長(cm)	鎬身(cm)	篦被部(cm)	茎部(cm)	重量(g)	欠損状態	形式名	備考
48－8	幸神4号	(9.7)	3.0 － －	－ 0.8 0.7	－ － －	20.2	鎬身一部類部先端欠損	短頸脇挟両丸造長三角	
48－9	幸神4号	(8.0)	3.8 1.8 0.4	－ － －	－ － －	11.0	類部先端欠損	短頸脇挟両丸造長三角	
52－2	幸神5号	(15.7)	1.4 0.9 0.2	11.8 0.6 0.5	3.0 0.4 0.4	14.1	ほぼ完形	長頸棘篦被関無端刃片刃造	
68－1	中原1号	(13.4)	－ － －	10.4 0.5 0.3	3.0 0.4 0.4	11.4	鎬身部欠損	長頸棘篦被―――――	
68－2	中原1号	(9.7)	－ － －	－ － －	－ － －	10.1	鎬身部欠損		腐蝕のため計測不能

第3表　幸神古墳群出土大刀・小刀・刀子一覧表

挿図番号	古墳名	材質	刃部長(cm)	幅(cm)	棟厚(cm)	茎長(cm)	茎厚(cm)	欠損状態	備考
14－1	新海神社新発見	鉄	35.5	3.0	0.8	4.5		切先欠損	大刀
15－1	新海神社新発見	鉄	16.2	1.4	0.4	8.2	0.6	完形	小刀　刃関・背関有す
15－2	新海神社新発見	鉄	10.2	1.3	0.4	5.2	0.5	完形	刀子　刃関・背関有す
15－3	新海神社新発見	鉄	9.6	1.6	0.4	－	－	茎部欠損	小刀
15－4	新海神社新発見	鉄	－	－	－	(7.0)	0.6	刃部・茎先端欠損	小刀　目釘孔有す
21－1	新海神社西御陵	鉄	21.0	2.0	0.5	7.5	0.4	刃先端破損	小刀
21－2	新海神社西御陵	鉄	(10.0)	2.0	0.5	7.0	0.4	切先欠損	小刀　関・目釘孔有す
21－4	新海神社西御陵	鉄	10.0	1.6	0.3	6.5	0.5	完形	刀子　関有す
26－1	五庵	鉄	65.0	2.7	1.0	4.6	0.7	茎先端欠損	大刀　鍔ついている
26－2	五庵	鉄	57.4	2.6	0.8	9.4	0.7	完形	大刀　刃関・背関有す
26－3	五庵	鉄	48.5	2.6	0.8	－	0.7	茎先端欠損	大刀　刃関有す
26－4	五庵	鉄	32.0	2.7	0.8	6.7	0.7	完形	小刀　目釘孔・刃関・背関有す
33－1	幸神1号	鉄	68.0	3.4	0.8	16.0	0.8	完形	大刀　鍔ついている
33－2	幸神1号	鉄	44.0	2.8	0.8	9.2	0.4	完形	大刀　鍔・柄間金具・目釘・鞘尻金具有す
33－3	幸神1号	鉄	25.0	2.7	0.8	8.0	0.5	完形	小刀　刃関・背関有す

挿図番号	古墳名	図	刃部長(cm)	幅(cm)	棟厚(cm)	茎長(cm)	茎厚(cm)	欠損状態	備考	
33－4	幸神1号	鉄	20.0	1.8	0.6	7.7	0.4	完形	小刀	目釘孔有す
47－1	幸神4号	鉄	22.7	1.6	0.8	－	－	茎先欠損	小刀	腐蝕進んでいる
47－2	幸神4号	鉄	10.5	1.7	0.8	(4.6)			小刀	腐蝕進んでいる
74－1	中原2号	鉄	32.2	2.4	0.8	6.4	0.8	腐蝕有り	大刀	目釘有す納間金具有す 柄

第4表　幸神古墳群出土耳環一覧表

挿図番号	古墳名	鍍金芯棒	外径(cm)	内径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形状	断面形状	備考
10－3	新海神社東御陵	合金 銅	2.8	1.6	0.7	0.8	21.3	ほぼ円形	ほぼ円形	金銀合金
10－4	新海神社東御陵	金 銅	2.0	1.2	0.4	0.7	9.0	ほぼ円形	長楕円形	金がまだらに付着している
16－1	新海神社新発見	銀 銅	2.7	1.6	0.6	0.8	17.5	円形	長楕円形	金鍍金が美しい
16－2	新海神社新発見	銀 銅	2.7	1.7	0.5	0.8	16.7	ほぼ円形	長楕円形	銀がまだらに付着している
24－1	新海神社西御陵	金銀合金 銅	2.9	1.5	0.7	0.8	21.4	楕円形	円形	内面中央は鍍金の裂け目がある
24－2	新海神社西御陵	－ 銅	3.1	1.7	0.6	0.8	5.1	ほぼ円形	楕円形	芯中空である
24－3	新海神社西御陵	－ 銅	3.1	1.5	0.7	0.7	25.3	楕円形	円形	
24－4	新海神社西御陵	－ 銅	3.0	1.6	0.7	0.7	20.9	楕円形	円形	
24－5	新海神社西御陵	－ 銅	2.9	1.5	0.7	0.7	19.4	楕円形	円形	
24－6	新海神社西御陵	－ 銅	2.4	1.5	0.4	0.4	6.9	楕円形	円形	小形
24－7	新海神社西御陵	－ 銅	2.2	1.5	0.4	0.4	4.9	ほぼ円形	円形	小形
24－8	新海神社西御陵	－ 鉄	3.0	1.5	0.7	0.7	10.2	楕円形	円形	
28－1	五廻	－ 銅	3.0	1.5	0.7	0.7	23.8	ほぼ円形	円形	
28－2	五廻	銀 銅	3.3	1.7	0.8	0.9	31.5	円形	ほぼ円形	銀粉まだらに付着
28－3	五廻	金 銅	3.0	1.6	0.7	0.8	23.5	ほぼ円形	円形	金まだらに付着
28－4	五廻	－ 銅	2.5	1.4	0.5	0.8	14.5	ほぼ円形	長楕円形	

挿図番号	古墳名	鍍金芯棒	外径(cm)	内径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形状	断面形状	備考
28－5	五　廻	一銅	2.6	1.8	0.4	0.3	4.5	楕円形	ほぼ円形	
28－6	五　廻	一銅	2.1	1.2	0.5	0.8	10.5	ほぼ円形	長楕円形	
41－1	幸神2号	金銅	1.5	0.8	0.4	0.5	4.6	円　形	長楕円形	金が1mmの点状に2箇所に付着している
47－6	幸神4号	一銅	3.0	1.5	0.8	0.7	21.7	楕円形	楕円形	
69－1	中原1号	一銅	2.6	1.6	0.6	0.7	18.3	円　形	楕円形	
69－2	中原1号	一銅	3.0	1.5	0.8	0.8	20.8	ほぼ円形	円　形	
69－3	中原1号	一銅	3.0	1.5	0.8	0.8	25.4	ほぼ円形	円　形	
69－4	中原1号	一銅	3.1	1.6	0.7	0.7	25.1	ほぼ円形	円　形	
69－5	中原1号	一銅	2.6	1.5	0.6	0.6	10.7	楕円形	円　形	

第5表　幸神古墳群出土玉類装飾品一覧表

挿図番号	古墳名	名称	材質	長(cm)	幅(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
6－4	新海神社中御陵	管　玉	碧　玉	2.1	0.8	2.75	完　形	
16－1	新海神社新発見	ガラス小玉	ガラス	0.6	0.8	0.45	完　形	
16－2	新海神社新発見	ガラス小玉	ガラス	0.6	0.8	0.55	完　形	
16－3	新海神社新発見	ガラス小玉	ガラス	0.5	0.6	0.25	完　形	
16－4	新海神社新発見	ガラス小玉	ガラス	0.8	0.9	0.6	完　形	
16－5	新海神社新発見	ガラス小玉	ガラス	0.7	0.8	0.45	完　形	
16－6	新海神社新発見	ガラス小玉	ガラス	0.4	0.7	0.35	完　形	
16－7	新海神社新発見	小　玉	褐　石	0.7	0.9	1.0	完　形	
16－8	新海神社新発見	小　玉	褐　石	0.7	0.8	0.55	完　形	
16－9	新海神社新発見	大　玉	絶　縁　岩	1.4	1.4	5.45	完　形	
16－10	新海神社新発見	管　玉	碧　玉	2.0	0.7	2.15	完　形	

挿図番号	古墳名	名称	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
16−11	新宿神社新発見	切子玉	水晶	2.3	1.4		5.6	完形	
16−12	新宿神社新発見	切子玉	水晶	2.3	1.5		7.8	完形	
16−13	新宿神社新発見	切子玉	水晶	2.3	1.5		6.25	完形	
17−1	新宿神社新発見	勾玉	水晶	2.2	1.2〜0.7	0.8	2.65	完形	
17−2	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	2.6	1.2〜1.3	0.9	4.2	完形	
16−3	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	2.7	1.4〜1.3	0.8	4.3	完形	
17−4	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	3.0	1.5〜1.3	1.0	4.9	完形	
17−5	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	3.1	1.5〜1.3	1.1	5.85	完形	
17−6	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	3.1	1.8〜1.7	1.2	8.35	完形	
17−7	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	3.1	1.9〜1.7	1.2	8.7	完形	
17−8	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	3.3	1.6〜1.4	1.2	7.45	完形	
17−9	新宿神社新発見	勾玉	碧瑪瑙	3.4	1.7〜1.5	1.4	7.1	完形	
28−7	五庵	ガラス小玉	ガラス	0.7	0.9		0.95	完形	
28−8	五庵	切子玉	水晶	2.0	1.3		4.55	完形	
28−9	五庵	管玉	碧玉	2.9	1.2		7.0	完形	
35−1	幸神1号	勾玉	碧瑪瑙	3.9	2.2〜1.8	1.4	12.2	完形	
35−3	幸神1号	勾玉	碧瑪瑙	3.8	1.8〜1.5	1.3	10.0	完形	
54−4	幸神6号	臼玉	褐石	0.7	1.3		1.6	完形	
69−6	中原1号	管玉	碧玉	2.8	0.9		5.1	完形	

第6表　幸神古墳群出土土器一覧表

上段 口径
中段 器高
下段 底径

幸神1号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
36－1	須恵器 蓋	摘み3.0 3.4 口 15.5	摘み部ボタン状を呈す。天井部から湾曲して裾に至る。口辺端部断面三角形を呈す。	ロクロヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺
36－2	須恵器 蓋	－ 2.9 口18.5	天井部平坦であるが、中央から裾部にかけて屈曲する。カエリを有す。	ロクロヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺
36－3	須恵器 蓋	摘み5.0 － －	摘み部皿状を呈し幅広い。	ロクロヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺
36－4	坏	13.4 4.0 5.3	底部から直線的に立ち上り、口縁端部で外反する。器厚うすい。	ロクロヨコナデ 摩滅している	内面黒色、十字の暗文であるとおもわれる	炭遺
36－5	坏	12.4 4.6 （6.0）	底部から内湾して立ち上る	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色	炭遺
36－6	小形甕	8.0 5.8 4.2	口縁部と胴部で最大径をもつ。口辺部「く」の字状に外反し短い。	口縁部ロクロヨコナデ 胴部摩滅	内面黒色 口縁部ロクロヨコナデ	玄室左側壁際
36－7	甕	14.0 3.7 10.5	底部から直立気味に開いて立ち上る。台部底径広く、器高短い。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺
36－8	須恵器 甕	15.0 4.2 10.7	底部から直立気味に開いて立ち上る。台部底径広く、器高短い。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺 須恵器の生やけ
36－9	須恵器 甕	11.3 5.4 8.5	低い高台が付き、口辺部に稜を有して大きく内傾し、口縁端部で短く直立している。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺
36－10	須恵器 坏	16.0 4.3 11.0	底径広く丸みある。直線的に開いて立ち上る。口径広く、器高短い。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺
36－11	須恵器 坏	14.2 3.7 9.7	底部へラケズリの平底で、口縁に向けて直立して開く。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	炭遺

幸神2号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
42－1	須恵器 横瓶	（8.5） （18.5） （13.0）	底径広く、直立して頸部に至る。口辺「く」の字状に外反する。	平行叩き目文の後ナデ調整がところどころにみえる。	同心円文叩き成形の後ナデ調整、ヘラのような凹み強く残る。	2層から裾床面まで破片で散乱して出土
42－2	須恵器 甕	－ － 15.0	底部丸底で最大径の胴中央に大きく開いて湾曲する。胴から頸部に向けて大きく屈曲する。	平行叩き目の中に網格子目状の叩き目がところどころに見える。	同心円文叩き成形の後ナデ調整、ヘラのような凹み強く残る。	2層から裾床面まで破片で散乱して出土
43－3	須恵器 甕	－ － 11.0	底径丸みをもつ。胴部に向けて大きく外反して立ち上る。	ロクロヨコナデ	同心円文叩き成形の後ナデ調整、ヘラのような凹みが強く残っている。	2層から裾床面まで破片で散乱して出土
43－4	須恵器 平瓶	（5.3） （12.0） （6.0）	底部から内湾して立ち上り、天井部丸みあるが平坦である。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	2層

幸神4号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
49－1	須恵器 瓶	(11.0) (2.0) (9.5)	——	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	羨道
49－2	須恵器 坏	(11.5) (2.0) (9.0)	——	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	玄室
49－3	須恵器 壺	— — —	口縁部は頸部から直立する。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	墳丘
49－4	須恵器 蓋	— (3.0) 口(17.0)	天井部から頂部にかけて偏平で浅い。天井部の器厚は厚い。口辺端部断面三角形を呈す。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	羨道
49－5	瓶	13.0 6.4 6.9	台部低い。直立気味に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色	玄室
49－6	坏	12.3 4.3 5.5	底部から内湾気味に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色口縁部まだらに吸着、底面にはない。	玄室
49－7	坏	12.8 3.9 5.5	底部から直線的に立ち上るが、口縁部で外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色 ヘラミガキまだらである	玄室
49－8	坏	12.8 3.6 5.5	底部から直線的に立ち上るが、口縁端部でやや外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色	玄室
49－9	坏	13.2 4.8 6.0	底部から直線的に立ち上るが、口縁端部でやや外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色。三本線が5単位・口縁部乱雑に巡る帯状の暗文ある。	玄室
49－10	坏	13.6 4.8 5.8	底部から直線的に立ち上るが、口縁端部でやや外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色。三本線が十字にあり口縁部乱雑に巡る帯状の暗文ある。	玄室
49－11	坏	15.3 5.3 6.0	底部から直線的に開いて立ち上る。人の墨書が逆に記されている。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色 きれいたミガキである。	玄室
49－12	坏	12.6 4.1 6.0	底部から直線的に開いて立ち上る。人の墨書が記されている。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色	玄室
49－13	坏	13.2 3.5 6.3	底部から直線的に開いて立ち上るが口縁端部でやや外反する。在の墨書が記されている。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色 きれいたミガキである。	玄室

幸神5号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
52－1	内耳土器	29.3 — —	口縁直下に耳が付いている。小さい耳である。	ロクロナデ	ロクロナデ	墳丘
52－2	須恵器 蓋	(16.3)	摘み部周囲欠損、ボタン状とおもわれる。天井部から直線的に裾部へ開く。口辺端部断面三角形を呈す。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	墳丘
52－3	須恵器 坏	(13.5) 3.5 (11.2)	底部広く縁が口辺下端部までおよぶ。口辺直線的に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	墳丘

外九間1号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
58－1	高坏	－ － －	高坏坏部と脚部の接触部で脚部円柱状である。	一部ヘラケズリ 粗雑な調整である。	坏部内面黒色	須恵
58－2	須恵器 坏	－ － (10.0)	底径広い。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	墳丘
58－3	須恵器 坏	－ － (8.0)	——	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	墳丘

外九間2号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
61－1	須恵器 壺	－ － (10.0)	台部低く底径広い。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	須恵
61－2	須恵器 坏	14.5 4.7 (8.0)	底部丸みがある。直線的に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	須恵

外九間3号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
63－1	須恵器 蓋	(15.8) － －	天井部偏平であるとおもわれる。口辺端部断面三角形を呈す。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	墳丘
63－2	坏 広口瓶	－ － －	瓶頸部に接合痕が残る。	ロクロヨコナデ 頸部下端に淡緑色の釉斑点状にある。	ロクロヨコナデ	墳丘

中原1号古墳

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
70－1	須恵器 蓋	摘み 3.3 － －	宝珠形摘みを有す。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	須恵
70－2	須恵器 蓋	摘み 3.3 1.7 口 14.9	器厚うすく、裾部まで偏平である。口辺端部断面三角形を呈す。	ロクロヨコナデ 天井部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	玄室右入口
70－3	須恵器 坏	13.2 4.8 7.5	底部から直線的に立ち上る。器高深い。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	玄室右入口
70－4	須恵器 坏	15.8 4.7 (8.0)	底部から直線的に開いて立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	玄室右入口
70－5	須恵器 坏	13.6 2.8 9.2	台部低い。底部から直線的に開いて立ち上る。口辺部歪みある。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	玄室右入口
70－6	坏	12.4 4.2 5.0	底部から湾曲して立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後ヘラケズリ	内面黒色 粗雑で歪ある。	玄室右入口
70－7	須恵器 甕	－ － 7.2	やや丸みのある底部。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ、ヘラ記号状の印ある。	ロクロ痕 釉一部分付着	玄室
70－8	小形甕	10.7 － －	最大径胴部にある。口辺部短い「く」の字状に外反する。	ロクロヨコナデ 煮こぼれ付着	ロクロヨコナデ お焦げ付着	玄室

中原２号古墳

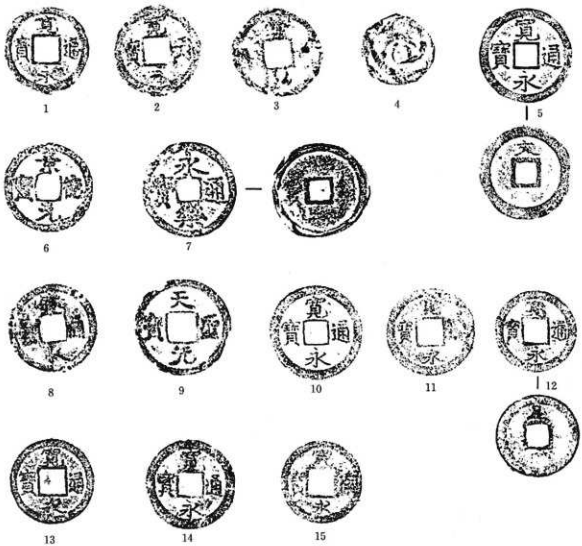
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整〈外面〉	調整〈内面〉	備考
75－1	須恵器 小形壺	－ (18.0) (8.0)	底部丸底で胴部上まで球状を呈す。	ロクロ痕が横筋に三条ある。	強いロクロ痕	羨道
75－2	坏	12.5 3.8 5.0	底部から直線的に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	ロクロヨコナデ	玄室入口
75－3	坏	12.8 3.7 5.3	底部から直線的に立ち上るが口縁部でやや外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色	玄室入口
75－4	須恵器 坏	13.0 3.4 6.5	底部から直線的に開いて立ち上る。口縁端部耳たぶのようにやや厚くなる。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	ロクロヨコナデ	羨道
75－5	須恵器 坏	13.0 3.0 10.0	底径広く、器高低い。 底部から直線的に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	羨道
75－6	須恵器 坏	14.0 4.4 7.7	平底で器高深い。底部から直線的に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	ロクロヨコナデ	羨道
75－7	坏	13.7 3.7 6.0	底部から直線的に開いて立ち上る。	ロクロヨコナデ 黒色口辺上面まである。 底部糸切り	内面黒色	玄室入口

幸神古墳群出土古銭

古銭は17点出土したが破損が著しいものを除いて15点拓影図に示した。新海神社中御陵古墳出土が４点、新発見古墳１点、五庵古墳２点、幸神１・３号で各１点、外九間１号古墳３点、２号古墳１点、中原１号古墳２点で計８古墳から出土している。

古い順からみていくと、五庵古墳出土の「景徳元宝」が北宋1005年に鋳造されている。次が幸神３号古墳出土の「天聖元宝」北宋1023年である。幸神３号古墳は現在古墳としての姿は影も形も全くなく松の木が植えられているのみで真平である。古くから古墳として登録されていた関係から抹消することもできないので従来のままになっていた。多分、分布調査をした昭和26年代は石室の石も残っていたとおもわれる。そのため古墳としての登録がなされたと判断される。今回の調査で、幸神１号古墳の北方に隣接する関係から１号の周溝を調査するため、３号古墳まで一直線にトレンチを入れて試掘を実施した。結果は、石室の石を全てかたづけた後に、掘りかえされてゴミが一面埋められていた。土中までも攪乱されていたのである。古墳であったことを示す唯一の遺物がこの古銭である。「永楽通宝」は、1408年の明銭で質が良いので基準的な銭貨として「永銭」といわれた。

「寛永通宝」は11枚出土した。共に寛文八年（1668）江戸亀戸村で鋳銭が開始された新寛永である。これは、明暦までの古寛永は寶の字の足が「ス」になっているが、新寛永は「八」になっていることですぐに判別できる。また、№５は、背文が「文」とある。明暦三年（1657）江戸城まで続ける大火があり、銭貨不足が生じてきたため寛文八年江戸亀戸村での鋳銭に対し、銭文は寛永通宝と同一にしたが、「寛」の裏に「文」をしるして寛文とし新銭の印にした。字もはっきりし直径、重さともに良銭である。また、№12は「足」の字が背文されている。これは、寛保元年（1741）下野国安蘇郡足尾銅山で鋳造した足尾銭である。この他寛永通宝の背文は、武蔵国江戸本所の小梅銭「小」、同江戸小名木川代官堀の小名木川銭「川」、陸奥国仙台石の巻の石の巻銭「仙」「千」、常陸国久慈郡太田木崎の太田銭「久」「久二」、同水戸の水戸銭「ト」、越後国佐渡郡相川の佐渡相川銭「佐」、摂津国大阪高津新地の高津銭「元」、肥前国長崎浦上上潤掛り稲左郷の長崎銭「長」、同長崎浜町築地・馬込郷「－」、武蔵国江戸深川十万坪の十万坪銭「十」などがある。背文は計12種類となる。



第78図　幸神古墳群出土古銭拓影図（1：1）

これらの「寛永通宝」は、№5、10、14が径2.4cmで、№2、3、8、11が2.3cm、№1、12～15が2.2cmと大小の差がある。重量の方も№10が4.15gで最も重く、№12、15が2.3gで軽い。文字もそれぞれ直径の大小によって変わり、さらに細字、太字などに細分される。古寛永に比較すると新寛永は細字となる。特に№1、10、12、14は細字である。

№4は、何度も何度も鋳写しを繰り返し行ったため、郭、銭文もなくなった粗悪品中の粗悪品である。銭形はしまいにはこのように変化する。これは、良質の銭を母銭に用いて鋳写しをすれば良いのだが、質の悪い[illegible]銭を母銭にして鋳写しを繰り返していると、小形で薄い№4のような銭形に変化するのである。

古墳群から古銭が出土するということは、中世、江戸時代の人々は古墳を祖先の墓としてお参りしていたとおもわれる。盗掘をする人々もいたが大切にしていた人々もいたのである。特に古寛永が皆無で新寛永ばかりであるということも、江戸時代後期の人々が多くお参りしていたことが理解される。生活が楽になったのか、あるいは祖先の霊を敬う信仰が広まったということも考えられる。

それに比べて現在使われているお金が一円も見当たらなかったということは淋しいことである。缶、ビン、ビ

第7表　幸神古墳群出土古銭一覧表

挿図番号	出土古墳	銭名（字体）	初鋳年（西暦）	時代	法量 直径cm	法量 重さg	背文	備考
78－1	新御神社中御陵	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.2	2.60		墳丘
78－2	新御神社中御陵	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.3	3.15		墳丘
78－3	新御神社中御陵	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.3	3.30		墳丘
78－4	新御神社中御陵	——		江戸	1.9	1.40		鋳写し繰返し銭形変形
78－5	新御神社新発見	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.4	3.20	文	
78－6	五　　庵	景德元宝真書	景德元年(1005)	北宋	2.3	2.25		玄室
78－7	五　　庵	永乗通宝真書	成祖永乗六年(1408)	明	2.4	3.30		玄室
78－8	幸神1号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.3	2.55		墳丘
78－9	幸神3号	天聖元宝真書	仁宗天聖元年(1023)	北宋	2.6	3.30		墳丘
78－10	外九岡1号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.4	4.15		墳丘
78－11	外九岡1号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.3	3.00		玄室
78－12	外九岡1号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.2	2.30	足	玄室
78－13	外九岡2号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.2	3.15		羨道
78－14	中原1号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.4	2.90		羨道
78－15	中原1号	寛永通宝真書	寛文1661年以降	江戸	2.2	2.30		羨道

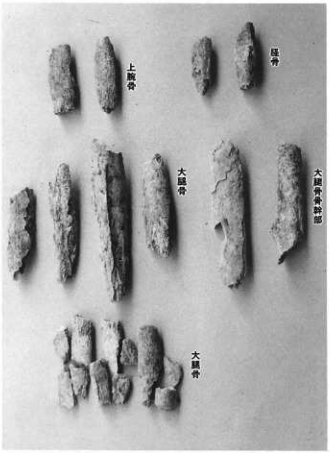
ニール、本、衣類などが玄室や墳丘に投げ込まれ、雑木、雑草に覆われた古墳を邪魔者扱いしているのである。豊かな時代に生きている私たちのなんともいえない心の貧しさを実感せずにはいられない。

遠い祖先が残した文化遺産を後世に残し、伝えていかなければならないとその責任の重さを痛感した調査であった。

（島田　恵子）

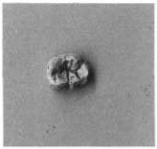
幸神古墳群出土の人骨・歯牙

新海神社西御陵古墳



骨皮質がやや薄く、骨が細身でかつ骨粗鬆の度合いが著明でないことから成人女性の人骨と思われる。

西御陵古墳



右下第一大臼歯（20才代）の他に左下第二大臼歯（30才代）と推察されるものも確認している。

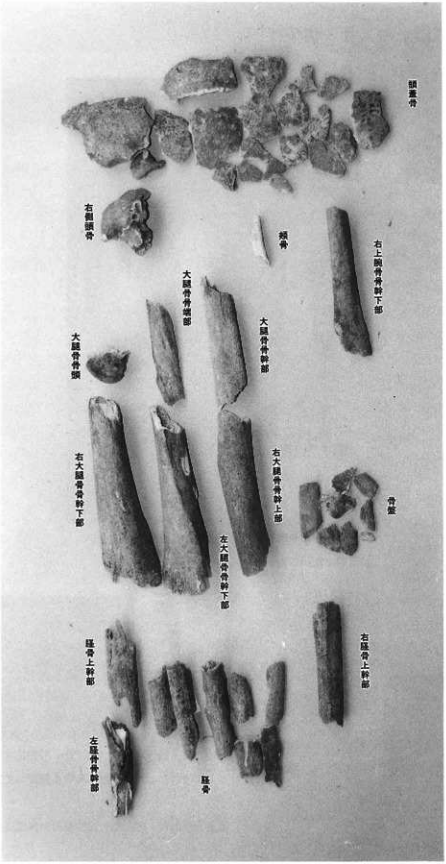
五庵古墳

右下第一大臼歯であり、咬耗はほとんどなく20才代以下の若年者と予想される。

出土人骨所見　佐久総合病院整形外科医長　町田　拓也

出土歯牙所見　佐久総合病院口腔外科医長　石井　宏昭

第79図　新海神社西御陵古墳・五庵古墳出土人骨（1：3）・歯牙（1：1）



骨皮質の厚みから見て成人男子の人骨と思われる。

第80図　幸神1号古墳出土人骨（1：3）

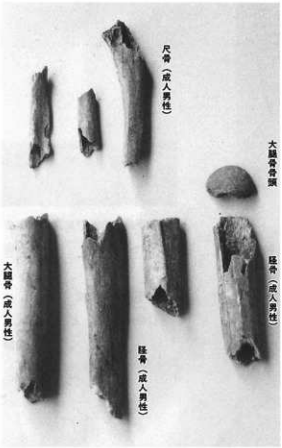
右下第一ならびに第二大臼歯
（20～30才代）　中・右側

左下第一大臼歯
（20～30才代）と思われる。
左側

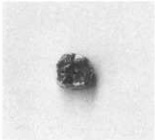
骨皮質がやや薄く、骨が細身でかつ骨粗鬆の度合いが著明でないことから成人女性の人骨と思われる。

左下顎骨であり、その咬筋粗面は広くかつ深い。これから比較的厚い咬筋の付着が予想される。下顎骨に植立された歯牙は第三大臼歯と思われその咬耗の程度から40才代前後と推察される。

第81図　幸神2号古墳出土人骨（1：1）・歯牙（1：1）



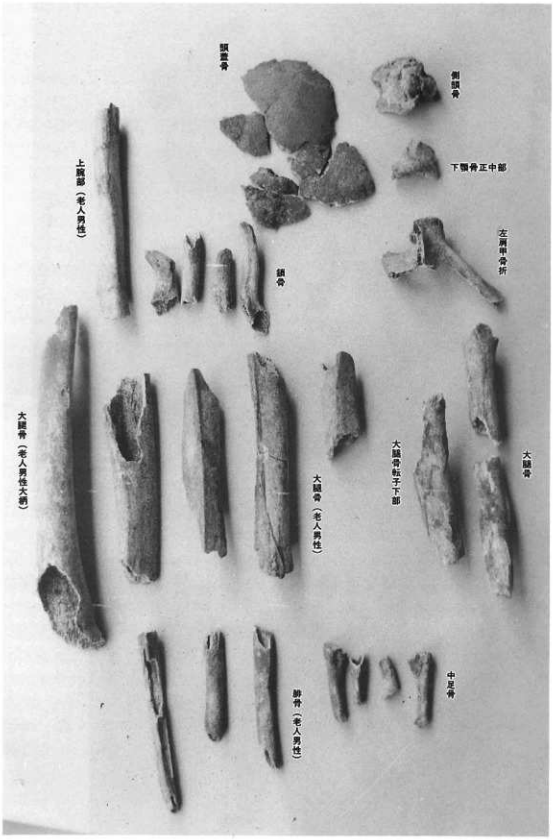
骨皮質の厚みから見て成人男子の人骨と思われる。



右下第一大臼歯は咬耗の程度により50才代のものと考えられる。

歯牙は左下第二小臼歯と右下第一ならびに第二大臼歯と思われる。咬耗の程度から左下第二小臼歯と右下第一大臼歯において30才以下の青年であると推察される。

第82図　幸神4号古墳出土人骨（1：3）・歯牙（1：1）



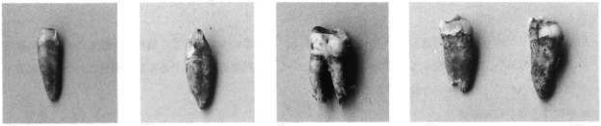
骨皮質の厚みから男性、骨粗鬆の度合いから見て老人、老人男性の人骨と思われる。

第83図　中原１号古墳出土人骨（1：3）

第84図　中原２号古墳出土人骨（１：１）

中原1号古墳

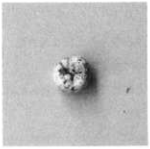
出土した骨は左の下顎骨であり咬筋粗面広くかつ深い。また、関節突起は現代人の約2倍の大きさであり、筋突起も同じく倍以上の大きさと厚みを有しており、かなりのボリュームの側頭筋が付着していたことが推察される。これらのことから現代と比較して食生活においてかなりの咀嚼力を有していたことが推察される。また、歯牙は左下第二大臼歯と思われ、咬耗が著しく60才以上の老年と考えられる。



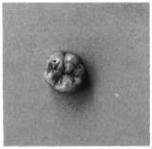
1　2　3　4　5

1　左下中切歯は咬耗の程度から50才代と考えられる。
2　右下犬歯は咬耗が著しく50才代以降と思われる。
3　左下大臼歯は咬耗の程度から40～50才代と推察される。
4　右下大臼歯と思われる歯牙の年齢を推定することは咬合面が欠損しており不明。
5　右下第二小臼歯は30才代前後と推察される。

中原2号古墳



左下第二大臼歯に咬耗はあまり観察されず20才代以下と考えられる。



右下第一大臼歯と思われるが、咬耗は軽度であり20代以下と推察される。

左上　右上

左右上顎の第一大臼歯と考えられ、咬耗が著しく推定年齢は60才代と思われる。

第85図　中原1号・2号古墳出土歯牙（1：1）

第4章　考　　察

第1節　古墳の構造

幸神古墳群は、どのような構造・性格をもった古墳であるか？現在まで全く調査が実施されなかった関係から、天井石が露出し玄室が見えるものは、横穴式石室の円墳であること、草木の藪の間から羨門が覗を出していたので羨門があること以外は分かっていなかった。さらに、礫がうず高く積まれていてヤックラ化されていた塚は古墳として登録されてはいたものの古墳であるかは不明であった。このヤックラに限り個人所有であるが、天井石、羨門が露出していた古墳は新海神社所有となっている。新海神社側では、いつの時代にどのような状況で神社の所有になったかは記録も伝承も残っていないという。また、古墳へ通じる「神社道」と呼ばれる道がありお参りもできたといわれる。明治初年の地租改正の折にいつの間にか取り込まれてしまったようである。現代人に比べて江戸～明治時代の人々は古墳巡りが出来るように道を設置して文化財を大切にしていたことに頭が下がる思いである。

第8表に示したように今回調査した古墳は計15基である。これ等の古墳群をごく簡単に分類しながらその構造と特徴をみてみたい。また、断っておかなければならないことは試掘確認調査であるため細部にわたる発掘調査ができなかったので一部分不明な箇所もある。

○地形的な分布と石室形式

A類──山腹の傾斜面に立地し、奥壁側最上段の傾面を削って平坦面を作り出し玄室を築く。石室形式は玄室と羨道の壁が一直線に連続している、横穴式無袖型石室形式をもつ古墳。

新海神社中御陵古墳・新海神社東御陵古墳・新海神社新発見古墳・新海神社西御陵古墳

A類の中で、東御陵古墳のみ柱状の羨門で最大高1.0mである。これは、奥壁高2.1mという深い玄室であるため羨門も高くなければ釣合いがとれないという構造面と関連している。

B類──平坦地に築造され、平面形が庖丁の形で玄室と羨道の壁が片方のみ連続している、横穴式片袖型石室形式。　五庵古墳

C類──広大な平地に築造され、平面形が羽子板状で、玄門によって仕切られるため羨道の幅が玄室より短くなる。横穴式両袖型玄門付石室形式をもつ古墳。

幸神1号古墳・幸神2号古墳・幸神4号古墳・幸神6号古墳・外九間1号古墳・外九間2号古墳

中原1号古墳・中原2号古墳・外九間3号古墳（羨道が破壊されているので推定である。）

C類の横穴式両袖型玄門付石室形式の中で、柱状の門が立っている古墳と門柱ではなく横積みにされた古墳とに二大別される。

C類a──柱状の玄門　幸神1号古墳・幸神2号古墳・幸神4号古墳・幸神6号古墳・外九間2号古墳

C類b──横積の玄門　外九間1号古墳・中原1号古墳　（羨門も横積で低い）

D類──玄門が付かず框石のみで羨道との仕切りとしている、横穴式両袖型石室形式をもつ古墳。

幸神5号古墳

○玄室の規模と形状

玄室は、第87・88図の奥壁の1枚石、左右側壁の石積み状態の規模から玄室の大小を見ることができること、第8表の玄室内面の幅から一目瞭然に知ることができる。まず、玄室内最大の規模は中原1号古墳である。奥壁

第8表　幸神古墳群調査古墳一覧表

( )内推定値

古墳名	墳形 主軸長 直交軸長	形式 主軸方位	石室外側幅(m) 全長	奥壁	中央	開口(羨門)	玄室内面幅(m) 奥壁	側壁	玄室高	羨門 高さ	備考
新海神社中御陵	(m) 円墳 10.5 8.5	横穴式無袖型石室 N−30′−E	3.7	1.5	1.8	1.2	1.5	2.0	(1.2)	(m) −	天井石一部欠落
新海神社東御陵	円墳 7.6 8.2	横穴式無袖型石室 N	3.2	1.1	1.6	1.4	1.4	1.9	(2.1)	柱状 右0.6 左1.0	墳丘崩落 天井石全て欠落
新海神社新発見	円墳 12.0 13.0	横穴式無袖型石室 N−16′−E	4.0	1.65	1.65	1.1	1.35	2.4	(1.1)	−	天井石全て欠落
新海神社西御陵	円墳 8.0 7.8	横穴式無袖型石室 N	4.4	1.4	1.8	1.4	1.55	2.0	(1.5)	−	天井石全て欠落
五庵	円墳 − −	横穴式片袖型石室 N	(5.5)	(2.8)	2.7	1.9	2.0	2.8	1.5	−	墳丘全くない。右玄門部崩れのため未調査
幸神1号	円墳 13.0 14.0	横穴式両袖型玄門付石室 N−13′−W	7.8	2.8	3.2	3.2	2.0	右3.0 左3.2	2.1	柱状 右1.30 左1.15	羨道天井石欠落
幸神2号	円墳 8.8 6.7	横穴式両袖型玄門付石室 N	5.8	2.0	2.2	2.2	(1.7)	2.5	1.6	柱状 右1.1 左1.2	羨道天井石欠落
幸神4号	円墳 7.0 6.0	横穴式両袖型玄門付石室 N−15′−E	4.6	2.3	2.6	2.2	1.6	右2.45 左2.30	(1.3)	−	羨道天井石欠落
幸神5号	円墳 5.8 7.6	横穴式両袖型石室 N	(3.5)	1.8	2.5	(1.7)	1.2	1.45	(1.4)	−	羨道〜羨門破壊
幸神6号	円墳 6.0 6.8	(横穴式両袖型玄門付石室) N	(5.2)	3.0	3.6	−	2.2	2.6	(1.6)	−	羨道〜羨門破壊
外九間1号	円墳 13.0 15.5	横穴式両袖型玄門付石室 N−20′−W	5.8	2.2	2.4	2.2	1.9	2.0	(1.8)	横積み 右0.6 左0.5	
外九間2号	円墳 6.4 6.8	横穴式両袖型玄門付石室 N−25′−W	4.7	2.2	2.8	3.1	1.6	2.1	(1.8)	柱状 右0.80 左0.85	墳丘崩れて奥壁、側壁露出
外九間3号	円墳 7.6 5.7	(横穴式両袖型玄門付石室) N−10′−W	(4.0)	2.8	3.0	−	1.6	右2.5 左2.4	(1.3)	−	羨道破壊
中原1号	円墳 11.5 10.5	横穴式両袖型玄門付石室 N	7.0	3.6	3.6	2.2	2.4	右3.6 左3.3	2.0	横積み 右0.30	左玄門部崩れのため未調査
中原2号	円墳 9.0 8.5	横穴式両袖型玄門付石室 N	6.0	2.7	(2.7)	3.2	(2.0)	(3.2)	2.3	柱状 右0.85 左0.90	玄門部未調査

新海神社新発見古墳

A類 横穴式無袖型石室

五庵古墳

B類 横穴式片袖型石室

幸神2号古墳

C類a 横穴式両袖型玄門付石室

幸神5号古墳

D類 横穴式両袖型石室

閉塞石

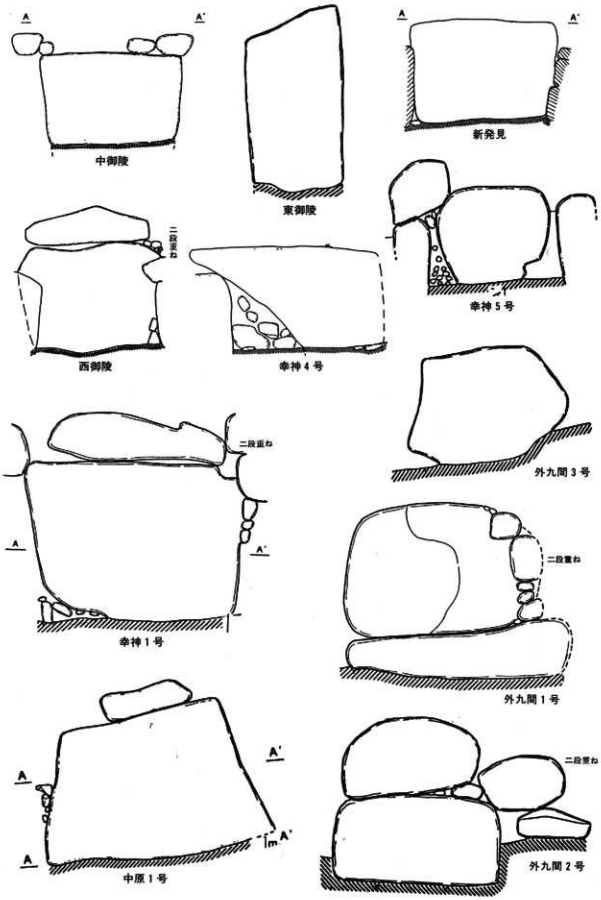
低い玄門

C類b 低い玄門（横積み）

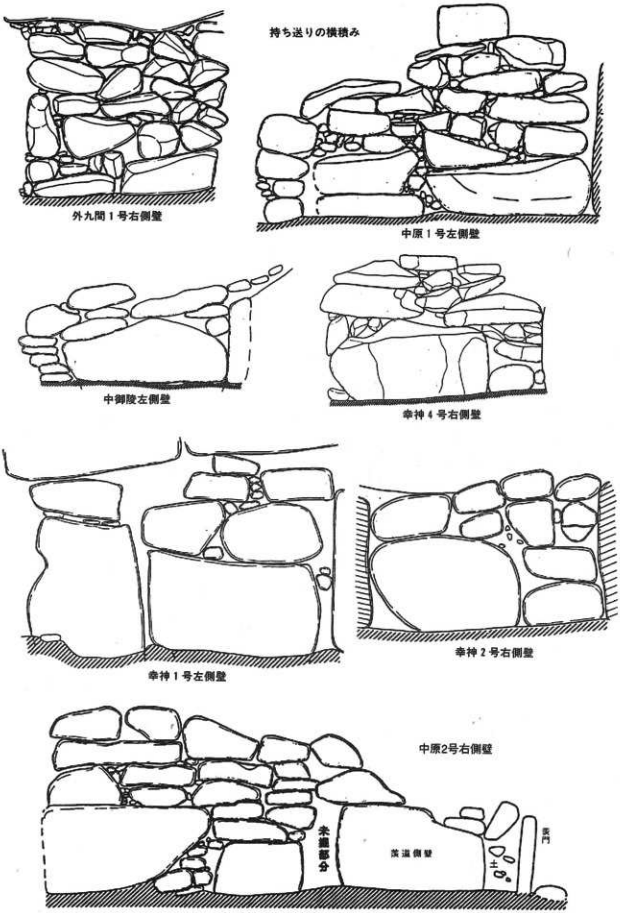
外九間1号古墳

C類b 低い羨門（横積み）

第86図 幸神古墳群の石室形式（1：120）



第87図　幸神古墳群の奥壁（1：40）



第88図　幸神古墳群の左右側壁の石積み状態（1：40）

幅2.4m、右側壁幅3.6m、左側壁幅3.3mで約8.3㎡の広さであり、天井石までの高さは2mで深い玄室である。

ミニ石舞台古墳を想定させられるように天井石、玄室、羨門が露出していた幸神1号古墳は、奥壁幅2m、右側壁幅3m、左側壁幅3.2mで約6.2㎡である。天井石までの高さは2.1mで楽々と玄室内を歩くことができる深い玄室である。

玄室と羨道の壁が連続している横穴式無袖型石室の玄室規模は、奥壁幅1.35～1.55m内外、側壁幅1.9～2.4m内外で長方形を呈し、2.5～3.7㎡と小形化する。

幸神5号古墳は、奥壁幅1.2m、側壁幅1.45mで、1.7㎡の面積を有し、四角形の最も小形の古墳である。

これらの玄室内棺床面に全く敷石が認められなかった古墳は、幸神1号・2号・5号、中原2号古墳の4基である。盗掘で攪乱されることもなく原形を保っていたのは、新海神社新発見古墳、西御陵古墳、幸神4号古墳の3基であるが、調査可能であったなら幸神6号、外九間3号古墳も敷石が原形を保っていることが、一部分の確認からみて可能性が高い。

確認調査が実施された本調査の玄室の特徴は、他地域の古墳と比較して正方形もしくはそれに近い形状であることがあげられる。正方形は幸神5号、外九間1号の2基である。長方形は新海神社新発見、中原2号古墳で奥壁幅と側壁幅の差が1～1.2mを測る。その他古墳は、奥壁と側壁の幅は0.4～1mである。佐久市三河田大塚古墳は、奥壁2.6m、側壁の幅6mとその差が3.4mで長方形である。このように玄室長さと奥壁幅の差が3mにもおよぶ玄室形態の古墳と比較すると、本調査の幸神古墳群は40～80cmの小さい差である。正方形に近い玄室であるといえる。1mの差が生じている幸神1号古墳は、奥壁2m、玄室長さ3.0～3.2mで、奥壁が幅広いことから正方形に近い部類に入るとおもわれる。

○奥壁、側壁の石積み構造

奥壁に使用した1枚石の状態を第87図に示した。幸神1号古墳、中原1号古墳は、横幅2.0～2.4m、高さ2m、厚さ0.5mを測る板状の溶結凝灰岩を立てている。両者共に上面は偏平であるが、側面、下端部は自然のままである。天井石を被せた隙間に厚さ30～50cmの石を横積みにして空間を埋めている。中原1号古墳はこの一部分が抜きとられて墳丘に崩落していた。西御陵古墳の奥壁も同様の構造である。また、二段重ねも外九間1号古墳は下段に低い石を置いて土台としている。反面、外九間2号古墳はあまり大小の差がない石を積み重ねている。

東御陵古墳の奥壁は、高さ2.1m、幅1.1m、厚さ25cmの細長い石を縦方向に長い面をみせて立てている。従って玄室の幅は狭いが深い。崩落していた関係から調査できなかった中原2号古墳は奥壁上段に厚さ85cmの石を重ねた2段積みであるが2.3mと最大の深さを有した玄室である。

中御陵、新発見古墳は横に長い1枚石を上面平にそろえて使用している。上にもう1段積んであったかは不明であるが、天井石を被せて隙間ができた場合は中御陵古墳の図のように小さい礫で隙間を埋めたものとおもわれる。幸神4号・5号、外九間3号古墳は溶結凝灰岩の板状の自然石を使用し、寸足らずの箇所は礫と石で埋めている。

左右側壁の代表例を第88図に図示した。外九間1号古墳と中原1号古墳の側壁は、最下段にやや大きな石を土台として置き、その上段に比較的小さな石を横積みに6段重ねている。隙間には小石を入れて支えとしている。図では持ち送りの状態を示せなかったが、巻頭図版4、図版三の写真を参照していただきたい。

持ち送りでない壁は、下段に大形の溶結凝灰岩を使いその上段に四角形、長方形、上下面偏平な石を横積みにしている。幸神1号古墳は大形石を2枚使い大半を埋めている。中原2号古墳は図版二を参照されたい。上面偏平に整えた石をきっちりと積み重ねた見事な壁をつくり出している。

以上が奥壁、側壁の状態である。奥壁は鏡石といわれる板状の大形石を1枚用い、また、側壁も比較的大形の

石を使う構築方法は古墳終末期に多い特徴であるといわれる。これらの石材は石山から剝がす時に全く手を加えずに持ち出したのではなく、板状節理の石山を踏査してみるとある程度手を加えていることがわかる。また、大きな石を剝がしている時にできた板状の四角形の石や偏平の小さい石を上手く利用している。

○玄門と閉塞状態

玄門と玄室の閉塞状態を下の写真に示した。幸神４号古墳は、柱状の玄門の上に楣石が横に架かっている。楣石は溶結凝灰岩の割り石で面取りもされていない。閉塞は、玄武岩、砂岩、溶結凝灰岩を積み重ねて土で隙間を埋めている。

外九間１号古墳は、玄門は低くその上に逆ハート形の大形石１枚で閉塞している。中央は、横80cm、高さ60cmの空間がある。この大きな石で閉塞をしていたので出入りができなかったのか、この古墳に限り羨道の天井石が残り原形を保っていた。しかし、盗掘は天井石直下の左側壁を取りはずして玄室に入り込んで、玄室内は棺床面まで撹乱されていた。また、玄門がこのように低い場合はやはり羨門も同じように低いことが特徴である。

羨門の特徴は、石の面が広い部分を正面に向けている。これは美しさを意識してのことであると考えられる。

玄門の閉塞状態（幸神４号古墳）

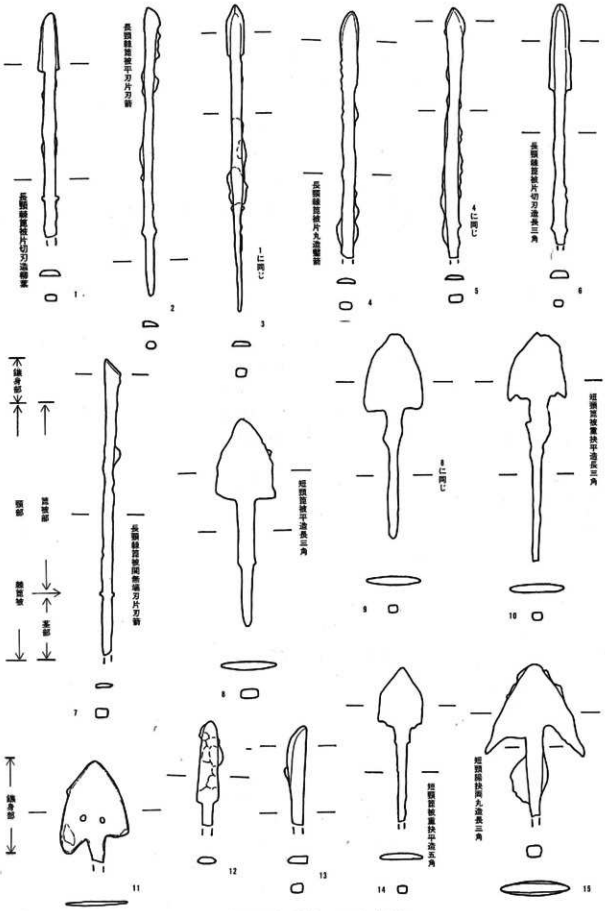
低い玄門の上に築いた閉塞石（外九間１号古墳）

第２節　鉄　鏃

幸神古墳群から出土した鉄鏃の型式を第89図にまとめた。これは、「埼玉における古墳出土の鉄鏃の基礎的型式分類と年代観」(1983　田中正夫・瀧瀬芳之）を参考に、佐久地域出土の鉄鏃をも参照しながら年代の位置付けを行った。

古墳から出土した他の遺物は、主に古墳時代終末期に比定され７世紀中葉から～８世紀にに作られたものが多い。耳環、玉類、刀などからの細分は変化がないためかあまりなされていないので、研究の進んでいる鉄鏃に頼らざるを得なかった。不十分な面はたくさんあるが一応の目安になり古墳構築の年代をはかる基礎となり得たことは大きな成果といえよう。

幸神古墳群出土の鉄鏃を型式と年代別にみていきたい。第89図１・３は、頸部が長く、鏃身部は上面が片切刃造りで、下面は平である。篦被は関ではなく棘篦被（とげのかいつぎ）であることから、長頸棘篦被片切刃造柳葉に分類される。出現期は、６世紀中葉から７世紀初頭とされている。２は、鏃身部の刃が左側の片側にのみ付いている片刃である。鏃身下面が平であることから、長頸棘篦被平刃片刃箭（や）で６世紀中葉から７世紀初頭に多い。４・５は、鏃身と頸部との境がはっきりしていないもので、刃は下面が平で上面が丸造となる。長頸棘篦被片丸造鏃（のろや）に分類され、６世紀末～７世紀初頭に比定されている。６は、鏃身部が長いので長頸棘篦被片切刃造長三角となる。棘篦被で片切刃造の長三角形鏃はあまりなく、片丸造、両丸造などの造りである。形態から判断して６世紀中葉から７世



第89図　幸神古墳群出土の鉄鏃型式

紀初頭に比定されよう。12は、6の鏃身部である。

8・9は、頸部が短く鏃身部の上下面は平に近いので、短頸篦被平造長三角形となる。10、11は、腸抉(ちょうけつ)の抉りの部分が波状で重抉(かさねえぐり)とおもわれる。抉りは小さいが重抉りをあらわしていると解される。この形態は、昭和61年に調査した入沢の五霊西12号古墳から出土している。これらの平造長三角形鏃は6世紀末期から7世紀中葉までみられている。

7は、長頸で棘篦被を有し、関がなく刃は端刃片刃箭である。長頸棘篦被関無端刃片刃箭で7世紀～8世紀に位置付けられている。13も関無端刃片刃箭であるが、断面が厚い。

11は、短頸腸抉両丸造の鏃身部に孔が穿たれている。矢ばさみを付けるための孔である。15は、短頸で鏃身部が両丸造長三角で抉りが逆刺(さかとげ)のない腸抉であることから、短頸腸抉両丸造長三角の形態となる。これは、7世紀から8世紀以降までみられる。

出土した土器は、儀式を行ったと考えられるように羨門入口付近、玄門入口付近に多かった。これらの土器は8世紀から9世紀に比定されるもので、とくに幸神4号古墳の土器は平安時代前半に比定される器である。このことは最終の追葬が平安時代までおよんでいたということである。このような状況から古墳の築造年代を知る資料に乏しく、古墳の構造、装飾品の編年などとも合わせて、鉄鏃の形態から築造年代を推し測る試みとなった。

新海神社中御陵、東御陵、新発見、西御陵古墳出土の鉄鏃は、1～5・8・11で長頸棘篦被片切刃造柳葉（1・3）、長頸棘篦被平刃片刃箭（2）、長頸棘篦被片丸造鏃前(ふくさき)（4・5）、短頸篦被平造長三角（8）などに型式分類される。年代は6世紀末期から7世紀中葉に位置付けられる。古墳の構造が横穴式無袖型石室形式であることから、従来いわれているように臼田町においては無袖型石室の古墳が最初に構築された可能性が高い。

五鹿古墳からは、長頸棘篦被片切刃造長三角（6・12）、短頸篦被平造長三角（9）、短頸篦被重抉平造長三角（10）が出土し、6世紀後半から7世紀初頭に比定される。古墳の構造は平地へと下り横穴式片袖型石室である。

幸神古墳、外九間古墳、中原古墳群では、奈良時代から平安時代にかけての土器が出土している。鉄鏃もそれに合わせたように新しくなる。幸神4号古墳出土の鉄鏃は、短頸腸抉両丸造長三角（15）、幸神5号古墳出土の長頸棘篦被関無端刃片刃箭（7）で、共に7世紀～8世紀以前まで作られている。幸神1号古墳からは4点出土したが、短頸篦被腸抉平造五角（14）で6世紀～7世紀に多くみられる。古墳の構造は、玄門と羨門に多少の変化はみられるが古墳の型式は、横穴式両袖型玄門付石室と玄門付でない（幸神5号）古墳に分かれる。

このように古墳築造の状況を鉄鏃の編年からみてきたが、構造からみると無袖式――片袖式――両袖式に変化しているようである。傾斜面に築かれた古墳は無袖式で、平地型は片袖式・両袖式となるが平地型はそのほとんどが両袖式であるといえる。古墳は新海神社周辺から築かれ、その後下に降りて原、大奈良、入沢地域へと拡大したと考えられる。

第3節　古墳分布、構造からみた古代社会

新海神社古墳群の4基の古墳はいずれも横穴式無袖型石室形式で、土器の出土が全くみられず武器、装飾品に限定されていたが、鉄鏃の型式から構築年代をおおよそつかむことができた。いずれも6世紀後半から7世紀前半に比定されるものである。無袖型石室の古墳はこの4基のみで、その他平地に築造されている古墳は形式が異なる。新海神社周辺には、宮代1号古墳、2号古墳があるが形式はわからない。昭和40年3月調査が実施された英田地畑古墳の玄室の規模は、奥壁幅1m、左右側壁幅2mを測る長方形の玄室である。図を見ると玄門があったように見受けられるが断面図に玄門が記されていないのではっきりしないが、羨道の側壁が玄室から内側に入るのでおそらく両袖型であろうとおもわれる。遺物は、漆手刀・直刀・刀装具・鉄鏃・三輪玉・須恵器埦・土師

器坏・人骨が出土している。いずれも奈良時代に比定されるものである。残念ながら鉄鏃は腐蝕がすすんでいて形が分からないようで図面化されていない。

以上のように新海神社周囲の古墳は、神社の裏山に築造された無袖型の古墳群が古いと考えられる。後に新海神社が創建される下地的環境がすでに古墳時代から培われていたのである。また、平成4年緊急発掘調査を実施した新海神社東方の宮東遺跡は、平安時代中期前半の単一集落で8軒の住居址を検出調査した。復合していたのは縄文時代中期後半～後期の集落であり、古墳との関わりはない。この集落は鞭の羽口の出土と小鍛冶の施設を伴った住居址が検出され、小鍛冶の技術をもった集団の集落であることが判明した。古代東国では群馬県が製鉄技術が最も盛んで中心的存在であったことから、田口峠を越えて文化がいち早く入ってきていると考えられる。さらに群馬県では墳輪を伴った古墳群が多く古代社会の隆盛が伺える。このことからも田口地区に臼田町で最も古い形式の古墳築造がなされていることもおのずと理解されよう。

これらの古墳を築造した人々の生活基盤は、雨川右岸の上宮代から明躰、日向大工原、丸山地区へと広がり、左岸は、岩淵、山口、川原宿までの範囲が想定される。遺跡は、古墳時代～平安時代にあたるが、発掘調査が実施されていないのでどの位置に古墳を築造した人々の集落があるかは明確にわからない。ただその時代の土器片が表面採集されていることは集落の存在を示すものである。

田口原、大奈良地区は雨川右岸の徴高地上に形成された広大な平坦地である。同地区共に縄文時代から奈良・平安時代まで連続する臼田町最大の面積を有する遺跡である。古墳群は今回調査した10基の他に、すぐ東方の割塚、明法寺地籍に各1基、北方の鍛山に3基、清川、山崎に各1基の計7基が所在している。明法寺から東方へ300mの地点に五庵古墳があり、調査の結果、片袖式であることが分かった。

これらの古墳群を築造するにあたり選地に関してある一定の決まりがあることに気が付いた。畑作、稲作の耕作の場所、集落の場所、古墳の場所というように別れているのである。古墳群には西限があるかのようにきっちり西側への構築の限界線が決まっている。幸神1号古墳～6号古墳はほぼ一例に東西に並び、外九間1号・3号、中原1号・2号古墳は隣接している。地籍別の幸神・外九間・中原古墳の西側はほぼ一直線に結ばれているのである。それより西側へは1基の古墳も存在していない。

さらに、構造の変化もかなりこの地籍別の古墳に関連しているといえる。幸神1号・2号は全く構造が同じで大きさに違いがみられるだけである。この2基は設計者が同一人物であると考えられる。また、小形の2号古墳の被葬者は女性であった。大形の1号古墳の被葬者は、古墳の立派さに匹敵するような大刀2振、小刀2振が出土している。集落の主長級の人物が埋葬された墳墓であろう。

成人男性の骨が出土した幸神4号古墳は、羨門の構造、玄室が地山層より下にかなり掘り込まれていることなど幸神1・2号古墳と異なる。幸神5号古墳は玄門がなく正方形の玄室で設計が違う。

外九間1号古墳、中原1号古墳は左右側壁が小さい石で持ち送りの石積みがなされ、玄門が柱状ではなく横積みされ、羨門も同様である。設計者が同一人物である可能性が高い。

外九間2号古墳は小形であるが、楣石、羨門、玄門が幸神1・2号古墳に酷似している。中原2号古墳も類似点は多いが、玄室が細長くて深いことは特殊であるといえる。しかし、微妙な違いはみられるが古墳形式は共に両袖型で、出土遺物から構築年代を推定すると、幸神1号古墳が6～7世紀代、その他は7世紀代に構築され、8～9世紀代まで追葬されている。

古墳構造の違いから設計者を分けると、無袖型、片袖型、両袖型の三大別され、さらに両袖型に2～3人の設計者の違いが考えられる。このことは、氏族のグループ分けに通じるようにおもわれる。後期古墳の横穴式石室の円墳は家族墓として時を経ながら次から次へと数人埋葬されたという。しかし。古墳に埋葬される家族は一部

の氏族に限られていたとおもわれる。それは、千曲川左岸の殺倉地帯である切原地区に全く古墳がみられないことである。この地区に居住した人々は古墳を作らないで土中に穴を掘って埋葬したとしか考えられない。筆者はこの謎を解く第一の原因は石室を作る石材が無いという見解を示した。[註1] さらに考えられることは、やはり首長級の人物は石材の豊富な幸神古墳群、入沢古墳群に埋葬されたと考えたい。あの巨石を千曲川を渡って運ぶことは大変なことでよほどしっかりした橋がなければ運ぶことはできないであろう。反面、西側地区の山石や千曲川の安山岩を使って小さな古墳を築くということも全くされていない。切原地区には古墳時代～奈良・平安時代の遺跡は44地点にのぼる。これほど遺跡数が多い地区に古墳が全くないことは考えられないことである。先にみた古墳築造の選地に一定の地区が限定されていたことにもこのヒントがありそうな気がする。

昭和63年実施された原遺跡の発掘調査は、古墳群から170m西方の地点から古墳時代末期～奈良・平安時代にかかる集落址の一部を調査した。今回の古墳調査で淡門付近に多く出土した土師・須恵器はこの集落の時代と一致する。最終的な追葬はこの集落の人々である。しかし、古墳築造の7世紀初頭の住居址はこの調査からは検出できなかった。ほんの一部分の調査であったが住居址密度の高さ、周辺の土器表面採集により大集落の存在は予想されている。

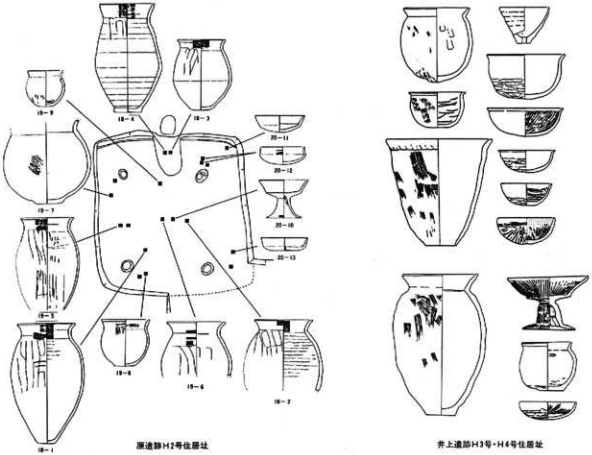
また、昭和48年度圃場整備工事の際緊急発掘調査した三分の井上遺跡は、古墳時代後期の大集落址が予想されたが調査の取り組みが遅れたため、4軒の住居址の検出にとどまった。この集落は古墳築造当時のものである。井上遺跡は、沖積地の微高地に形成された縄文時代草創期の神子柴型石斧、前期初頭の尖底土器、後期堀之内式土器、弥生時代後期初頭の土器、古墳時代後期、平安時代までの遺物が出土している大遺跡である。ここに小規模ではあったが古墳を築造した人々の集落を調査できたことは幸いであったといえる。

大奈良遺跡、原遺跡、井上遺跡は共に沖積地の微高地に形成されている。その西方は沖積地で水田が一帯に展開している。微高地に集落をつくり、沖積地は千曲川付近まで水田を開いている。この集落の代表的な人々の墓が今回調査した古墳群である。さらに、千曲川左岸集落の首長たる人々の墓であったかもしれない。

淡門から淡道に入るところに、須恵器埦・杯・蓋などが出土したのは、幸神1号古墳、外九間2号古墳、中原2号古墳があり、玄門付近の玄室内から出土したのは中原1号古墳と玄室内に9個体の土師器杯があったのは幸神4号古墳である。この古墳は、⅄と書かれた杯と他に2点の墨書土器が出土している。こうした土器出土状態は、死者に飯食を供して現世と決別させる黄泉戸喫(よもつへぐい)の儀礼の痕跡であるとおもわれる。また、古墳淡道から玄室内の清掃を行った時は、「イザナギノ命が最愛の妻に先立たれて悲しみの日々を送っていたが、どうしても会いたいという気持ちがおさえ切れなくなり、妻のいる黄泉(よもつくに)国の地下の世界へと降って行った。暗黒の夜を思わせる夜見之国(よるのくに)、別名は地下の国を意味する根堅洲国(ねのかたすくに)、死者の世界で生きた者の来ることをかたく禁じて、その御殿は、冷たい石の扉がしっかりと現世との間を鎖(とざ)していた。[註2]」この描写はまさに淡門をくぐり、地下の世界の道である淡道を通って、玄門と玄門の間を石で閉塞している古墳石室の様相を語っているといえる。石の扉で閉ざされた御殿、つまり玄室の中に埋葬されていた被葬者は時間が経つにしたがって、その体は腐蝕をはじめ身体中に蛆(うじ)がわき出ていたと考えられる。その姿を見てしまった気味の悪さを表現しているのである。古事記で読んだ黄泉国のこのシーンはまぎれもない古墳埋葬の状況であることが、粉状になった人骨を見ながら改めて思い知らされたのである。石室の清掃、試掘確認調査をしなければとうてい実感としてこのシーンは理解できなかったであろう。

それではここで、古墳時代の人々の暮らしをみてみよう。

縄文時代から継承されている竪穴住居内の炉のある生活様式から、5世紀に入るとカマドが住居址の北壁に築かれるようになった。これは渡来人によってもたらされた新しい文化である。第90図井上遺跡・原遺跡出土の土器にみられるように、把手の付いた蒸器、それとセットになる長胴化した甕がある。銘々の器である埦や杯は古



第90図　原遺跡・井上遺跡出土土器

墳から出土しているのですでに紹介してあるが、供献用の高杯は破片の出土であるため、第90図を見ていただきたい。縄文時代に比べると質素で数少ない台所道具である。

弥生時代後期日本最高地点の稲作限界ラインに水田を開発した臼田町の偉大なる弥生人は、その足跡を大奈良・原遺跡、その南限でもある井上遺跡、丸山・勝間原遺跡に残している。初期の水田からさらに拡大した稲作は食糧の安定したことによって人口も増加し、群集墳に示されているように階級の分科がはっきり現れるようになった。群集墳は家族墓であるといわれるが、世帯共同体の一戸毎に古墳を所有していたとは考えられない。臼田町に所在する古墳は計50基であるが、当時50戸だけの世帯共同体があったとはおもえない程に遺跡の数も多い。千曲川右岸で32遺跡、左岸も32遺跡で計64遺跡である。一つの集落に一つの古墳を有していたと考えられなくもない。古墳時代の歴史的背景は第５節に記述されているので詳細はゆずるとして、竪穴住居に住み古墳を築造した人々は、鉄製農具の普及により溜池や治水・灌漑施設工事など集落全体で労働をして開発を行ったであろう。大奈良・原・井上・勝間原遺跡の人々は微高地に集落を形成し、一段下った沖積平野に水田を耕作していたと考えられる。勝間原遺跡と接している丸山遺跡では、長軸側6.8m、短軸側4.6mを測る掘立柱建物址が検出されている。穀倉とおもわれる高床の建物址は南佐久郡では初見であった。奈良時代に比定される高床式穀倉であるが、穀物を収納する倉庫が必要なまでに生産が増大したことを示している。しかし、農民の生活は決して豊かではなかった。収穫した穀物の大半は天皇の屯倉に納めなければならず、やがて、唐の政治体制を模倣した律令体制によってより強化されていくのである。古墳築造はそうした時代の反映にほかならない。　（島田　恵子）

第4節　五庵古墳出土の薙鎌

薙鎌信仰の発生

古墳の玄室から鉄鏃・刀装具と並んだ状態で薙鎌が出土した。薙鎌は、特に「諏訪信仰」に関わりが深く、現在は供奉具・招代・悪代・生贄・宝物・御霊代等とされているものである。

薙鎌の名称の「薙」は、文字そして言葉から解釈すると「風波が静まる」「おだやかになる」の「和・凪」、草などを横ざまに打ち払う「薙ぎ払う」の「薙」、または、蛇を意味する「ナギ」等々と推定される。薙鎌の「薙」が草を薙ぎ払う「薙」であったり、蛇を意味する「ナギ」であったりすることは、日本武尊が東征の折に野火から逃れるために使用し、後に熱田神宮に祀られた草薙剣（天叢雲剣）は、景行記「剣叢雲自らぬけて草を薙ぎはらう」ともあるように、草を薙ぎ払ったところから「草薙」と呼ばれたとすること、また剣は八岐大蛇から取り出されたものであり、「草」は「臭」、「ナギ」は「蛇」であるとすることもその一例である。

このうち、「草を薙ぐ」からの発生した薙鎌は、開拓農耕信仰の象徴となった。『薙鎌考』に「『能登国鹿島郡誌』（中巻）によると、古までは、氏人それぞれ鎌を打ち込み、周廻り二丈の神木は龍鱗のように見えたと……薙鎌が蛇体・鳥体・魚体といろいろに解釈されている中で、開拓農耕神としての蛇鱗が、諏訪祭神信仰の末端では行われていたものと考えていいようである」とあり、『諏訪市の文化財』には「薙鎌は諏訪神社の神器である。もと草を刈り穂をつむ道具であったと思われ、開拓の象徴であった」ともある。

「風を薙ぐ」からの発生した薙鎌も、もちろん開拓農耕信仰ともなった。『日本の民俗・長野』に「二百十日に村で風祭りをする。……各戸で強い風の来る方へ向けて、竿につけた鎌を立てる。これを風切り鎌という」とあるように、この民間信仰行事は現在も行われているところがあるようだが、諏訪信仰との関わりでは『諏訪市史・中巻』に「諏訪大社上社の御射山御狩の神事は、鎌倉・室町幕府や信玄そのほかの武将等からも下社の御射山とともに、特別な崇敬と庇護を受けた狩猟神を祀るものとされていたが、近世になると御射山の山宮に鎮まる神は、虚空から届く太陽の光であり熱でありそして風雨を司る神であり仏である虚空蔵菩薩（国常立命）とされた。上社御射山の古絵図の中に、神長官・禰宜太夫・権祝・擬祝・副祝の五官祝の幄屋はあるが大祝の庵がなく、《風祝御庵》があるので、大祝が風祝の性格をもって祭事にあたったのではないかとされ、五穀豊穣を祈願する祭事とも考えられている」とあり、また『諏訪大神の信仰』には「諏訪大社の風祝は平安時代末期にもその存在が確認できる。当時の歌人藤原清輔の書『袋草紙』に〈信濃国は極めて風早き所也。仍て諏訪の明神の社に《風ノ祝》と云うものを置きて是を春の始に深く物に籠居て、祝して百日の間尊重するなり、然れば其年凡そ風閑にして農業の為吉也〉とあり、また『袋草紙』の藤原俊頼の歌にも〈信濃なる木曽路の桜咲きにけり風のはふりにすき間あらすな〉がある」とある。

薙鎌のさまざまな形状

この薙鎌、形状からは鎌・龍蛇・鳥・烏等と考えられている。『御射山の話』には「現在遺る薙鎌には、烏や獣の形状を具えたものが相当多く、旧御射山の遺物は、二つとも鳥の形状であります。これは諏訪神社が室町期に至るまで、盛んに鳥獣の御贄を掛けた為め、之を象るに至ったものであります」とあり、『薙鎌私考』には「中土の薙鎌は鉄製で、龍か蛇か又はタツノオトシゴ、又は鶏の頭の様で、新しくなるにつれ鶏頭状になっているとの報告がある」「薙鎌は生贄を現しており、それは初現の段階から背にみられた羽根状の刻み、続いて現れる目を表す円孔、嘴の形状など、鳥・龍・烏など、ともかく動物を表現していることで理解される」とある。

形状が龍蛇とされるのも諏訪信仰との関わりが考えられる。『諏訪大社』（信濃毎日新聞社刊）には「諏訪明神のご本体が大蛇だとか龍だとかということは、諏訪信仰の聖典『諏方大明神画詞』に数回載っている。弘安二年

〔1279〕六月ご神事のとき、日中に大龍が乗って西へ飛び、……そのお力で蒙古の大軍が退けられたとある」「龍蛇の信仰は、神事の上にはいっそうはっきり現れていた。上社の〈お室神事〉で、前宮の冬の祭りであった。地中に室を作ってご神体の蛇形をまつり、大祝以下神官たちがここに籠もって物忌一精進をした」とあり、「蛇と風は同気」として「天智・天武・持統三代は、中国の天文、陰陽五行説などが日本へ取り入れられた時期で、日本の原始的宗教にも陰陽五行の理論づけが行われ、大きく入りこんだ時期である。ところで陰陽二行における〈風〉は〈木気〉、その仲間は蛇、髪の毛などである。〈木気〉すなわち〈風〉で、〈木気〉を制するものは〈金剋木〉の原理から、金気の物を用いればよい事になる。鎌は手近にある金物で、木に鎌を打ち込むと、〈風〉を制する事になる。また、鎌は蛇に似ている」とある。

御霊代等としての薙鎌

これらのことを含め薙鎌は供奉具・招代・憑代・生贄・宝物・御霊代等々として諏訪信仰のそれぞれの祭事に登場してきている。

諏訪大社上社の宝殿の宝物に鏡、太刀と共に大小の薙鎌がある。宝物としての薙鎌である。

諏訪大社の御柱大祭は七年毎に行われているが、上社の場合では、御柱年の前年に神社関係者と山作り一統が登山して御柱とする生木を決定しているが、決定した御柱には注連縄を張り、本宮一之御柱等と書いた板を打ち、更に薙鎌を打ち込む。これは「おね鎌打ち」といい、薙鎌を打ち込まれたことにより、その生木は神に用いられる資格を備えたことになった。また御柱では、「上社の里曳きで、御柱より先に御船が曳かれるが、昭和43年の御船では、白幣を取り付けた高さ1.8mの幣軸の上部に二丁の薙鎌を打ち込んで」（薙鎌私考）いる。また能登（金丸村）の諏訪社（鎌の宮）にはご神体がなく、祭の日に神木杉に新しい鎌を打ち込み（能登国名跡志）神体とした。何れも招代としての薙鎌である。

『薙鎌考』には、『諏訪大明神絵詞』には「薙鎌衆魔摧伏の利剣也」とあり、薙鎌が祭の主役ではなかったが、江戸時代になると諏訪明神の憑代としての薙鎌説が登場してきて、『諏訪旧跡志』に諏訪神を祭るのには鎌を神幣とすること御柱の神事で上社の神輿の上に薙鎌を立てること、安曇郡中谷村の鎮守・諏訪社に薙鎌を遣わすが、それには祝の姓名・年号が彫りつけてあって、そこの御神体となっていることなどが書かれている。

また『諏訪信仰習俗』には「往古から七年に一度御柱年の前年に、諏訪大社から神器である薙鎌二口を奉持して、北安曇郡小谷村に赴き諏訪神社にその薙鎌を捧げ、更に翌日、国境の同村土戸の諏訪社で祭典を行い、国境の杉の巨木に薙鎌を打ち込む薙鎌打の神事（薙鎌祭）が行われる。『諏訪大明神絵詞』に〈寅申ノ支干ニ当社造営アリ……大行事ニ差シ定メ御符ヲキリ国中ノ要路ニ関ヲスエ神用ヲ分配ス……〉とあり、御柱祭の当年信濃の国より他の国に出る要路に関を構えたことがわかる。上社御柱の見立の折に神器である薙鎌をうちこみ神意を表示したと同じく、信濃の国境の確認、即も諏訪神の神威の及ぶ限りを薙鎌によって表示したのである」ともあり、薙鎌が御霊代にかかわる数々の役割を担ってきていることがわかる。

この小谷村の例もあり、薙鎌は諏訪神社から全国の末社におくられたものとも考えられた経過もあったが、検討の結果、現在ではそれが全てではないとされている。『薙鎌考』には「薙鎌は諏訪社の式年配布ということより、各社がそれぞれの理念で、造って行った一貫の祭式と考えた方がいいようである」とある。

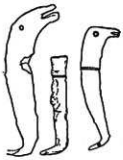
御射山信仰と薙鎌

『御射山祭の話』に御射山祭について「古代の狩猟は総て氏族や村落共同でやり、一定の場所に集合して狩猟神を祀って出発した。狩猟が終わればまた一定の場所に集合して、獲物を分配し、狩猟神に生贄を捧げてこれを祀った。諏訪大社の御射山祭は、これが後世次第に儀式化されたものとされている」とあり、『諏訪市史・上巻』には「諏訪大社の上社御射山社も下社（旧）御射山社とも湿原に面し、周辺を狩場としていた。両社の御射山社

五庵古墳からの薙鎌の出土状況

諏訪大社下社の薙鎌（供奉具）

昭和５年に旧御射山社附近で発掘された薙鎌
（『諏訪史』第２巻前編から）



『薙鎌考』で第１類とされた薙鎌群

年代がわかるものでは最古の薙鎌、天正18年の年号と奉納者諏訪新八郎の名が木柄に書かれている

新海三社神社御射山祭の御神体の薙鎌

『薙鎌考』で薙鎌の祖形とされた薙鎌群

金峰山修験道遺跡で佐久で最初に出土した薙鎌

新海三社神社の御射山社と御神体の薙鎌と刈払鎌形の薙鎌

第91図　各種の薙鎌

周辺には湿原に関連する原始・古代の遺跡があり、もとは山神信仰とみられ、のち湿原祭祀、水源信仰の祭場となったとみられている」とあり旧御射山から薙鎌が出土している。

このことは、『諏訪大社』（藤森栄一著）には「下社の旧御射山からは、多くの土師器盃（かわらけ）の破片や宋銭、刀、鉄鏃、馬具、薙鎌、宋代の青磁片などを出土していて、神殿らしい跡も確認されている。この大祭は鎌倉幕府の強い後援があって行われて北条氏の全盛期、承久の頃から栄えた」とあり、『長野県史・考古資料編』には「旧御射山の出土品の大半は、手捏ね製やロクロ製の土師質土器の坏破片で、次いで多いのが青磁の破片であった。鉄製品では諏訪神社の神器とされる薙鎌の欠損品が2個、表採品にほぼ完形品が1個、それに薙鎌の尾部かと推察されるものが1個であった」とある。

旧御射山での祭事では「大祝が風祝の性格をもっていた」と考えられているが、出土した薙鎌はその祭事のものと推定されるように、御射山祭と薙鎌は関わりが深いと思われる。新海三社神社の御射山祭もそうである。

新海三社神社は、興波岐命とその父神で諏訪大社の主神建御名方命と、建御名方命の兄神を祭神とする諏訪神社である。創立は、建御名方命の子神が佐久を開拓し祀られたとの伝承はあるが、古墳などが周囲にあって古い時代のものと推定は出来るが不明である。ただ、延文元年（1356）の『諏訪大明神画詞』に「又佐久新開ノ社ハ行程二日計也……二神湖中ニ御参会アリ」ともあり、また残されている應永4年（1397）の『御神渡注進状』にも「佐久新海明神」の参会が報告され、その後も続いており特に関係は深い。

この新海三社神社の秋祭で「往時、大神が狩をなされた故事」に因んだとされる御射山祭の神事が行われる。この神事は、神社の東の沢の中腹にある石祠前で行われ、本社から露払い（青年）、杖（青年）、幣帛・榊（神職）、薙鎌（神職・禰宜）、御神体（神職・宮司）、笛（神職）、太鼓（神職）、総代の行列による渡御が行われる。ここでの薙鎌は柄がおおよそ1.5mほどの、いわゆる刈払鎌であるが、御神体が祭祀用の薙鎌の形をしているのである。これは多分、薙鎌が象徴的に扱われていたことがあり、絶対的権威をもたせることになって御神体となったと考えられるが、この御神体は全長がおおよそ30～40cmで、頭部には目と口があり、後頭部から背にかけて多くの切り込みがあり、十二単の赤紫の衣服を着けている。

新海三社神社と古墳

このように御射山祭と薙鎌との関わりは非常に深い。また、新海三社神社の中本社と西本社の間に、御魂代石とよばれている石幢形の石造物がある。『延文三年成三月十二日』と年号が刻まれている。御魂代石の伝承は、この石に耳をあてると遠く諏訪湖の波の音が聞こえるといわれ、幢身には、龍ともいうべき神獣を浮彫りにしている。その全体像はどこか薙鎌に似ている。延文三年（1358）は南北朝時代であるが、この彫刻により新海神社ではすでに龍を象ったとする薙鎌に関連した祭祀があったと考えられる。御魂代石の龍には顔や足もありかなりリアルに描かれている。五竜古墳から出土した薙鎌は素朴で祖形に近い形状である。これは、御魂代石より薙鎌の方が先行していると考えられる。このことは新海三社神社の信仰と薙鎌との関わりも深いということになる。その意味で古墳から出土の薙鎌は新海三社神社との深い関わりを思わせる。

そして、古墳と信仰行事であるが、明治早々書かれた『新海神社之記』にも「神孫幾世継、此地に住給ひしと見ゆるは十二塚、四十八塚の（今現に存在するもの三十基）称あり」とあるように、もともとこの地の古墳は新海三社神社のものとされてきており、現在でも幸神1号古墳を初め15基が新海三社神社の所有となっている。この古墳で信仰行事が行われたことは考えられる。新海三社神社の境内に、今回の調査で6世紀末から7世紀とされた4基の古墳が存在し、これが神社の発生との関わりが考えられるところから、古墳と神社行事との関わりは時代でみても古くからのものであったと推定できる。

ただ、この古墳は出土した鉄鏃の編年から、6世紀末から7世紀初頭に埋葬が行われていて薙鎌の出現として

は非常に早いこと、型が現在の一般的な技巧を施した薙鎌とは違うことなど問題点もあるので、このことを次に探ってみたい。

薙鎌の形状と年代

次に形状からみた年代であるが、今回の出土の薙鎌は非常に素朴で頭部尾部の幅がほぼ同じである。現在残されている薙鎌に同形のものはないが、古いとされているものほどこれに近い。

『薙鎌考』では形状の判明しているもの20点を三つに分類している。第一類は旧御射山の祠付近で発掘されたものなど諏訪地方の発掘品で、比較的小型、着柄用のかえりを持ち、眼の円孔や嘴など鳥または蛇の表現はそなわっているが背には羽根状の刻みはない。これを鎌倉から室町初期と推定して、古いものとしている。

第二類は発達して大型化し、嘴や羽根状が切り込みが甚だしくなったもので、天正の年号のあるものをこれに含めている。第三類は頭部が異常に発達したもので、江戸末期のものではないかとしている。

現在、諏訪大社の遷座祭などの行列にみえる薙鎌は第三類に近いと思われる。また、新海三社神社御射山祭の御神体は、第二類と第三類の中間の形状に思える。

『薙鎌考』ではこのほかに、薙鎌の祖形として小谷総社の大薙鎌など、嘴が未発達で羽根状の刻みも明瞭でないものを挙げている。ただこれには尾部に着柄状の返りがないとしているが、今回、五庵古墳から出土した薙鎌は、前の項で記述されているように、上端を欠損しているが全長13.7m、厚さ0.3cmで、右側面が刃のように尖っていて、上端を欠損で口の状態は不明だが、0.2cmの目の孔があり、『薙鎌考』の分類でいえば、第一類やそれより古い「祖形」とされるものに近い。

古墳出土と薙鎌

佐久での薙鎌の出土例は川上村の金峰山修験道遺跡がある。この遺跡は平成5年5月から7月にかけて金峰山の麓の川端下地区で行われたもので、『金峰山修験道遺跡調査報告書』によると、社殿あるいは礼拝に関わるものと推定される中世末期から江戸時代中期初めにかけての建物跡、参詣者の祭場と推定される跡、江戸時代中期前半と推定される金峰山登拝道の鳥居跡などが発掘されたが、三箇所あった建物跡の一箇所から薙鎌が出土している。この建物跡から出土した鉄器類は6点で、握り型の鋏（ばさみ）、刀子、釘、中央に孔のある円板、鉄滓と薙鎌であった。この薙鎌は全長8.2cmで鼻、口を表す切り込みがあり、尾に該当する部位は頭部に該当する部位とは反対側へ曲がり尖っていて木へ打ち込むことも出来る状態である。

『薙鎌考』には「諏訪上社には、古い祭式用、行列の儀具が保存されていた。天正18年には鉾2、鎌2、薙刀1の奉納品にまじって薙鎌が1つ登場してくる。その薙鎌には、木柄に天正18年（1590）の年号と奉納者諏訪新八郎の名が書かれている」とあり、これが年代がわかるものでは最も古いもののようであり、また記録では、寛正5年（1464）の『守矢満実書留』に「内鎌打」とあるが、7世紀とはかけ離れている。ただ、『諏訪史』には「『旧跡志』にも下社より7年に1度ずつ、越後国堺なる安曇郡中谷村の鎮守諏方社に遣す……、これに下社の祝の姓名・年号を彫付くる也。此はいと古き例にて、彼地の神体と成るめり。伝え聞くに、白鳳の年号彫れるも有きとぞ」ともあり、白鳳時代は7世紀後半から8世紀初頭であるから古墳出土の年代に近くなる。

なお、諏訪大社上社前宮の「御室神事」は縄文時代とそっくりな竪穴住居を掘った中へワラで作った大蛇を御体として入れて祀るといわれているが、この五庵古墳の薙鎌は蛇に似ており、この祭事の後の姿を思わせる。

限られた時間であったため提示できない部分があるが、今後の研究課題として別稿にゆずりたい。

（丸山　正俊）

第５節　臼田町田口地区に所在する古墳群を中心とした歴史的環境

臼田町には50基の古墳が存在する。それを地区別にみると田口地区26基、入沢地区20基、臼田地区３基で（外に経塚１基ある）、千曲川右岸に多い。なかでも竜岡城（もと大奈良）駅から新海神社に至る間に、全体の約60％に当たる26基が集中している。臼田町以外の南佐久郡内の古墳は佐久町に２基（登録古墳）あるだけで、高野町を限界として、それより南方は南牧村平沢に至るまでの広大な南佐久郡内に１基の古墳も存在していないのである。

古墳は古代の墳墓の意味で、国家を支配した王（天皇）や、それにつづく中央や地方の有力な支配者となった豪族たちが、多くの人民を使役して築かせた巨大な墓である。その盛土の外形から、前方後円墳、方墳、円墳を基本形として、いろいろな形があるが、そのうち前方後円墳は大和の天皇と、これに密接な関係をもった、中央、地方の有力な首長だけが築造することができたといわれるが、佐久地方にはまだ前方後円墳は確認されず、南佐久地方の古墳はみな円墳（円形の高塚古墳）である。古墳が築造されたのは、弥生時代が終ってから奈良時代になるまでの約400年間で、４世紀（古墳前期）５世紀（同中期）６世紀（同後期）７世紀～８世紀初頭（終末期）を古墳時代とすることができる。８世紀初頭をもって古墳築造に労働力を投入する時代が終って、火葬へ移行する。大宝律令（702）の施行と相まって、墓制も古墳時代に終りを告げ、時代は律令体制の社会に完全に移ったのである。

古墳に副葬される土師器の形式の研究の進展によって、古墳の築造年代の区分はかなり細密化しているが、概略的にみて、４世紀、５世紀には巨大前方後円形の大首長墓が多くつくられ、５世紀中葉から馬具の副葬がはじまる。６世紀初頭から横穴式石室が普及し、山間盆地にもたくさんの群集墳がつくられるようになる。６世紀後半から７世紀にかけては、横穴式石室の群集墳が盛行し、古墳数が爆発的に増加すると共に、多埋葬、追葬が行われる。全長100ｍを越す前方後円墳は関東（群馬県等）を除いては作られなくなる。７世紀前半から中葉にかけて、東国を除いて前方後円墳は消滅し、群集墳への追葬は行われても、新たな築造はなくなる。上層官人だけが古墳を作るが、墳形は方墳に代わった。巨大化してきた横穴式石室も、石舞台古墳を境に石室規模は縮小し、石室内部の美化に力を入れ、仏教美術の影響もみられる。７世紀後半から８世紀初頭には、天皇家や上級官人だけが古墳（八角墳や方墳・円墳など）を作ったが、民衆は古墳作りを停止し、古墳時代とはよべない。

８世紀初頭に火葬が開始され、太安万侶（養老７年(723)没）などのように銅板墓誌を用いる葬法もみられた。しかし東北地方では、８世紀以降も蕨手刀、直刀、刀子、玉類、土器類、和銅開珎などを出土する墓が残っていて、律令制の完全実施がむずかしかったことを物語っている。

信濃国では、森将軍塚や川柳将軍塚を初め４世紀末から５世紀代の初期前方後円墳は、弥生時代に稲作の発展した千曲川流域の川中島周辺に集中している。しかし千曲川をややさかのぼった上小や佐久平では、前方後円墳の発達はみられず、佐久平では前方後方型の墳丘をもつ滝の峰１・２号墳（佐久市平井滝の峰）が確認されているが、これにつづく古墳がまだ発見されていない。佐久市北西ノ久保の５世紀後半から６世紀中ごろに築かれた13基の古式群集墳（初期群集墳）からは、円筒・朝顔形・人物・動物・家形・盾・太刀・靫など各種の埴輪が発見され、埴輪の出土量は県下一といわれている。臼田町の古墳は、千曲川流域の最上流に存在する古墳群で、田口の26基は一古墳群の規模としては、佐久平最大級の古墳群の一つということができる。

以上の古墳築造の歴史的経過や出土品等からみて、臼田町の古墳のつくられたのは、６世紀後半から７世紀にかけて、横穴式石室の群集墳が盛行し、多埋葬や追葬が行われた時期にあたり、それは蘇我馬子（？－626）の墓といわれる石舞台古墳が築造されたと考えられる、７世紀前半の頃と推考したい。

新海神社を頂点とする田口の古墳群は、上信国境の田口峠付近に発して西流する雨川が、千曲川に流入する付近の右岸段丘上にあり、幸神、外九間、中原と続く古墳群の集中する段丘の末端に立てば、西方段丘崖下（比高10m）の一帯に千曲川畔の水田地帯が展開する。標高約700m、下流には緩傾斜する佐久平の平坦面が続く。封土を失って巨石を積んだ石室の上に、天井石の巨岩が広大な畑地の中にそびえ立っている風景をみて、これはまさに「石舞台」のようだと嘆声を発した見学者の姿が印象的である。これらの多くの巨石、清岩の石材は、この地方の周辺の山に産出する溶結凝灰岩の「佐久石」である。この地は石材に恵まれた、比較的平坦な緩傾斜地であるが、古墳の築造に使役された資材と労働力は膨大なものであったと思われる。

古墳の築造工程としては、選地、設計、周濠の掘削、石室用石材の運搬・加工、木棺の製作、墳丘の造成、土砂の運搬、葺石用礫の採取等がある。これに要する工具としては、鉄製のオノ、石切ノミ、タガネ（クサビ形鉄器）、スキ、クワ、モッコ、コロ、木製のシュラ等がある。それら工具を用いて築造に要した、労働力の算定はむずかしいが、一例をあげてみると、墳丘の盛土の運搬は500mの近距離でも1日2人で1㎥、版築10㎡は4人で1日、葺石運搬は1㎥を1km運ぶのに4人で1日を要する等で想像を絶する労働力が必要であった。「箸墓（奈良県桜井市三輪）は昼は人が作り、夜は神がつくった」と伝承され、仁徳天皇陵の造営には、1日の動員数を1,000～2,000人、1年間200日働かせるとして、15～20年の歳月を要したであろうという試算がなされている。昼夜兼行の集団労働も進められたのであろう。

古墳築造の労役に服する役夫は、その古墳の被葬者である豪族の支配下にある人民を徴発して労働にあたらせたから、古墳の施設や墳丘の大きさは、その豪族の支配力の大きさを表すものといえる。蘇我氏が生前自分の墓を作るのに国家の部民や上宮王家の部民まで使役したので、王家の女王が怒ったと日本書記にある。地方の豪族どうしの間にも、その所有人民の強制徴用などの争いもあり、古墳は豪族の政治力や経済力の反映であったといえる。

田口の古墳が、どのような豪族によって築造されたかは明らかでないが、古墳築造を可能にするような強力な豪族の発生基盤となったものは何であろうか。それは千曲川と、雨川、吉沢川など周辺地域の河川の流域に於ける古代稲作の発展によることが大であることは、千曲川流域の川中島地方から、上田・小県・佐久平に及ぶ稲作と古墳の分布状況をみれば明らかで、古代稲作の発展のみられない南佐久郡南部の高冷地帯には、古墳の存在がまったく見られないのである。

稲作は鉄器と共に、弥生時代に大陸から伝えられたもので、弥生時代後期2～3世紀頃には千曲川流域一帯は箱清水式とよばれる、赤色塗彩された土器を標式とする文化圏を構成していた。臼田町はその南限部分を構成していた。臼田町の弥生時代遺跡としては美里在家、下ノ城、勝間、栗ノ木、広沢（以上旧臼田、切原地区）離山、原、大奈良、金原、清川入、明法寺、割塚、神原道場、田中、井上、遍照寺、荒巻、山際、下海戸山の前、臼窪、月夜平（以上田口・入沢地区）の諸遺跡がある。そのうち発掘調査によって集落跡の検出されているのは幸神・外九間等の古墳群の西に連接する原遺跡で、弥生時代後期住居址2、特殊遺構1、古墳時代末住居址2、奈良時代住居址4軒等であり、三分南方の井上遺跡では、弥生後期初頭の土器多数と、古墳時代末期住居址4軒が出土している。井上遺跡の千曲川対岸の勝間原遺跡では弥生後期住居址が2軒、その南に接する丸山遺跡では同4軒が検出されている。北方、現在佐久市との境界に近い、千曲川畔にある離山には3基の古墳があるが、昭和2年、道路改修工事の際、離山の南側裾部から4ケの銅釧（くしろ）（青銅製の腕輪）が、弥生土器底部破片・人骨片と共に発見された。幅1cm、厚さ0.2cmの青銅製の環で、弥生時代の貴重な装身具であるが現在は所在不明となっている。佐久市岩村田の上直路遺跡弥生時代住居址から、右腕に5、左腕に10点の銅釧を着装した人骨が発見されている。

古代には千曲川は十日町辺で分流して、一流は現小海線沿いに離山の東方を流れていたと考えられる。千曲川

右岸の平野は、標高660mの現佐久市中込付近から750mの臼田町入沢・十日町付近までは、千曲川・本・支流の水利を得て、水田経営が発達し、弥生集落の密集地帯を形成していたものと思われる。ちなみに竜岡城駅付近の標高が約700mである。近年の稲作の冷害状況をみても、この付近の安定度はかなり高く、古代稲作の可能性が裏づけられると思われる。前記した弥生時代の発掘調査による集落戸数は、すべて緊急発掘のための限定された小範囲に限られた僅かな資料であるが、既出遺物や表面採取を参考にすれば、原遺跡につづく大奈良部落内から、金石地区にかけては、集落全体が遺跡であり、弥生後期の赤い土器や、古墳時代末期の鬼高式土器が多く出土している。また雨川南方の井上遺跡の発掘調査については既に述べたが、その北につづく田中遺跡からも弥生時代の土器・石器等の遺物が採集されていて、この辺一帯に弥生時代・古墳時代の集落や水田跡の存在が十分に予想され、現佐久市域から続く、弥生時代の人々の豊かな生活の営まれた地域であったと考えられる。

このように雨川右岸の河岸上の古墳を中心とする千曲川右岸一帯には、集落発展の基盤となる弥生時代稲作の展開が確認できるのであるが、それにつづく、古墳時代の前期、中期の古墳の築造が見られず、またその時代の集落あともまだ発見されていない。この傾向は佐久市に於いても同様で、佐久市に前方後円など初期古墳の見られないのがそれを物語っている。その間の水田や畑の跡もまだ佐久地方では発見されていない。佐久市域では弥生時代の終り頃には、集落の中に権力者の墓として注目される、方形周溝墓が出現し、山頂の方形墳丘墓へと発展する。佐久市野沢の社宮司遺跡より出土した、白銅鋳製のペンダントは、朝鮮半島から伝えられた多紐細文鏡を再加工したものだが、その伝来の由来はわからない。佐久市北西の久保の中期古墳から出土した人物、飾馬をはじめ多数の形象埴輪は県下第一といわれ、後期の東一本柳古墳からは、青銅金張りの馬具の飾金具類等がたくさん出土して、中央文化との密接な関係や影響を物語っているが、その被葬者が、どのような氏族で、どのような活動をしたか等のことは、まだほとんど明らかにされていない。大和朝廷のもとに地方豪族たちが、国造、県主として存在するようになった時代であるが、佐久地方の具体的な動きは明らかでない。佐久は大和朝廷の力が、東国にのびていくための前線基地としての役割を負わされていたことは、内山峠や田口峠をおさえている地理的位置からみてたしかであるのだが、その具体的な活動についての把握はできない。

田口地区を中心とする南佐久地方の古墳群が築造された７世紀前半は、大和朝廷が仏教を取り入れ、随・唐と国交を開き、推古天皇のもと聖徳太子が摂政として、冠位を定め、憲法を制定し、国史を編纂する等して、国政の整備と天皇権の確立をはかっていた時代であるが、大化の改新（645）までにはまだ20年はやく、佐久の政治状勢は記録の中には何一つわからない。そうしたなかで、わずかな推理の手がかりを与えるものは、三分と大田部という二つの地名である。三分は「ミヤケ」の転化であるといわれる。「ミヤケ」が「ミワケ」と転訛し、「三分（みわけ）」と漢字で書かれ、ついに「ミブン」と音読みされるようになったのである。「ミヤケ」は、屯倉（ミヤケ）で、大化改新以前の大和朝廷の直轄領で、穀物を収納する倉庫や経営上の事務所があった場所で、土地や耕作農民までも含めて屯倉とよばれた。「大田部」は「田部」に美称として大の字をつけてよんだものである。「田部」（タベ）は大化改新以前に皇室領の屯倉で耕作していた部民で、他地域の民を集団的に移住させたり、帰化人を集住させたりして形成したものといわれる。広大な良質の田地を占有する屯倉に、田部とよばれる農民を集団的に定住させて耕作し、朝廷の経済力を増大し、天皇家の基礎となったのが屯倉と田部であるとされている。この千曲川の沿岸平地に、屯倉と田部の存在を示す、三分（屯倉）と太田部（田部）という二つの集落が今も残っていることは貴重である。想像をたくましくすれば、この佐久の「屯倉」「田部」を経営した支配者こそ、田口の古墳群の築造者であり、被葬者であったといえるかも知れない。なお今後の研究を要することである。

ちなみに臼田町出土の最も貴重な古代の文化財といわれるものに、蕨手刀（臼田蛇塚古墳と新海神社付近英田地畑古墳各１出土）、銙帯具（入沢五霊西古墳出土）、物部楮丸の銅印（清川上原氏宅地出土）である。蕨手刀は

東日本に分布が広く、東北地方に特に多く出土する柄頭が蕨手状をなす鉄製の刀で、蝦夷征討に用いられた刀ともいわれ、奈良時代から平安初期に用いられたと推定されている。入沢五霊西出土の鈴帯具（銅製帯金具）は、養老令（718年）の「衣服令」に、六位以下の官人が用いるように規定された烏（ためいろ）皮腰帯の帯金具で、平安時代のはじめ延暦15年（796）には全面的にその使用が禁止されて、石帯にかえられている。物部諸丸の銅印は、諏訪下社の「売神祝印」（国重要文化財）、松本市の遺跡出土の「長良私印」と共に長野県下に３つしかない銅印の一つで、しかも個人の「姓と名」を完全に記した古代の印は、全国的にも極めて少なく、重要な史料であるが、私印が使われたのは平安初期にだけ限られたものとの見解が有力である。したがって、これらの蕨手刀、鈴帯具、銅印という貴重な三種の古代史料は、いずれも奈良時代から、平安初期につくられ、使用されたものであって、７世紀前半に築造されたと考えられる。田口の河岸段丘上の古墳群の築造者に直接結びつけて考えることはできない。この古墳群の築造については、興味ある歴史上の課題として今後の研究に託されることになる。

（井出　正義）

引用参考文献

1．臼田町教育委員会　1979年「臼田町の文化財」
2．　〃　1980年「井上遺跡」
3．　〃　1988年「五霊西12号古墳」
4．　〃　1988年「臼田町遺跡詳細分布調査報告書」
5．　〃　1989年「原遺跡」
6．　〃　1987年「勝間原遺跡」
7．　〃　1991年「丸山遺跡」
8．　〃　1993年「宮東・大工原遺跡」
9．　〃　1995年「七曲下遺跡」
10．　〃　1995年「影丸山遺跡」
11．長野県史刊行会　1988年「長野県史考古資料編全一巻(四)」
12．群馬県史刊行会　1991年「群馬県史　通史編２　原始古代２」
13．佐久市教育委員会　1988年「長峯古墳群」
14．　〃　1991年「石附窯址群Ⅱ」
15．望月町教育委員会　1983年「真光寺第１号古墳」
16．川上村教育委員会　1994年「金峰山修験道遺跡」
17．岩崎　章也　1988年「古墳時代の信仰と葬制」　長野県史考古資料編全一巻(四)
18．土屋　長久　1975年「信濃佐久平古氏族の性格とまつり」
19．梶　隆　1987年「佐久地方における奈良時代を中心とした土器様相」「長野県考古学会誌　55・56号
シンポジウム特集号信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」
20．大塚　初重他　1983年「季刊考古学　第３号　古墳の謎を解剖する」
21．財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983年「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ－鉄鏃について－」「研究紀要」
22．福永　武彦訳　1968年「古事記」　日本文学全集　河出書房（註２）
23．佐久考古学会　1990年「赤い土器を追う」
24．竹内　垣　1965年「蕨手刀を出土した南佐久郡臼田町芙田地畑古墳」　信濃史学会　「信濃」　18－４
25．藤森　栄一　1962年「藤森栄考」　信濃史学会　「信濃」　14－11
26．藤森　栄一　1965年「諏訪大社」
27．伊藤　富雄　1958年「御射山祭の語」
28．長野県教育委員会　1972年「諏訪信仰習俗」
29．向山　雅重　1975年「日本の民俗」
30．駒原　健　1977年「藤森私考」　信濃史学会　「信濃」　29－１
31．宮坂　高十　1979年「諏訪大神の信仰」
32．諏訪市教育委員会　1980年「諏訪市の文化財」
33．信濃毎日新聞社　1980年「諏訪大社」
34．諏訪市　1988年「諏訪市史　中巻」
35．諏訪市　1995年「諏訪市史　上巻」
36．島田　恵子　1989年「佐久平南限の古墳群について」　東信史学会　「千曲」　60号（註１）

あ と が き

臼田町には50基の古墳が登録されています。その内、今まで調査された古墳は３基あり、美田地畑古墳、五霊西12号古墳が記録保存されたのちに消滅してしまいました。蛇塚古墳は清掃調査だったので墳丘も復元されて昔古の面影を残していますが、宅地が接近して北に浅間、南に八ヶ岳連峰を迎く景観は失われてしまいました。

今回の試掘・確認調査は、このように失われ、破壊の進む古墳群をなんとかして後世に残していくためにとの配慮から、数年前文化財係をしていた優秀な職員が公園化の試案を提出したところ、その３年後にこの計画が文化庁に受け入れられ、国庫補助を受けて前段階の試掘・確認調査が実施される運びとなったのです。

調査は、荒れ果てた墳丘とその周囲の雑木と雑草を刈り取ることから開始されました。石室の巨石がはずされて墳丘にずり落ちているのをはじめとして、玄室内にはゴミや硬が投げ込まれ、側壁の石がはずされて崩れそうだったりとかなり危険の伴う作業もありました。初年度の平成６年度は寒い12月10日まで現場作業があり、調査団の皆さんにはご苦労をおかけしました。翌７年度は調査と報告書作りがあるために日程的に厳しくなることから、引き続いて図面、遺物の整理を年度内に終了させるために３月まで作業をしました。

７年度の現場作業は７月19日から開始したのですが、あいにく暑さが続き汗でぐちゃぐちゃになる大変な作業でした。それでも破壊が前提となる記録保存の発掘調査と異なり、一基ずつ古墳の草の根を掘って雑草を寄せつけないように取り去り、崩れた石を元の位置に戻し、ゴミの入った玄室を清掃し、古墳の構造を図面化していく作業は、仕上がったきれいな古墳の姿を見ると、今までの苦労が報われるような気持ちになり救われました。

幸神古墳群は、入沢古墳群と共に佐久平南限の古墳群ですが、とりわけ幸神古墳群は調査された古墳が全くなかったのでその状況は謎とされていましたが、この調査で内部構造、築造時期がかなりはっきり見えてきました。構造の変化から設計者の違いが分かり、強いては古墳に埋葬された被葬者のグループ分けにまで発展できそうです。古代社会の存在が身近に感じられるようです。

臼田町は、遠い弥生時代に日本最高地点で稲作が開始された歴史的意義のある町です。寒冷地に稲作を開始した偉大なる名もない弥生人が私たちの町を築いたのです。さらに時代が下って南佐久郡南限の古墳文化が花開きました。このように素晴らしい文化を残してくれた臼田町の祖先に感謝すると共に、大切な文化財を地域住民が一体となって守っていくのが現在に生きる私たちの役目ではないでしょうか？

発掘調査期間中、大勢の方々が見学に訪れ、また、グループで勉強会が開かれ大きな感心が寄せられました。老大卒業生で組織するふるさとの歴史を学ぶ会の皆さんは、バス一台65名で訪れました。さらに、地主さんの中で古墳の見学ができるようにと周囲の土地をご寄付して下さった方、これからして下さると申し出て下さった方と大変有難いお話もあります。さらに、古墳群の所在する地元原地区の若い皆さんで組織する翔友会では、毎年古墳群の清掃をして下さることになり、すでに７年度から実施されました。宮代地区の常会も話が進んでいるようです。自分たちの周囲の文化財を守ろうとするあたたかいご支援にこころ強い限りです。

最後になりましたが、本調査にあたり南佐久町村会事務局長布施元広氏のご援助に深く感謝申し上げると共に、６年度は自己の職を投げ打ってまでも調査に尽力していただき、さらに本報告書作成にあたり休日も返上して夜遅くまで実測・トレース・原稿執筆に全力を傾け、刊行にこぎつけた担当者の島田恵子氏の労にこころより感謝申し上げます。尚、新海神社をはじめとする地主さん、周囲の畑、住宅の皆さんには深いご理解とご協力により無事調査が終了しましたことを厚くお礼申し上げます。現場作業をされた調査団の皆さんご苦労さまでした。

（調査団長　三石　延雄）

1. 清掃終了後の墳丘

2. 調査前の玄室

3. 復元した古墳

4. 復元古墳遠景（東方より）

5. 石室近景（南方より）

6. 石室近景（北方より）

7. 羨道左側壁の石積み

8. 玄室（敷石一部復元）

1. 新海神社東御陵古墳石室全景

2. 調査前の奥壁が露出した状態

3. 墳丘・石室全景(南方より)

4. 玄室に入り込んだ木の根を伐る。

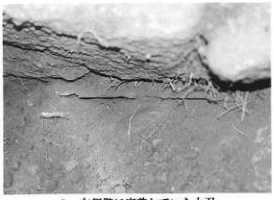
5. 左側樣を越えて玄室に入り込んだ杉の根

1. こけの生えている部分のみ露出していた

2. 枯枝・草・木を抜き取った後の全景

3. 石室プランを確認

4. 掘り下げ確認状態



5. 左側壁に密着していた大刀

6. 小刀・鉄鏃出土状態

7. 刀子・鉄鏃出土状態

8. 水晶製勾玉出土状態

図版四（新海神社新発見古墳）

1. 玉類・耳環出土状態

2. 玄室敷石状態

3. 石室全景

4. 石室全景(北方より)

5. 復元された東御陵・新発見古墳(北方より)

6. 盛土復元した東御陵古墳

7. 同新発見古墳

図版五（新海神社西御陵古墳）

1. 雑木伐採後の墳丘

2. 石室全景

3. 傾斜面に築かれた古墳全景

4. 最上段からの全景(北方より)

5. 玄室棺床面の敷石(南方より)

6. 敷石直上の耳環出土状態

7. 右側壁際の副葬品(鉄鏃)

図版六（新海神社五庭古墳）

1. 羨道

2. 玄室閉塞際の決の木

3. 奥壁を壊して出入口としている

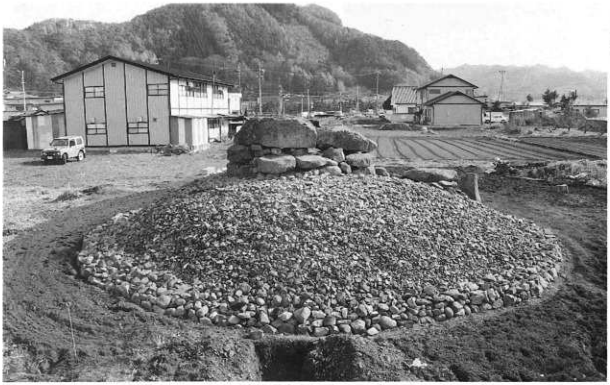
4. 奥壁整備状態

5. 倒された奥壁

7. 玄室出入口出土の大刀・耳環

6. 左側壁（袖無し）

8. 左側壁際出土の鉄鏃・雍鎌



1. 幸神1号古墳全景（西方より）

2. 露出している天井石・奥壁（北方より）

3. 幸神1号古墳の羨門～羨道

4. 墳丘盛土、裏込め構造
観察トレンチ

5. 大刀出土状況

6. 奥壁状況

図版八（幸神1号古墳）

1. 遺物出土状態

2. 玄室遺物出土状態

3. 羨門付近遺物出土状態

4. 羨道・玄室

5. 右側壁の石積み

6. 左側壁の石積み

7. 人骨出土状態

8. 松の木の下に幸神3号古墳が所在していた。

1. 幸神2号古墳全景（南方より）

2. 羨門～羨道～玄室全景

3. 玄室から羨門を望む

4. 幸神2号古墳全景（西方より）

5. 調査前の墳丘全景

図版十（幸神4号古墳）

1. 幸神4号古墳全景（南方より）

2. 玄室閉塞状態

3. 玄室

4. 右側壁の石積み・土器出土状態

5. 左側壁の石積み・骨出土状態

1. 人骨出土状態

2. 頭蓋骨出土状態

3. 玄室

4. 石室全景（南方より）

5. 羨道と前庭部仕切り石の矢痕

6. 石室全景（東方より）

7. ヤックラから姿を現した石室

8. 崩落していた天井石を元に戻す
（墳裾の石積み、墳丘の礫は復元）

図版十二（幸神5号古墳）

1. 調査前のヤックラ

2. ヤックラから姿を現した天井石

3. 石室を確認

4. 姿を現した石室

5. 正方形の玄室

6. 羨道が破壊されている

7・8. 玄室を表面に出してヤックラを以前の姿に戻す（墳裾の列石は復元）

図版十三（幸神6号古墳）

幸神6号古墳全景

（ヤックラ化した墳丘から天井石上面を表面に出す）

2. 奥壁と天井石

3. 左側壁

4. ヤックラの中から現れた古墳石室

5. 調査前のヤックラ（西方より）

図版十四（外九間1号古墳）

1.右側壁の石積み（持ち送り）

2.低い玄門の上に大きな閉塞石が架かっている。
（左右両側壁の持ち送り状態が分る）

1. 天井石の架った羨道（羨道に天井石が残っていた唯一の貴重な古墳）

2. 墳丘の草取り（周囲は麦畑）

3. 古墳全景（東方より）

4. 露出している天井石と空洞となっていた玄室

5. 閉塞石上面と羨道の天井石

図版十六（外九間2号古墳）

1. 外九間2号古墳全景

2. 露出している奥壁

3. 露出している右側壁と天井石

4. 玄室内部と左側壁、ずり落ちた天井石

5. 奥壁、左側壁とずり落ちた天井石

1. 調査終了後の全景（確認後元の状態に戻す）

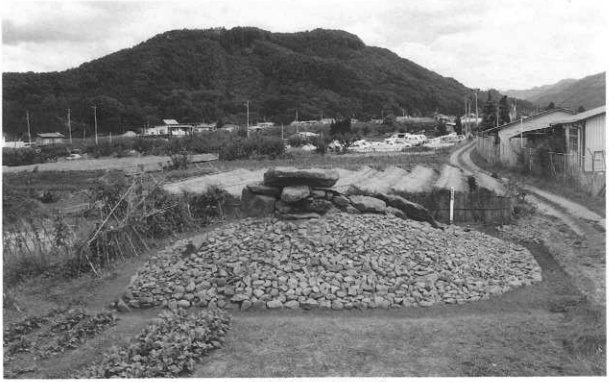
2. ヤックラの中から現れた石室

4. 右側壁

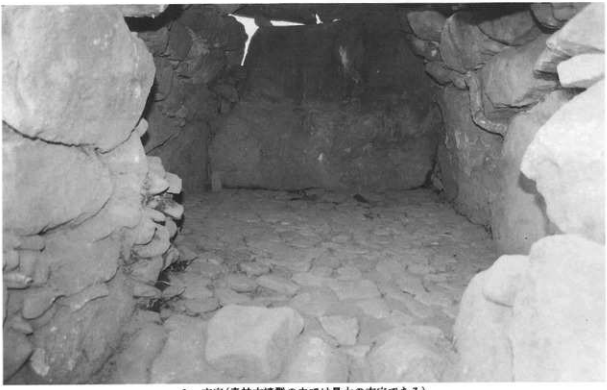
3. 奥壁・天井石

5. 調査前のヤックラ

図版十八（中原1号古墳）



1. 中原1号古墳全景（西方より）



2. 玄室（幸神古墳群の中では最大の玄室である）

1. 第一次調査終了後の全景（天井石が後退に崩落）

2. 崩落した天井石を元の位置に戻す

3. 第二次調査終了後の石室全景

4. 玄室全景（敷石は復元）

5. 土器出土状態

6. 露出している奥壁・天井石

7. 雑木・雑草を取り除いた墳丘

8. 露出している右側壁・天井石

図版二十（中原2号古墳）

1. 調査前の古墳（荒地となっている）

2. 雑草に覆れた墳丘（昨年秋清掃しておいた）

3. 羨門の前はヤックラとなっていた

4. 清掃後の玄室

5. ヤックラの中から現れた羨門

6. 調査終了後の全景（東方より）

7. 古墳前方の岩
（江戸時代の処刑場であったと伝えられている）

8. 古墳全景（北方より）

1. 右側壁の石積み(上から)

2. 奥壁

3. 玄室へ崩れかけた左側壁

4. 人骨・刀装具・土器出土状態

5. 右側壁の石積み(玄室内から)

6. 左側壁の崩れ状態

6-1～4　1. 新海神社中御陵古墳出土鉄鏃・管玉(1:2)

10-1～2　2. 東御陵古墳出土鉄鏃・耳環

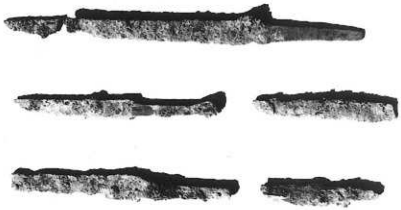
14-1(1:3.2)

10-3～4　耳環(1:1)

15-1～6　3. 新海神社新発見古墳出土大刀・小刀・刀子・鉄鏃(1:2.5)

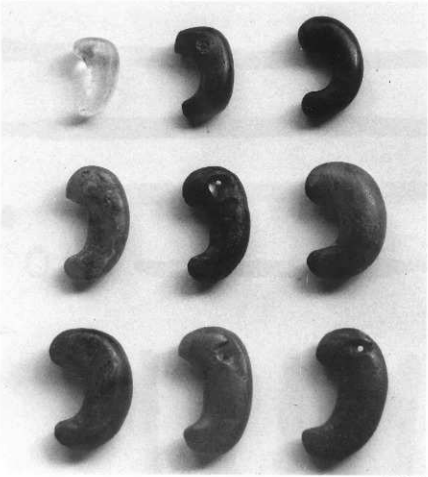
22-1～7　4. 新海神社西御陵古墳出土鉄鏃(1:2)

22-8～19　23-20～27　　1.　新海神社中御陵古墳出土鉄鏃(1:2)

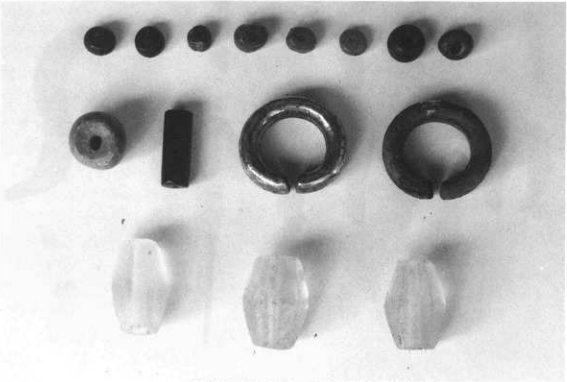


21-1～5　　1. 新海神社西御陵古墳出土小刀・刀子(1:3)

24-1～9　　2. 新海神社西御陵古墳出土耳環(1:1)

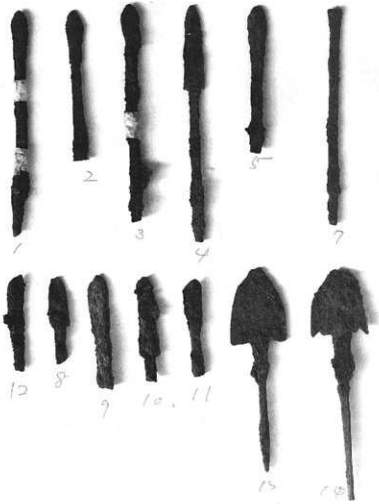


17-1～9



16-1～15　　1. 新海神社新発見古墳出土装飾品(玉類・耳環)(1:1)

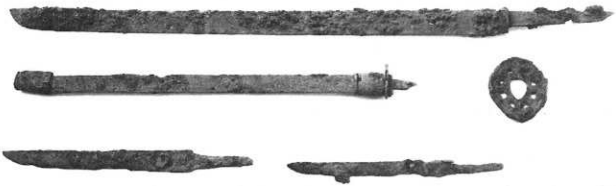
26-1～7　(1:5)



27-1～14 (1:2)

29-1　(1:3)

1. 五庵古墳出土大刀・刀装具・鉄鏃・鉄鎌



33-1～4　1. 幸神1号古墳出土大刀・小刀(1:5)

35-1～2　2. 幸神1号古墳出土勾玉・鉄鏃(1:1)

34-1～4

3. 幸神6号古墳出土臼玉(1:1)

52-1～3　4. 幸神5号古墳出土鉄鏃・刀子(1:2)

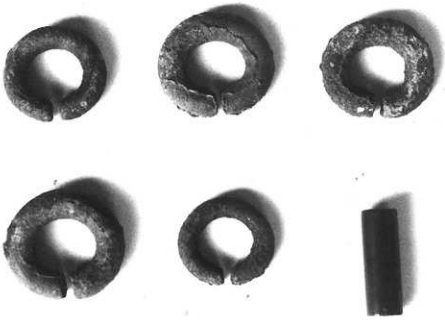
68-1～4　5. 中原1号古墳出土鉄鏃(1:2)

47-1～5　1. 幸神4号古墳出土小刀・刀装具(1:3)

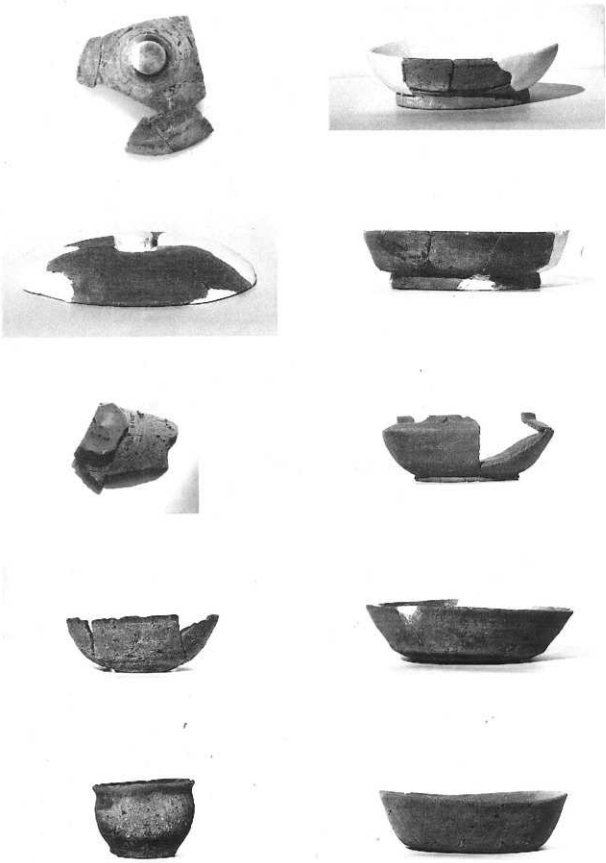
47-6　2. 幸神4号古墳出土耳環(1:1)

48-1～9　3. 幸神4号古墳出土鉄鏃(1:2)

28-1～9　　1. 五庵古墳出土耳環・玉類(ガラス子玉・切子玉・管玉)(1:1)



69-1～6　　2. 中原1号古墳出土耳環・管玉(1:1)



36-1～11　　1. 幸神1号古墳出土土器(1:3)

42-2

43-1

41-1～2　鉄鏃(1:2)

耳環

42-1

43-4　(1:3.5)

1.　幸神2号古墳出土遺物(1:4)

49-1～13

1. 幸神4号古墳出土土器(1:3)

54-3

1. 幸神6号古墳出土土器

54-1 (内耳土器)

61-2

2. 外九間2号古墳出土土器

63-2

3. 外九間3号古墳出土土器
(下. 頸部の接合痕)

70-2

70-3

70-5

70-7

4. 中原1号古墳出土土器(1:3)

70-6

74-1～7

1. 中原2号古墳出土小刀・刀子・刀装具(1:3.5)

75-1

75-2

75-5

75-3

75-6

2. 中原2号古墳出土土器(1:3)

75-4

暗文

糸切り痕

墨書土器

ヘラケズリ痕

椀底部ヘラケズリ痕

坏底部ヘラ切り痕

底部ヘラ記号

椀底部回転ヘラケズリ

1. 成形・調整の特徴(底部)・暗文・墨書

図版三十六（調査スナップ）

1. 調査は墳丘周囲の草刈りから始まる

2. 墳丘の整備(草の根抜き取り終了)

5. 登りの階段をつくる

7. 現地説明会

3. ヤックラに埋っていた石室姿を現す

4. 墳裾の整備

6. クレーンでずり落ちた天井石を戻す

8. バス一台で勉強に訪れた老大卒業生の皆さん

幸神古墳群

発行日　平成8年3月20日
編集者　幸神古墳群発掘調査団
発行者　臼田町教育委員会
印刷所　臼田活版株式会社